

3 小林特使による日蘭会商

448

昭和15年7月17日

有田外務大臣より
在バタビア齋藤総領事宛(電報)

日蘭印間の重要懸案を協議するため蘭印へ特派
大使を派遣する旨バプストへ申入れについて

本省 7月17日後4時50分發

第三一九號

一、十六日谷次官ヨリ「パ」公使ニ對シ帝國政府ハ日蘭印間ノ重要諸懸案審議ノ目的ヲ以テ近ク酒匂大使ヲ主班トシ若干ノ外務省員及關係者ノ専門家數名ヲ隨員トシ且蘭印物産中ニハ軍需品アル關係上陸海軍軍人各一名ヲ加ヘタル「ミツシヨン」ヲ蘭印ニ派遣スルコトナリタル處右ニ付テハ既ニ次官「パ」公使間ニ話合濟ノ次第アルモ此ノ際至急和蘭政府及蘭印總督ノ諒解取付方竝ニ一行ニ對スル便宜供與方取計ハレ度旨及齋藤總領事ハ大使ヲ補任シ交渉ニ當ラシメ度ニ付總領事ニ對シテモ代表ノ一員トシテノ待遇方希望ス尙我方トシテハ蘭印問題ノ重要性ニ

鑑ミ直接總督トノ交渉ヲ希望スルモ萬一總督ニ差支アルニ於テハ總督ニ代ルヘキ有力ナル代表者ヲ任命セラレ度旨申入レタリ

二、右ニ對シ「パ」ハ「ミツシヨン」ノ派遣ニ付テハ異存ナカルヘク早速政府ニ電報シ出來得ル限り速ニ回答スル樣取計フヘキ旨及軍人ノ派遣ニ付テハ目下蘭印ハ「ナーバス」ニナリ居ルニ付成ルヘク高官ニ非サル者トシ且出來得レハ「シビル」ノ形式ニテ參加方希望スル旨述ヘタルニ付次官ヨリ貴方ノ懸念ハ尤モノ儀ト存セラルルニ付成ルヘク希望ニ副フ樣取計フヘキ旨答ヘ置ケリ

三、尙政府側一行トハ關係ナキモ民間ニ於テモ向井忠晴ヲ主班トスル實業家數名ニ若干ノ専門家ヲ附シ主トシテ石油ノ買付及利權獲得ニ關シ民間當業者ト交渉ノ目的ニテ政府側ト前後シテ蘭印ニ派遣スルコトナリタルニ付右一行ニ對シテモ目的達成上應分ノ便宜供與方依頼セル處「パ」ハ之ヲ承諾セリ

四、大使一行ハ出來得レハ本月中ニ出發セシメ度意嚮ナリ顔觸(約十名)及出發日取等ハ決定次第電報スヘシ

「スラバヤ」へ轉報アリタシ

米、獨、英へ轉電セリ

獨ヨリ伊へ轉電アリタシ

~~~~~

449 昭和15年7月29日 松岡外務大臣より  
在バタビア齋藤總領事宛電報)

蘭印における石油採掘權獲得等のため実業家

派遣について

本省 7月29日後9時30分発

第三三三號(極秘)

往電第三一九號ノ三二關シ

今回政府ハ實業界有力者ヲ貴地ニ派遣シ石油資源ノ獲得及賣油等ニ付左記工作ヲ爲サシムルコトトセリ

一、先ツ「ボルネオ」方面ニ於ケル蘭印政府ノ保留地域ニテ採掘權ヲ取得セシメ度其ノ目標トシテハ(1)「タラカン」

島對岸及(2)現ニBOMノ試掘地タル「カリオラン」ノ隣

接地域ニ對スル利權ノ設定

二、「スマトラ」爪哇ニ於ケル鑛區ニ對スル既得權又ハ既設石油會社ノ株式買收

三、既ニ御承知ノ通我方ニ於テ一百萬觔ノ買付方交渉済ナル

モ更ニ今後多量買油ヲ圓滑ナラシムル様蘭印石油業者ト

協議セシムルコト

四、派遣員ハ三井ノ向井專務(往電第三二五號參照)ヲ主班ト

シ協和鑛業本多社長外六名(向井ニハ隨員二名本多一行

ハ計五名八月二日出發豫定)ナルカ全部先ツ貴地ニ到リ

準備工作ヲ爲ス筈

五、尤モ派遣員ニ對シテハ以上諸工作中買油以外ハ蘭印現行

法規下ニテハ政府間ノ原則的交渉妥結セサル限り極メテ

困難ナルコトヲ申聞ケルト共ニ萬事貴官ト聯絡シテ行動

スヘキコトトシ置タルニ付御承知相成度

「スラバヤ」「メダン」「メナド」へ暗送アリタシ

~~~~~

450 昭和15年8月2日 在メナド野々村(雅二)領事より
松岡外務大臣宛(電報)

英米の支援を期待する蘭印に対し示威だけの

交渉では成果は見込めず事務的に粘り強く交

渉すべき旨大橋前満州国参議の意見具申

メナド 8月2日前発

本省 8月2日後着

第七九號(館長符號扱)

大橋ヨリ左ノ通り

(欄外記入)

蘭印問題ハ世界新秩序ノ一部トシテ他ノ問題ト一括シテ最後のニ解決セラルヘキモノニシテ夫レ迄ニ一步ヲ進メ置ク爲此ノ際使節ヲ送ルコトハ宜シキモノ今日完全ニ英國ノ指導下ニ立チ米國ノ來援ヲ信シテ落着氣味ノ蘭印ニ對シテハ最後ノ肚ヲ極メテ掛レハ別問題トシテ單ニ大掛ノ使節團ヲ送りテ示威スル丈ケニテハ大ナル效果ヲ期待シ難キノミナラス若シ失敗シテ引揚ケ而モ第二段ノ處置ニ出テ得サルカ如キコトアラハ却テ我威信ヲ落スコト前回ノ日蘭交渉ト同様トナル惧アリ依テ此ノ際ハ先方ノ逃腰の遷延の態度ヲ豫想シテ石射駐蘭公使ノ如キ人物ヲ派遣常駐セシメ事務的ニ粘リ強ク我方主張ノ貫徹ニ努メシムルコト適當ト思考ス「パラオ」ヨリ飛行便ナキ爲十三日門司着ニテ東上ス

(欄外記入)

全然同感

451

昭和15年8月10日

西欧亜局長
在本邦パプストオランダ公使 会談

蘭印問題に関する小磯新聞談話などにつきバ

プストと意見交換について

付記一 昭和十五年八月五日付、小磯(国昭)前拓務大臣作成

臣作成

「協議意見第一」

二 昭和十五年八月十三日付、小磯前拓務大臣作成

「協議意見第二」

三 昭和十五年(月日不明)、小磯前拓務大臣作成

「東亞經濟圈ノ建設ト外交施策」

四 昭和十五年(月日不明)、田中(武雄)拓務次官

作成

田中拓務次官意見書

西歐亞局長「パプスト」和蘭公使會談要録

八月十日午前十一時三十分在京「パプスト」和蘭公使西歐亞局長ヲ來訪セルカ其ノ會談要領左ノ通り

一、小磯大將ノ新聞會見談ニ關スル件

先ツ「パ」ヨリ

「先日新聞ニ發表セラレタル小磯大將ト新聞記者トノ會見談ハ「ルーター」等ニヨリ全世界ニ報道セラレ居ル處、右内容ハ蘭印當局ガ土人ヲ壓迫搾取シ居ルト云フカ如キ蘭側ニトリ甚タ不愉快ナルモノナリ。自分ハ大將力實際ニ斯ルコトヲ語ラレタルモノニハ非スシテ、新聞記者ノ誤報ナルヘシトハ思考スルモ日本政府ニ於テ何等カノ方法ニヨリ之カ矯正ノ措置ヲ講セラレムコトヲ希望ス」ト述ヘタルニ付

西局長ヨリ

「自分モ右記事ハ一讀セリ。右カ大將ノ語ラレタル所ト相違ナキヤ否ヤハ確カメ居ラサルモ右ハ恐ラク誤傳ナルヘシ、右ヲ矯正スルト云フモ、大將ハ最早現職ノ官吏ニハ非サルヲ以テ之ヲ矯正出來ルモノナリヤ否ヤ自分トシテハ見當ツカス。自分トシテハ兼々日蘭印關係カ「スムース」ニ行ク様希望シ居ル次第ナルガ……」ト答ヘタルニ對シ

「パ」ハ

「新聞報道ニ依レハ小磯大將ハ交渉代表トシテ蘭印ニ派遣セラル、模様ナル處、若シ事實トセハ、前述ノ新聞記事ノ關係モアリ、蘭印側トシテハ同大將ヲ日本側代表トシテ受諾スルコトヲ拒絕セサルヲ得サルヘシ」ト云ヘルヲ以テ

西局長ハ

「貴公使自身モ右新聞記事ハ誤報ナルヘシト云ハレタル處、斯ル新聞記事位ニテ代表ヲ拒絕スルカ如キコトハアリ得サルコトナリ」ト返シタルニ

「パ」ハ

「夫レハ然リ」ト首肯シツ、モ頻リニ何トカ該記事ノ是正方ニ關シ繰返シタリ。之ニ對シ

西局長

「矯正ノ困難ナルコトハ前ニ述ヘタル通ナルカ兎ニ角貴公使ノ申出ニ關シテハ大臣ニ御傳ヘシ置ケヘシ」ト答ヘ置タリ

二、向井民間代表ニ關スル件

「パ」

「向井氏一行ハ何等公ノ資格ヲ以テ派遣セラル、モノ

ニハ非スシテ、蘭印ニ於テ蘭印當業者ト「ビズネス」上ノ問題ニ付折衝スルモノト思考スル處如何」

西局長

「御説ノ通ナリ。尤モ仕事ノ關係上或ハ官憲側トモ接觸スルコトアルヘキモ何等公ノ資格ニテ之ヲ爲スモノニ非ス」

「パ」

「官憲ト交渉スル場合ハ總領事ノ仲介ヲ以テ行フモノト思フカ如何」

西局長

「其邊ノコトハ總領事ニ於テ適當ニ措置スヘシ」

三、日蘭印交渉事項内示方ノ件

更ニ「パ」ハ

「今回ノ代表派遣ハ如何ナル問題ヲ交渉スル次第ナリヤ。豫メ交渉事項ヲ通報セラル、ヲ得ハ蘭側トシテモ準備上好都合ナリ、實ハ此ノ點力不明ノ爲蘭印側トシテハ困惑シ居レリ」トテ交渉事項ノ内報方希望ヲ洩シタル處(右ハ暗ニ政治問題ニ關スル交渉ニハ應シ得スト云フカ如キ口吻トモ見ラルルト共ニ、從來蘭側ニ於

テハ入國及企業問題ハ純然タル國內問題ナリトシ、外交々涉ニ於テ此等ノ問題ヲ商議スルニハ反對ナリトノ態度ヲ執リ來レル經緯モアリ從テ右「パ」ノ質問ノ目的モ或ハ之ニ關聯セシメントスルモノナルヤノ懸念モアリタルニ付)

西局長ハ

「交渉事項ハ從來日蘭印間ニ行ハレタルモノニシテ主トシテ經濟問題ニ關スルモノナリ。尤モ經濟問題ト云フモ、政治問題ト經濟問題トハ互ニ密接ナル關係アリ其ノ限界ヲ劃然區別スルコトハ不可能ナルモ經濟問題ヲ中心トスルモノニシテ、其ノ内容ハ從來ノ交渉ノ經過ニモ鑑ミ貴方ニ於テモ大体御想像出來得ヘシト存ス」ト答ヘタルニ對シ

「パ」ハ政治問題ニ亘ルコトハ避ケ度シトノ意向ヲ洩ラシタル後

「經濟問題ニ關シテハ本年二月日本側ヨリ申出アリタルニ對シ去ル六月六日附公文ヲ以テ詳細ニ蘭側ノ意向ヲ回答シ置ケルカ之ニ對シ日本側ハ十三品目ニ亘ル蘭印重要物資ノ對日輸出ノ保障方ニ關スル希望ヲ申越サ

レタルニ止リ其他ノ點ニ關シテハ何等御回答ニ接シ居ラス」ト述フ仍テ

西局長「然リ。殘餘ノ問題ニ關シテハ近ク更ニ申入ヲナス考ナルニ付夫レニテ御承知アリ度シ」ト答ヘ會談ヲ終リタルカ「パ」ハ辭去ニ際シテモ更ニ小磯大將ノ新聞會見談ノ矯正方及日蘭印交渉事項ノ内示方ニ關スル希望ヲ繰リ返シ居タリ

備考

一、我代表出發前ニ交渉事項ヲ具體的ニ蘭側ニ通報スルコトハ蘭側力前記入國及企業ニ關スル事項ヲ國內問題ナリトシ外交々々涉ニヨル折衝ヲ回避セントシ居ルニ鑑ミ更ニ蘭側ノ拒否の態度ヲ誘致スベキ懸念アルニ付右内報ハ成ルヘク差控フルコト可然

二、尙我方交渉ニ應スベキ蘭印側代表ノ至急選任方ニ關シテハ從來再三督促シ來レルモ小磯大將ノ派遣未定ノ今日ニモアリ我方代表ヲ決定スル迄ハ此ノ點ニ觸レサル方可然ト存シ本日ノ會談ニ於テハ右ニハ言及セサリキ（小磯大將カ代表トナル場合ハ蘭印側ハ普通ノ代表ニ

テハ不適當ナルヤモ知レス。副總督位ナラハ如何ナランカ）

三、更ニソノ際「パ」ヨリ我方代表ノ數ハ酒勾大使ノ後任ト齋藤總領事ノ二名ナリヤト質問セルニ對シ局長ヨリ現在ノ所二名ト考ヘ居ルモ或ハ更ニ一名増加スルコトアルヤモ知レスト答ヘタルニ「パ」ハ多數ノ代表ハ不必要ナラスヤト述ヘ居タリ

四、又「パ」ハ爪哇支那日本汽船會社神戸支店長「スベールマン」逮捕ハ如何ナル理由ニ依ルモノナリヤ知ラサルモ同人ハ蘭印ニテハ知名ノ人物ナルニ付相當ノ反響モアルベキヲ以テ成ルヘク速ニ釋放方希望スル旨及同人ハ目下憲兵隊ノ隣ノ「ホテル」ニ抑留中ニシテ歸宅ヲ許サレザル由ナル處「ホテル」ニ留メ置ク位ナラハ自宅ニテモ差支ナカルヘキヤニ存セラルルニ付出來得ルナラハ左様御斡旋ヲ願ヒ度旨述ヘタルニ付局長ヨリ御希望ハ關係當局ニ取次クヘシト答ヘ置キタリ

（付記一）

協議意見第一

一五、八、五
小磯 大將

第一、我カ基本國策ト南方對策トノ關係

一、現内閣ノ宣明セル基本國策ハ

大東亞ノ新秩序建設

軍備充實ト支那事變ノ完遂

國內體制ノ刷新

ノ三要綱ナリ而シテ

二、大東亞新秩序ノ建設ニハ廣ク蘭印佛印等南方諸地方ヲモ包含スヘキモノタルコトハ松岡外相談ニ依ツテ之ヲ闡明セラレ

三、軍備ノ充實ト支那事變ノ完遂カ南方諸地方ニ獲得スヘキ經濟力ニ依リ企圖セラルヘキハ説明スル迄モナク

四、國內體制刷新ノ爲ニハ其一目タル國防經濟ノ根基確立ノ條ニ於テ「日滿支ヲ一環トシ大東亞ヲ包容スル協同經濟圈ノ確立」トシテ南方對策ノ重要性ヲ明示シ

五、此ノ如クシテ現内閣ノ宣明セル基本國策ハ南方對策ノ遂行ヲ度外視シテハ終ニ完遂シ能ハサルコトヲ明示セルモノト謂ハサルヘカラス換言スレハ南方對策ノ遂行ハ基本

國策完遂ノ點睛ニシテ其遂行ノ強弱ハ即チ我宣明セル基本國策ノ運命ヲ左右スルモノナリト斷セサルヘカラス

第三、蘭印ノ特殊事態ト我カ對策

一、南方對策上蘭印ノ我カ基本國策完遂ニ對スル地位ハ資源必取性上他ノ何レノ南洋地方ニ比較スルモ數段ノ重要性ヲ有スルニ拘ラス對外交渉上ヨリ之ヲ觀察スル時ハ他ノ南洋諸地方ニ比シ寧ロ良口實ヲ發見シ難シ何トナレハ

二、南方對策上對外交渉ノ口實ハ

1. 入國、企業、輸出入等ニ關シ改善ノ要求

2. 支那事變處理上必要ナル要求

ノ二者ヲ出テサルヘク前者ハ各地共略同一程度ナリ而シテ蘭印ハ支那トノ地理的關係比較的薄キヲ以テ後者ヲ以テ口實ト爲スコト殆ト不可能ナリ

三、大東亞經濟圈結成案ハ我カ基本國策ナルト同時ニ地理上至當ノ提唱ナリト雖蘭印現統治者ハ却テ之ヲ喜ハサル實狀ニ在リ是即過般提出ノ希望條件(別紙)中ニ第二項ヲ掲ケ以テ必要ニ應シ適時強硬對策ニ出ツルニ便ナラシメタル所以ナリ

第三、希望條件ニ就テ

一、前記希望條件第二項中「所要ノ隨員ト共ニ軍艦ニ便乗

シ」ト挿入セルハ現地に到著ノ時ヨリ既ニ實力ノ後援ヲ受

ケンコトヲ期待セシモノニシテ特派使節ノ威容保持ヲ主

體トセルモノニアラス從テ海軍當局ニ於テ使節ノ軍艦便

乗ヲ喜ハサル事情アリトセハ敢テ固執スル所ニアラス一

般商船ニ依リ渡航スルモ可ナリ然レトモ軍艦ト陸戰隊ノ

現地に到著ハ使節ノ到著ト同時又ハ其以前タルヘシ

二、陸戰隊ノ兵力ハ元ヨリ軍部自體ニ於テ適宜決定セラルヘ

キモノニシテ門外者ノ云爲スル限りニアラスト雖モ萬一

狀態ノ惡化ニ依リ一時孤立無援ニ陥ル場合ニ於テモ相當

期間持久シ得ルモノタラサルヘカラサルハ常識上ノ問題

ナリ

三、交渉間萬一狀態ノ惡化ヲ見且ツ先遣陸戰隊ノ力ノミヲ以

テシテハ事態ノ打開困難ナル場合ハ必然陸軍部隊ノ派遣

ヲ必要トスヘキヲ以テ此點ニ關シ豫メ陸軍當局ノ完全ナ

ル諒解ヲ取付ケ置クコト緊切ナリ

此場合ニ於ケル兵力ノ決定、輸送及作戰ノ計畫等ハ元ヨ

リ軍當局ニ於テ適當ニ立案セラルヘシ

四、希望條件第四項ノ提示ハ前諸項ヲ顧慮シタルニ止マラス

外務當局ニ於テ既提出帝國急要施策第四「東亞經濟圈ノ
建設ト外交施策」ノ三ニ記述セル

差向キ佛印及蘭印ノ處理ニ關シテハ我カ獨自ノ立場ニ

於テ實施スル旨獨伊ニ對シ通報の交渉ヲ遂ケテ其諒解

ヲ取付クル

處置及七ノ3末段ニ記述セル對米交渉等ヲ遂ケ以テ出先

ニ於ケル折衝ヲ支援セラレンコトヲモ加味セルモノナリ

第四、訓令ノ内容、隨員ノ銓衡等

訓令ハ大綱ヲ明示シテ自由裁量ノ餘地ヲ大ナラシムル様配

慮セラレタク隨員ノ銓衡ニ關シテハ決定ニ先チ使節ノ意見

ヲ徵サレタシ

前項ノ決定其他二件フ細部ニ關シテハ更ニ協議ヲ重ヌルコ

トニ致度

第五、結 論

要スルニ基本國策完遂上蘭印對策ハ之ヲ強硬ニ進ムルコト

トシ之カ爲先ツ有力ナル海軍部隊ヲ使節ト共ニ現地に派遣

シ文武一體ト爲リ目的ノ必成ヲ期スルコトト致度

別 紙

(箋) 希望條件

(付) 政府ニ於テ別冊意見中少クモ「第四東亞經濟圈ノ建設ト
外交施策」ヲ是認實行スルコト

二、所要ノ隨員ト共ニ軍艦ニ便乗シ先方政府處在地ニ至リ實
力ノ後援ニ依リ交渉ニ從事シ得ルコト

之方爲相當實力ヲ有スル陸戰隊ヲ右ト同時現地ニ輸送ス
ルコト

三、派遣ニ方リテハ親任狀ヲ携行スルコト

四、陸海外一致ノ完全ナル支援ヲ受ク

特ニ現地ニ於テ適時實力行使ヲ要スル場合ノ處置等ニ關
シテハ一々高等統帥ノ命ヲ待ツコトナク出先機關ニ於テ
獨斷決行シ得ル様豫メ軍事當事者ニ訓令ヲ與ヘ置クコト

(付箋)

小磯大將ガ便箋ニ認メ總理ニ提出セルモノ、一五、八、一

編注一 「基本國策要綱」(『日本外交文書 日中戦争』第一冊

第324文書)を指すと思われる。

二 外務省所蔵記録の「帝國急要施策」には、第四「東亞

經濟圈ノ建設ト外交施策」の部分は見当たらないが、本
文書付記三がそれに該当すると思われる。

(付記二)

協議意見第二

一五、八、一三

小磯大將

(欄外記入)

、對南方施策ニ關シ企畫院ニ於テ關係各省事務當局ノ協議
研究セル案ハ別紙甲ノ通りニシテ又世界情勢ノ新展開ニ
伴フ内閣ノ輿論指導方針ハ別紙乙ノ通りナリ之ニ依ツテ
觀ルモノ内閣ノ政治的態度、事務當局ノ意見及余ノ曩ニ提
出セル意見ハ共ニ其ノ根本的目標ニ於テ完全ニ一致セリ
只殘サレタル問題ハ此目標ニ向テ進ム爲ニ如何ナル程度
ノ決心ヲ必要トスル乎ノ一點ニ在リ

(編注二)

二、然ル處之ニ對シ別ニ定メラレタル廟議ノ方針ハ蘭印ニ對
シテハ外交的交渉ヲ爲ス限度ニ決定セラレ居ル哉ニ仄聞
ス、外交的折衝ト云フモ要ハ我國ノ經濟的地歩ヲ確立セ
ントスルニ在ルヲ以テ勢ヒ效果的ナル手段方法ヲ用フル
ニ非サレハ大東亞經濟圈ノ確立ハ不可能ナル可シ

廟議決定セル「外交的交渉」トハ如何ナル背景ヲ以テ效果的折衝ヲ爲サントスルモノナリ哉

三、今回ニ於ケル使節任務ノ成否ハ其影響スル處内、外共ニ極メテ重大ナリト思惟ス、從ツテ何人カ其ノ衝ニ當ルトスルモ國內各方面共眞ニ協同一致必要ニ際シテ實力ヲ行使シテモ尙且之ヲ支援スルニ非サレハ任務ノ遂行不可能ナルノミナラス或ハ國辱トナランコトヲ恐ル、故ニ消極姑息ナル方法ヲ用ヒテ單ニ先方ノ氣持ヲ打診セントスルカ如キコトナラハ寧口傍觀スルニ如カス

四、問題ハ國家ノ興廢ニ繫ル重大事ナルヲ以テ互ニ私心ヲ去リ忌憚無ク論議シテ適正ナル結論ニ到達セサル可ラサルハ勿論各關係方面上下一致ノ氣合ヲ以テ間隙無キコトヲ特ニ必要トス

五、小官ノ私見ヲ以テスルニ豫テ提出セル帝國急要施策ノ第四竝希望條項及協議意見第一ノ通ニシテ蘭印ノミノ施策要綱ニ關シテ別紙丙ノ如ク考察スルヲ至當ナリト認ム

(欄外記入)

外務大臣へ

編注一 本文書の別紙はすべて見当らない。

二 「世界情勢ノ推移ニ伴フ時局處理要綱」(『日本外交文書 日中戦争』第一冊第326文書)を指すと思われる。

(付記三)

東亞經濟圈ノ建設ト外交施策

(欄外記入)

、日、滿、支、佛印、泰、馬來、緬甸及蘭印ヲ糾合シテ東亞經濟聯盟ヲ結成シ將來ニ於テハ北樺太、沿海州、比律賓及大洋洲ヲ右聯盟ニ吸收スルモノトス

換言スレハ本經濟圈ハ東經九十度以東、日附變換線(概ネ東經百八十度)以西ヲ以テ其ノ範域ト爲ス

三、東亞經濟聯盟ハ東亞ニ於ケル諸地域ノ全經濟力ヲ綜合結束シテ歐米ニ對抗シ東亞ノ自主經濟ヲ確立スルヲ目的トス

三、政府ハ東亞新秩序建設ノ爲歐米各國カ東洋ニ於テ我物顏ニ振舞フコトヲ拒否スル旨世界ニ聲明スルト同時ニ差向キ佛印及蘭印ノ處理ニ關シテハ我カ獨自ノ立場ニ於テ實施スル旨獨伊ニ對シ通報的交渉ヲ遂ケテ其諒解ヲ取付ク

ルヲ要ス

四、新内閣ハ此際英米獨伊何レニモ依存セス日本ニ好意ヲ有
スル列國ト協同連繫ヲ保持シツツ日本本位ニテ邁進スル
コトヲ強調シ重ネテ國民ヲシテ其適從スル所ヲ知ラシム
ルノ處置ヲ講ス

五、千載一遇ノ好機ヲ逸セス對南方政策ニ邁進スル爲北方ニ
平和ヲ策ス之カ爲至急左記要項ニ於テ對蘇交涉ヲ開始ス
ヘシ

1. 即時援蔣政策ノ放棄

2. 蔣政權ニ對日抗戰中止ノ勸告

3. 日滿蘇間ニ不可侵條約及通商條約ノ締結

4. 日支和平ノ際日本カ北支及海南島ヲ權力下ニ置クコ
トヲ蘇聯ヲシテ認諾セシム

5. 右認諾ト同時ニ日本ハ蘇聯カ外蒙及新疆ヲ其ノ權力
下ニ置クコトヲ認ム但シ此際蘇聯ハ北樺太ヲ日本ニ無

償讓渡シ又ハ少クモ之ヲ有償讓渡ス

六、東亞經濟聯盟結成ノ端緒トシテ日本ハ滇緬援蔣路禁絶要
求ニ對シ不誠意ノ回答ヲ繰返シ來レル英國ニ對シ即時左
記事項ヲ最後通牒ヲ以テ要求ス

1. 援蔣政策放棄ノ聲明

2. 支那ニ於ケル租界及租地^(租借地)ノ返還及派遣陸海軍ノ即
時引上

3. 滇緬援蔣路ノ徹底的禁絶(我方ノ監視軍隊派遣ヲ含
ム)

七、前項對英要求ノ貫徹ヲ期スル爲日本ハ左記非常手段ヲ講
ス

1. 河内附近ニ軍用飛行場ヲ設定シ滇緬國境及同方面ヨ
リスル樣蔣^(僑)輸送ヲ爆撃ス

前項飛行場ノ設定及既述佛印鐵道ノ使用ニ關シ佛印側
若シ我カ要求ニ應セサルニ於テハ實力使用ノ舉ニ出ツ
ルモノトス

2. 在支英國軍隊撤退強要ニ引續キ香港、新嘉坡及蘭貢
ノ攻略ニ迄發展シ日本官憲ニ依ル其ノ貿易管理ヲ敢行
ス

但シ新嘉坡及蘭貢ノ攻略ハ蘭印「スマトラ」ノ經略後
ニ於テ之ヲ行フコトアルヲ豫期ス

3. 佛印、泰及蘭印ニ左記條件ヲ交渉要求シ尙其重要輸
出品(主トシテ蘭印ノ石油、護謨及錫)ノ日本官憲ニ依

ル貿易管理

(イ) 日本人入國制限ノ撤廢

(ロ) 農林業、商業、工業、鑛業、漁業等日本人各種企業ノ自由

(ハ) 日本トノ間ニ於ケル輸出入ノ自由

(ニ) 其他日本ノ必需物資獲得ノ自由

第一項輸出品目就中護謨ノ輸出管理ハ直チニ米國ノ自動車工業ヲ壓迫スルノ結果ヲ招來スヘキヲ以テ爲シ得ル限り本事業ニ米國ヲ協同参加セシメ米國ニシテ之ニ應セサルニ於テハ之ヲ以テ彼ノ我國ニ對スル輸出禁止ノ報復手段ト爲ス

ハ、日本ハ佛印、泰及蘭印ノ重要輸出品ノ貿易管理ヨリ進ンデ逐次其ノ内政全般ニ對スル指導權及其ノ國土防衛權ヲ獲得シ世界戦局ノ結果如何ニ拘ラズ之ヲ歐洲勢力ノ霸權ヨリ脱却セシムルモノトス因ニ東亞ニ於ケル植民地ニ關シテハ佛領タルト蘭領タルトニ依リ差別ヲ附スルコトナク共ニ之ヲ本國ヨリ分離シ獨立ノ體制ニ導クモノトス

六、香港、新嘉坡及蘭貢ノ攻略ニ依リ支那事變ハ急速且有利ニ處理セラルベキヲ以テ支那ノ重要輸物資ヲ平常ノ輸

出經路ニ復歸セシメ日本官憲ニ於テ之ガ貿易管理ヲナスモノトス

十、前記六乃至九ノ實力的基礎ノ上ニ東亞經濟聯盟ヲ結成シ概ネ左ノ根本原則ニ依リ東亞ノ全經濟ヲ運營スルモノトス

1. 聯盟内ニ於ケル埋藏資源ノ開發及諸企業ノ振興ニ對スル相互協同

2. 聯盟諸地域ノ重要輸出品ノ共同貿易管理

右ハ將來聯盟加入國ニ依リ共同貿易管理委員會ヲ組織シ日本官憲ニ依ル貿易管理ヲ漸次之ニ委譲スルモノニシテ聯盟内諸地域ノ互助連關性ヲ昂揚シ東亞ノ對外經濟力ヲ鞏固ナラシムルモノトス

3. 東亞經濟聯盟ト歐洲、南北米及蘇聯ノ各經濟トノ相互援助

二、東亞經濟聯盟ノ結成ハ日本ノ國內經濟ヲ高度ノ統制形態ニ移行セシムルト同時ニ適切ナル外交工作ノ實施ヲ不可缺ノ前提條件トスルコト勿論ナリ

(欄外記入)

小磯大將案

(付記四)

意見

田中次官

一 小磯大將提出ニ係ル意見「第四」ヲ承認スルコトハ必然
 的二希望條件ノ(二)後段ヲ承認セザル可ラザルコトトナル
 何トナレバ今回ノ任務ハ威嚇恫喝ニ在リ若シソレヲ爲サ
 スシテ普通ノ通商上ノ驅引交渉ヲ爲ス程度ノモノナラバ
 當然人選ノ方向ヲ變更スルヲ可トス

一 此際海軍ノ決心ガ根本ノ問題ナル處海軍トシテハ如何ナル
 人物ヲ派遣スルトモ此際ハ普通ノ通商の交渉ノ建前ヲ
 希望シツツアル哉ニ見受ケラルルヲ以テ矢張り關係各相
 ト小磯大將ト充分討議セラルル要アル可シ、出先ニ於テ
 臨機應變ノ措置ヲ採ラントスルモ背後ノ武力ガ影ノ形ニ
 伴フ如ク一致スルニ非サレバ却ツテ敵前ニ醜態ヲ曝スコ
 トトナリ害多クシテ利スル處尠シ

452

昭和15年8月27日

(欄外記入)

松岡外相が閣議で説明した「對蘭印交渉方針
 案」および「對蘭印要求案」

對蘭印交渉方針案

- 一、帝國ノ根本目標ハ、支那事變ノ急速處理及日滿支ヲ中心
 トシ、之ニ南洋ヲ加ヘタル東亞共榮圈ノ確立ニ存スル處、
 最近米國ハ我國ニ對シ重要物資ノ禁輸ヲ斷行シ以テ帝國
 カ前記目的ヲ達成セムトスルヲ妨害セムトスルニ到レリ。
 依テ帝國トシテハ之ニ對處スル爲南洋就中蘭印ニ必要資
 源ヲ求ムルノ他ナキ緊急ノ事態ニ直面スルニ至レリ。而
 シテ之カ爲ニハ、帝國ト蘭印トノ經濟關係ヲ緊密ナラシ
 ムルノミナラス、蘭印ニ對スル我カ政治的優越地位ヲ確
 立スルコト肝要ナルヲ以テ帝國政府ハ蘭印ニ對シ
- (1) 蘭印ハ歐洲トノ聯繫ヲ絶チ速ニ東亞共榮圈ノ一員トシ
 テノ立場ヲ執ルコト。
 - (2) 「インドネシア」人ニ完全ナル自治ヲ認ムルコト
 - (3) 蘭印ヲ含ム東亞共榮圈ノ平和ヲ確保スル爲蘭印ハ其ノ
 防衛ニ必要ナル具體的協定ヲ帝國ト締結スルコト。
 - (4) 帝國臣民ニ對シ、蘭印ヘノ入國、蘭印ニ於ケル居住、
 旅行身体財産ノ保護、動産、不動産ノ取得、商業及企

業(航空ヲ含ム)ノ經營其ノ他通商、航海ニ關スル一切ノ事項ニ付和蘭臣民ト同一ノ待遇ヲ與フルコト。

(5) 蘭印政府ハ蘭印產品中特ニ帝國ノ必要トスル物資ノ輸出ノ禁止又ハ制限ヲナササルノミナラス、其ノ對本邦輸出ニ關シ斡旋シ便宜ヲ供與スルコト。

ヲ要求スルコトト致シ度キモ國際情勢ノ現段階ニ於テハ此ノ種要求ハ蘭印ノ主權及生存權ニモ影響スル處ナルヲ以テ其儘英、米ニ内報サルルコト明ニシテ結局蘭印ヲ馳テ英、米樞軸ニ迫込ミ其ノ聯合ノ下ニ我カ要求ヲ拒否スルノ事態ヲ招來スル惧アリ右ニ對シ帝國カ壓力ヲ背景トシテ之ヲ押切り得ヘキ第二段ノ措置ニ出テ得サルカ如キコトアラハ、却テ我威信ヲ失墜スルコトナルヘシ依テ來ルヘキ日蘭印交渉ニ際シテハ前記ノ事情ヲ篤ト考慮シ別紙對蘭印要求案ノ趣旨ニヨリ交渉ヲ進ムルコトト致度

二、然ル處別紙案ノ如キ要求ト雖モ蘭側ニ於テハ國內の事情及第三國トノ關係上容易ニ之ヲ受諾セサルヘキハ從來ノ經驗ニヨリ明ニシテ交渉ハ相當迂曲折アルモノト予想セラル從テ其ノ前途ハ樂觀ヲ許ササルヘク我カ使節ニ於

テモ現地ニ於テ情勢ノ推移ト睨ミ合セ相當程度ニ自由ノ裁量ニ依リ臨機應變ノ交渉ヲ必要トスル次第ナルニ付小林特派使節ニ對シテハ相當廣汎ナル交渉權限ヲ與ヘ別紙要求ノ趣旨ニ基キ出來得ル限り我方要求貫徹ノ爲努力方訓令スル方針ナリ

(別紙)

對蘭印要求案

甲、申入要綱

一、曩ニ帝國政府ヨリ和蘭政府ニ對シ、日蘭印間ノ重要懸案ノ解決方ニ關シ我方要求ヲ申入タルニ對シ、本年六月六日附在京和蘭公使ヨリ有田外務大臣宛公文ヲ以テ爲サレタル回答中、我方ノ必要トスル重要物資ノ供給確保方ニ關スル分ハ大体我カ要求ヲ容認セルモノナル處將來右保障ノ遵守ヲ要求ス。

然ルニ我方ノ最重要視スル日本人ノ蘭印入國、蘭印ニ於ケル豐富ナル資源ノ開發及利用ノ爲ノ日本人ノ企業並ニ投資ニ關スル問題ニ付テハ、和蘭政府ハ依然我方ノ眞意ヲ充分諒解セス、殊ニ此等問題ノ解決カ我方多年ノ舉

國的要望ナルコトハ、從來ノ交渉ニヨリ既ニ充分承知シ居ルニモ拘ラス、蘭側ハ之ヲ大局の且實際の見地ヨリ好意的ニ考慮スルコトナク、今尙局所の立場ヨリ法理的論議ヲ繰返シ居ルハ帝國政府ノ大イニ失望ト不満ヲ禁シ得サル所ナリ。

仍テ帝國政府トシテハ右入國、企業竝ニ投資ニ關スル問題ニ關シ卒直ニ我方ノ見解ヲ披瀝シ和蘭政府ノ深甚ナル考慮ヲ求メムトスル次第ナリ。

二、抑モ現代ニ於ケル世界ノ不安竝ニ諸國間ノ軋轢ハ、主トシテ不合理ナル領土的關係ニ基ク資源ノ不公正ナル配分ニ基因スルコト論議ノ余地ナキ所ナリ。

即チ世界ノ現狀ハ、一部ニハ豊富ナル資源ヲ擁スル廣大ナル未開ノ地方アルト共ニ、他方ニ於テハ潑刺タル生活力ヲ有シツツ資源ノ缺乏ト過剩人口ニ悩ム國尠カラス。斯ル現狀ハ寔ニ不合理ニシテ、之ヲ合理化シ正當化スルニ非レハ國際間ノ平和ハ到底之ヲ庶幾スルニ由ナキモノナリ

從テ斯ル事態ノ發生ヲ防止セムカ爲ニハ資源豊富ニシテ廣大ナル未開發ノ領土ヲ有スル國々ガ卒先シテ其ノ資源

ヲ世界ニ開放シ、入國ヲ自由トシ、企業其他一般經濟的活動ニ課シタル制限ヲ撤廢スルコト緊要ナリ。

三、和蘭政府ガ蘭領印度ニ關シ、過去ニ於テ執リ來レル政策ハ比較的自由且平等ニ各國民ノ經濟活動ヲ許容シ、或ル程度ニ於テ東亞ノ平和及繁榮ニ寄與シタルコトハ帝國モ之ヲ認ムルニ吝ナラサル次第ナリ。

然ルニ近年和蘭カ蘭印ニ對シ執リ來レル政策ハ遺憾ナカラ門戸閉鎖的ナリ。抑モ蘭印ハ和蘭ノ統治下ニ在リトハ雖モ、地理的ニハ東亞民族ノ共榮圈內ニ存ス、從テ和蘭ハ蘭印ノ豊富ナル資源ヲ先ツ東亞民族、進ンテハ世界人類ノ繁榮ト福祉トノ爲ニ開放スヘキナリ

然ルニモ拘ハラス和蘭ハ從來餘リニモ和蘭人及歐洲ノ利益ノミヲ偏重シ、蘭印ニ於ケル重要企業就中鑛業ニ於テハ、蘭印ト地理的ニ遠隔ナル一、二ノ國家ニ對シ夙ニ廣汎ナル權益ヲ與ヘナカラ、東亞共榮圈ノ繁榮福祉ハ之ヲ顧念スルコトナク殊ニ開發能力ト發展力大ナル日本ニ對シ門戸閉鎖主義ヲ執リ來レルハ洵ニ不合理ナルノミナラス東亞共榮圈ノ一員トシテノ義務ヲ怠ルモノナリ。

帝國政府ハ右不合理ヲ指摘シ屢々其ノ反省ヲ促シ來レル

モ遂ニ其ノ結果ヲ得ルニ至ラスシテ今日ニ及ヒ爲ニ日本
朝野ノ間ニ大ナル不滿ノ念湧起スルニ至レルハ帝國ノ甚
タ遺憾トスル所ナリ。

四、帝國政府ハ前記諸觀點ニ立脚シ且蘭領印度ノ國內事情及
蘭領印度第三國間ノ關係ヲモ考慮シ差當リ茲ニ帝國政府
ノ眞摯且卒直ナル要求ヲ提示スルニ付貴方ニ於テモ日蘭
間ノ傳統的親善關係ニ基キ大局の見地ヨリ帝國政府ノ要
求ニ對シ速ニ同意セラレムコトヲ要請スル次第ナリ。

乙、原則的要求

一、入國問題

帝國政府ノ要望スル蘭領印度ニ對スル經濟的發展ヲ期ス
ル上ニ重大ナル障礙ヲナシ、日本朝野ノ最モ大ナル不滿
トスル所ノモノハ蘭領印度ニ於ケル外國人ノ入國制限ナ
ルニ鑑ミ帝國政府ハ入國ノ自由ヲ要求セムトス。尤モ本
問題ハ蘭印政府ニ於テ最モ難色アルモノナルヲ以テ已ム
ヲ得サル場合ハ之ガ緩和方ニ關シ最小限度左ノ通り要求
ス。

現行蘭領印度入國令ニ定メラルル日本人ノ蘭印入國割當
數ハ普通割當八百名及追加割當(一年間ニ外國人入國者

ノ合計カ一萬人ニ達セサル場合ハ一九二四年乃至一九三
三年ニ於ケル日本人入國總數ノ一割迄入國ヲ許可セラル
ルモノ)八百三十三名、合計一千六百三十三名ナルヲ以
テ右限度迄ノ日本人ノ入國ハ、帝國政府ニ於テ其ノ必要
ヲ認メ發給セル旅券ヲ所有スル者ニ限り、外國人勤勞條
令ニ定メラルルカ如キ煩瑣ナル手續ヲ踏ムコトナク自由
ニ之ヲ許可スルコト。

但シ

(イ)左記ニノ(1)ノ新規企業ノ爲ノ準備調査並ニ事業經營ノ
爲ニ必要ナル人員ハ右入國割當中ニ包含セシメサルコ
ト。

(ロ)蘭領印度滞在カ一年以内ナル一時旅行者ハ右入國割當
數ニ包含セシメサルコト。

(ハ)入國稅ノ徵收ヲ撤廢スルコト

二、企業及投資問題

(1)新規企業

近來蘭領印度政府ハ各種法規ノ發布又ハ改正或ハ法規
以外ノ政府ノ方針ニヨリ我方ノ最モ重要視スル石油其
他主要礦物ノ有望ナル鑛區ハ殆ント全部之ヲ政府ノ爲

ニ保留シ、以テ日本人カ此ノ種鑛業權ヲ獲得スルノ余地ナカラシムルニ至レルノミナラス既存鑛業權ノ讓渡モ之ヲ認メサルニ至レリ。

然ルニ英國、米國等ハ此等新法規ノ發布又ハ政府ノ方針決定前既ニ石油其他主要鑛物ノ有望ナル鑛區ヲ獲得シ之カ採鑛ヲ大規模ニ行ヒ居レリ。仍テ帝國政府ハ此ノ際蘭領印度政府ニ對シ、今後ハ現行法規又ハ政府ノ方針ノ如何ニ拘ラス機會均等ノ見地ヨリ石油及各種鑛物ノ採鑛竝ニ採鑛ニ關スル日本人ノ申請ニ對シテハ之ヲ許可スルト共ニ、鑛業以外ノ各種企業ノ新設ニ關スル申請モ同様之ヲ許可シ且既存利權ノ日本人ニ對スル讓渡モ必ス之ヲ許可スルコト。

尙日本人ノ新規企業ニ關シテハ鑛業法規又ハ其他關係法規ニ定ムル申請手續ヲ執ル以前ニ於テモ、日本人カ有望ナリト認ムル地方ニ於テ自由ニ實地調査ヲナスコトヲ認ムルコト

而シテ我方ニ於テ差當リ着手ヲ希望スル新規企業左ノ如シ。

A、鑛業

蘭領印度ニ於ケル全石油鑛區(政府ノ保留地ヲ含ム)中我方ノ希望スル地域ニ對スル採鑛及採鑛。

其他ノ鑛物ノ有望ナル全鑛區(政府ノ保留地ヲ含ム)

中我方ノ希望スル地域ニ對スル各種鑛物ノ採鑛及採鑛。

採鑛權者ノ申請スル採鑛申請ハ必ス許可スルコト。

B、其他企業

日蘭印間航空路ノ開設

日蘭印間新海運航路ノ開設。

日蘭印間海底電線敷設。

其他我方ノ希望スル水産業、林業、農業、工業等。

以上A及Bノ企業ノ新設ニ關シテハ其ノ調査及各種準備ニ對シ蘭印當局ハ凡ユル斡旋協力及一切ノ便宜ヲ供與スルコト。

(2) 既存企業ノ擴張

(イ) 鑛業

現在日本人ノ出願中ノ採鑛又ハ採鑛申請ヲ速ニ許可スルコト(例―「セレベス」ニ於ケル坪野出願ノ「ニツケル」及鐵、原口出願ノ雲母)

現在日本人ノ經營スル鑛業ニ對シ其ノ發展及合理的經營ヲ可能ナラシムル爲其ノ擴張ヲ認ムルコト(例—B. O. M. ノ石油)

現在日本人カ其ノ所有スル鑛業權ニ基キ實際開發ヲ行ハムトスルヲ阻止シツツアル障礙ヲ除去スルコト。(例 爪哇「パチタン」ニ於ケル石原銅山ノ開發ヲ可能ナラシムル爲「パチタン」港ヲ同企業ノ爲ニ開港スルコト)

(ロ)海 運

現在蘭印ニ於テ沿岸貿易ヲ許可セラレ居ル日本船舶(在「スラバヤ」鹽原副經營第一虎丸及南洋興發所有船大東丸)ニ對スル航行區域制限ヲ撤廢シ且増船ヲ認ムルコト。

一九三五年以來閉鎖セラレタル海港ノ再開及出入船舶噸數制限ヲ撤廢スルコト。

(ハ)農 業

既存農園ニ對シ其ノ發展及合理的經營ヲ可能ナラシムル爲其ノ擴張ヲ認ムルト共ニ各種制限及障害ヲ除去スルコト(例—「ニューギニア」ニ於ケル南洋興

發會社ノ棉花栽培園ノ擴張爪哇ニ於ケル武田農園ノ規那栽培ノ擴張及同園生産品ノ對本邦輸出ノ許可)

(ニ)漁 業

既存漁業ニ對シ發展ノ餘地ヲ與フルコト。即チ邦人漁業ハ殆ント全部カ公海漁業ニシテ土民漁業トノ競争ナキヲ以テ之ニ對シテハ、營業上必要トスル漁船數及漁夫ノ増加ヲ認メ、且漁獲物ノ輸入港ニ關スル制限ヲ撤廢スルト共ニ輸入稅ヲ免除スルコト。右漁業力營業上必要トスル製氷其他附帶事業ハ現行營業制限ヨリ除外シ自由ニ之ヲ許可スルコト。

(ホ)其他企業

日本人ニ關係アル倉庫業、印刷業、織布業、製氷業及護謄「スモーク」業等工場ノ營業制限ヲ撤廢スルコト。

三、新聞關係

(1)從來蘭印當局ニ於テハ日本人ノ馬來語及支那語新聞ノ經營ヲ阻止スルノ方針ヲ執リ居レル處、和蘭人及支那人ニ對スルト同様日本人ニ對シテモ其ノ經營ヲ許可スヘキコト。

(2) 從來蘭印ニ於ケル一般官民ノ日本及日本人ニ關スル認

識ハ全ク缺如シ、其ノ對日態度ニ遺憾ノ點多ク之カ爲

ニ兩國間ノ友好關係ヲ阻害スルコト甚シキモノアリ。

殊ニ戰禍ノ和蘭ニ波及以來蘭印官民ノ在留邦人ニ對ス

ル暴行及侮辱事件ノ頻發ハ、一方ニ於テハ蘭印當局カ

我方ノ真意ヲ理解セス日本ニ對スル極端ナル警戒措置

ヲ執リ來レル結果一般ノ感情ヲ刺戟セルニ基因スルモ

ノナルト共ニ、他方從來蘭印新聞ノ反日的態度カ輿論

ノ對日惡感情ヲ誘發スルニ至リタルコトカ其ノ主要原

因ナリト認メラル。仍テ帝國政府ハ此等新聞ノ徹底的

取締方ニ關シ左ノ通り要求ス。

(イ) 和蘭人經營新聞

反日態度ノ最モ甚シキハ和蘭語新聞ニシテ且和蘭語

新聞ハ支那語及馬來語新聞ノ指導的地位ニ在ルニモ

拘ハラス從來之カ取締カ殆ント行ハレタルコトナキ

處今後ハ之カ徹底的取締ヲナスコト。

(ロ) 支那人經營新聞

支那人經營新聞ノ取締振ハ今尙微溫のニシテ而モ支

表セサルノミカ、却テ支那人ニ對シ強制的ニ對日反
感ヲ植付ケ反日運動及日貨排斥ヲ指導シ居レル處蘭
印當局從來ノ態度ハ之ヲ看過シ居レリト稱スルモ過
言ニ非ス、之ニ反シ蘭印當局ハ日本人經營ノ新聞カ、
汪精衛支援ニ關スル記事ヲ掲ケタルニ對シ右カ在留
支那人ノ感情ヲ刺戟スルモノナリトシテ發行停止ヲ
命シ又支那ニ於ケル我方占領地域内ニ於テ發行セラ
ルル新聞等ハ反蔣的ナルノ故ヲ以テ一切輸入禁止ヲ
爲セルカ右ノ如キ蘭印當局ノ不公平ナル態度ハ、親
支反日的ナリト稱セサルヲ得ス。仍テ今後ハ支那人
經營新聞ノ取締ヲ一層嚴重化スルト共ニ我方新聞ニ
對スル不公平ナル態度ヲ是正スルコトヲ要求ス。

丙、一般通商ノ増進及通商障害除去ニ關シ對蘭印要求案及
理由

一、日本品ノ輸入ヲ最大限ニ確保スル爲最有利ナル割當ヲ要
求ス

理由及要求具体案

蘭印ニ於テ一九三三年以來執リツ、アル主要商品ニ對ス
ル輸入制限措置ノ爲日本品ノ輸入ヲ阻害セラレ特ニ高級

ナル日本品ノ輸入ハ重大ナル打撃ヲ被リ或種高級綿布、人絹布ノ如キハ殆ント輸入ノ途ヲ閉塞サルルニ至リタリ然シ蘭印購買力ノ源泉淺ク消費大衆タル土人ノ收入大ナラサルニ拘ラス本制限令ヲ撤廢セシムル時ハ思惑輸入ヲ馴致シ却テ市場混亂ヲ惹起スルニ至ルコト極メテ明ナリ故ニ我方トシテハ寧ロ現行制限令ヲ利用シテ日本品ニ對シ最有利ナル割當ヲ取得シ置クコト現在及將來ノ爲極メテ肝要ナリ

故ニ我具體的要求トシテハ右制限令ニ依リテ決定セル輸入許可數量ノ平均七乃至八割ヲ日本品ニ割當ツルコトヲ目標トシテ要求ス

二、蘭印在留日本人輸入商ノ輸入割當比率ノ合理的増加ヲ要求ス

理由及要求具体案

蘭印ニ於テ輸入業ヲ經營シ居ル日本商カ蘭印輸入制限令實施前ニ於テハ蘭印ノ輸入セル或種商品ノ總量ニ對シ其五割程度ノ輸入実績ヲ有シタルニ拘ラス蘭印ニ於テハ無差別ニ日本商ニ對スル輸入割當量ヲ當該商品ノ輸入許可總量ノ二割五分ヲ最高限度ト決定セルコトハ甚不當ナリ

仍テ我方トシテハ右二割五分制度ヲ改メ總テ當該輸入制限令施行前年ノ実績ニ依ルコトトシ其最高割當比率ヲ五割トスルコトヲ要求ス

三、蘭印在留日本人輸入商ニ對シ第三國品ノ輸入義務免除方要求ス

理由

蘭印ニ於ケル日本人輸入商ニ對シ蘭印カ第三國ニ割當タル商品ノ一定數量ノ輸入義務ヲ負擔セシメ居ルモ日本商ハ當該第三國トノ取引關係ナク又其割當ラレタル數量モ亦少ク到底商取引ノ對象トスルニ足ラサルモノアルニ付此等第三國品ノ輸入ヲ義務トセサルコトヲ要求ス

四、蘭印ニ於ケル日本人輸入商ヲ經濟省ノ諮問委員會ニ参加セシムルコトヲ要求ス

理由

蘭印經濟省ニ於テハ蘭印市場需給ノ實狀ヲ聽取シテ輸入許可數量ヲ決定スル目的ヲ以テ蘭人輸入商若干名ヲ委員トスル諮問委員會ヲ設ケ居ルトノコトナルニ付之ニ蘭印在留ノ適當ナル日本人輸入商ヲ参加セシムルコトヲ要求ス

五、日本ニ不利ナル關稅政策ヲ採ラサルコトヲ要求ス
理由

近年和蘭本國品ノミナラス歐米製品ヲモ保護スル爲其稅關價格表中ニ掲載セル或種商品ノ評價格カ市價ヨリモ高キモノアル爲特ニ日本品カ結果ニ於テ高率關稅ヲ支拂フコトトナルモノアリ

又最近ニ至リテハ一般的ニ賦課スル國防輸出稅ノ外ニ戰時輸出稅トシテ特ニ各國ノ必需スル重要物資ノ輸出ニ當リ課稅セントスル政策ニ出テツツアルヲ以テ之カ爲日本ノ蘭印產重要物資買付ニ障害トナルニ至ル

故ニ我方トシテハ蘭印ノ輸出入關稅政策ニ於テ日本ニ不利トナルカ如キ措置ヲ執ラサルト共ニ蘭印ト外國トノ特惠關稅ヲ設定セサルコトヲ要求ス

六、獨逸ノ和蘭侵入直後英、佛、蘭政府ハ蘭印物資ノ共同利用ヲ企圖スル氣配アリタルヲ以テ差當リ我方ノ必需重要物資ヲ確保スヘキ見地ヨリ五月二十日十三品目(生ゴム、錫及錫鑛石、鑛油、ボーキサイト、ニツケル鑛、滿俺鑛、ウオルフラム鑛、クローム鐵鑛、モリブデン、屑鐵、工業鹽、ヒマシ、規那皮)ノ一定量以上對日輸出保障方申

入レタル處蘭側ハ之ヲ容認セルカ現下ノ情勢ニ鑑ミ更ニ同品目ニ關スル數量増加方ニ付要求スルコトアルヘシ
七、貿易ノ増進ヲ圖ル爲必要ニ應シ我方ニ於テモ不急品ノ買付ヲモ考慮ス

理由

我對蘭印輸出増進ハ蘭印住民ノ購買力如何ニ係ルコト勿論ナルヲ以テ我方ニ於テ不要不急品ト認ムルモノト雖之ヲ買付ケ以テ蘭印ヲシテ我國ニ依存スル點ヲモ判然知ラシメ置ク必要アリ

(欄外記入)

訓令ハ別ニ用キス本文書及附屬書ヲ小林特派使節ニ參考トシ手交スルコトニ閣議決定ス(松岡外務大臣花押)

~~~~~

453

昭和15年8月27日

松岡外務大臣より  
在バタビア齋藤總領事宛(電報)

小林商工大臣を特使として蘭印へ派遣する旨  
バブストへ通報について

付記 昭和十五年八月二十七日

蘭印特派使節に関する外務省発表

本省 8月27日後8時10分發

第三七九號(至急)

往電第三一九號ニ關シ

二十七日大橋次官ヨリ「バ」公使ニ對シ小林商工大臣ヲ特

派使節ニ任命シ別電ノ隨員ト共ニ派遣スルコトトナリタル

ニ付一行ニ對シ一切ノ便宜供與方取計ハレ度旨申入置タリ

尙一行ハ八月三十一日神戸出帆日昌丸ニテ出發ノ予定、會

談要領追電ス

「スラバヤ」へ轉電シ「メダン」「メナド」へ暗送アリ度シ

(付記)

蘭印特派使節に關する外務省発表

昭和十五年八月廿七日午後五時

大橋外務次官心得は本二十七日午前十一時和蘭公使パブス

ト氏の來訪を求め今回帝國政府は蘭印特派使節として商工

大臣小林一三氏を派遣することに決定したる旨申し入るる

所かあつた

小林特派使節に隨行すへき一行の氏名は左の通りである

| 顧問    |       | 隨員    |       | 外務省 |         | 使節附 |     |
|-------|-------|-------|-------|-----|---------|-----|-----|
| 岩瀬英一郎 | 太田知庸  | 外務書記官 | 外務事務官 | 同   | 外務技師    | 拓務省 | 外務屬 |
|       | 箕輪三郎  |       |       |     | 副領事     | 使節附 |     |
|       | 長谷川三郎 |       |       |     | 調查官     |     |     |
|       | 大島宗子郎 |       |       |     | 大藏事務官   |     |     |
|       | 蓮見幸雄  |       |       |     | 陸軍大佐    |     |     |
|       | 菅原良忠  |       |       |     | 陸軍航空兵中佐 |     |     |
|       | 小島宗高  |       |       |     | 海軍大佐    |     |     |
|       | 石本五雄  |       |       |     | 海軍機關少佐  |     |     |
|       | 中山寧人  |       |       |     | 商工書記官   |     |     |
|       | 中原義正  |       |       |     | 燃料局事務官  |     |     |
|       | 中筋藤一  |       |       |     | 貿易局書記官  |     |     |
|       | 奥田新三  |       |       |     | 拓務書記官   |     |     |
|       | 畠中大輔  |       |       |     |         |     |     |
|       | 長谷川輝彦 |       |       |     |         |     |     |
|       | 川本邦雄  |       |       |     |         |     |     |
|       | 矢田山保  |       |       |     |         |     |     |

外務書記生

有 吉 巖

同

金 子 光 一

拓務通譯生

佐 立 五十男

~~~~~

454

昭和15年 8月29日

松岡外務大臣より
在バタビア齋藤總領事宛(電報)

日蘭会商の蘭側代表者や協議題目に関するわ

が方意向をパプストへ提議について

本省 8月29日後9時30分発

第三八二號

往電第三七九號ニ關シ

一、其ノ際次官ヨリ「パ」ニ對シ我方ハ今回ノ交渉ヲ重要視シ直接總督ト交渉ノ爲特ニ國務大臣ヲ使節ニ任命セルニ付蘭側ニ於テモ此ノ際總督自身交渉ニ當リ速カニ圓滿妥結ニ協力方希望ス帝國政府ノ意圖スル所ハ兩國間經濟關係ノ緊密化ヲ計ルニ在リ從テ交渉題目ハ大体通商關係ノ改善蘭印ニ於ケル日本人ノ經濟活動ニ關スル諸問題ニシテ右ハ我方ノ最も重要視スルモノナルニ付双方大局の見地ヨリ腹臆ナキ意見ヲ交換シタル上問題ノ解決ヲ計ルコ

トト致度細目ニ付テハ太田課長ト齋藤總領事ヲシテ交渉セシムヘキニ付蘭側ニ於テモ適當ノ代表者ヲ任命シ相當ノ權限ヲ與ヘ之ニ應セシメラレ度尙我方トシテハ第一流ノ使節ヲ選ビ廣汎ナル權限ヲ與ヘ派遣スル次第ナルニ付蘭印側モ一々本國政府ニ請訓サルルコトナク豫メ總督ニ廣汎ナル交渉權ヲ與ヘ交渉ノ進行ヲ容易ニシ急速妥結ヲ可能ナラシムル様準備方切望スル旨申入レタリ

二、右ニ對シ「パ」ハ小林使節ノ派遣ハ歡迎スルモ總督ハ政務多端ニシテ直接交渉ニ應スル暇ナキノミナラス國際關係問題ノ處理ハ本國政府ノ權限ニ屬スルヲ以テ總督力交渉相手トナルコトハ不可能ナルヘク又交渉ノ進行ニ伴ヒ重要又ハ豫期セサル問題ヲ生スル場合本國政府ニ請訓スルコトハ不可避ナルヘシト述ヘタルニ付次官ハ我方カ國務大臣ヲ特派スル理由ハ前述ノ通ナル處總督トノ交渉ハ重要ナル原則問題ナルニ付政務ニ支障ヲ來ス程ノ時間ヲ費ス筈ナク又權限問題モ平時ナラハ兎モ角現在ノ如キ和蘭ノ狀態ニ鑑ミ且兩國關係ノ重要性及小林使節ノ地位ヲモ考慮サレ此ノ際是非總督ニ對シ特別ノ交渉權ヲ與ヘラルル様切望ス尙請訓ノ問題モ絶對已ムヲ得サルモノノ外

些細ノコト迄一々請訓サレ爲ニ交渉ノ圓滑進捗ヲ妨クルコトアラハ我カ國民ニ蘭側カ故意ニ交渉遷延策ヲ弄スルモノナリトノ疑ヲ懷カシメ不必要ニ輿論ヲ刺戟シ面白カラサル結果ヲ招クニ至ルヘキ惧レアルニ付之ヲ避クルト共ニ速ニ交渉ヲ纏メ得ル様充分準備ヲ希望スル次第ナリト答ヘタリ

三、「パ」ハ種々弁解ヲ繰返シ前例ヲ舉ケタル後何レニセヨ總督ハ小林使節トハ喜ンテ應接スヘキハ勿論ナルモ交渉相手トシテハ結局副總督カ任命サルルコトト思フ旨述ヘタルニ付次官ヨリ重ネテ前述ノ要求ヲ繰返シ兎ニ角日蘭印關係ノ重要性ニ鑑ミ我方ノ要望ヲ至急和蘭側ニ電報ノ上之ヲ容レラルル様希望スル旨述ヘタル處「パ」ハ直ニ本國政府ニ取次方約セル趣ナリ

「スラバヤ」、「メダン」、「メナド」へ暗送アリ度

455

昭和15年9月3日

松岡外務大臣より
在バタビア齋藤総領事宛(電報)

日蘭会商に関する新聞雑誌記事掲載の禁止に

ついで

第三九五號

本省 9月3日後9時40分發

今回開始セントスル日、蘭印間交渉内容カ新聞雑誌等ニ喧傳サルル時ハ本交渉ニ異常ノ關心ヲ有スル英、米等ノ妨害的策動ヲ一層誘發激化スルコトトナルヘキニ付左記事項ニ關スル記事ヲ新聞雑誌ニ掲載(放送ヲ含ム)スルコトヲ禁止シタルニ付貴地邦字新聞社及通信員ニ對シテモ可然戒告方御取計相成度
尙從來此種禁止ノ際ニハ所謂内報ヲ亂發スル處アル處右モ出來得ル限り自肅セシメラルル様致度シ

(一)小林使節ノ交渉ニ關シ

一、交渉ノ經過及内容ヲ知ラルルカ如キ記事

(イ)企業關係ニ於テハ(A)石油其他鑛區ノ獲得、買收(B)水産、航空、通信、海運問題(C)營業制限令ノ撤廢若ク

ハ緩和

(ロ)入國制限令ノ撤廢若クハ緩和

(ハ)交渉ノ段階ヲ明示シ又ハ之ヲ推知セラルルカ如キ書振リ

(ニ)通商問題ニ關シ日、蘭印間通商交渉ノ主題トナリ居

ル我對蘭印輸出出品目ノ羅列、數量、金額及蘭印產物
資ノ買付品目ノ羅列、數量、金額

三、小林使節ノ交渉振リニ對スル非議論難

(二)向井ノ交渉ニ關シ

一、石油資源ノ獲得ニ關シ

(イ)新鑛區ノ獲得

(ロ)他ノ外國人ノ既得權ニ屬スル鑛區ノ買收

(ハ)既存鑛區ヘノ資本參加

(ニ)鑛區ノ調査模様

二、買油交渉ニ關スル一切ノ事項

新嘉坡ヘ轉電アリタシ



456 昭和15年9月6日 松岡外務大臣より
在バタビア齋藤總領事宛(電報)

日蘭会商の蘭側代表者や協議題目に關する蘭

側回答について

本省 9月6日後2時40分発

第四〇二號

往電第三八二號ニ關シ

(ハカ)

四日「バ」公使大橋次官ヲ來訪我方申入ニ對スル本國政府ノ回答トシテ(一)和蘭政府ハ國務大臣タル小林使節ノ派遣ヲ歡迎ス(二)日本使節ノ地位ヲ充分考慮シ總督自ラ同使節歡迎ノ意ヲ表スヘキハ勿論ナルモ副王タル總督ノ地位ハ交渉ニ參加又ハ交渉ヲ指導スルコト不可能ニ付蘭側ハ高官ノ代表ヲ任命スヘシ(三)日本側ニ於テ豫メ交渉題目ヲ具體的ニ示サレサルモ代表到着後右提示ヲ受ケタル上慎重研究ノ要アルニ付右ニ若干ノ時日ヲ要スルコトアルヘキハ豫メ諒承アリ度(四)交渉ハ専ラ經濟問題ノ性質ヲ帶フルモノタルヘク政治問題ハ交渉議題ニ入レラレサルモノト解釋スル旨ノ覺書ヲ手交スルト共ニ口頭ニテ右趣旨ヲ敷衍セリ

三、仍テ次官ハ總督カ蘭印代表トシテ「レギュラー」ニ小林使節ト交渉ニ應シ得サル事情ハ諒トスルモ同使節ノ地位ニ對スル待遇ハ勿論總督ニ於テモ儀禮的應接ニ止マラス使節ノ希望アル場合出來得ル限り自ラ原則問題ニ付話合ニ應セラルルト共ニ代表ニハ最高級ノモノヲ任命方希望スル旨及交渉ノ不必要ニ遷延セサル様希望セル處「バ」ハ之ヲ了承セリ

三、更ニ次官ヨリ交渉目的ハ兩國間經濟關係ノ緊密化ヲ計ルニ在ル處經濟問題ト政治問題ハ互ニ密接ノ關聯アリ判然區別シ得ス交渉ヲ經濟問題ニ限ルト云フハ主ニ經濟的ナル問題ト解シテヨロシキヤト云ヘルニ「パ」ハ夫レハ問題ノ起リタル場合双方代表間ニ腹臆ナク話合ヘハ可ナルヘシ要ハ蘭側トシテハ純然タル政治問題ノ討議ヲ避ケ度意向ニシテ例ヘハ日本カ蘭印ニ海軍根據地又ハ石油貯藏所ヲ要求サルルカ如キコトアラハ之ハ直ニ拒絕スル外ナルヘシト述ヘタリ

暗號ノ關係上今後重要電報ハ關係各館ニ轉電セサル方針ニシテ使節到着後適當ノ時期ニ關係領事ヲ貴地ニ出張セシムヘキニ付其ノ際内示サレ度尙爾後ノ會商關係事項ハ隨時要約ノ上電報アリ度

457

昭和15年9月7日
松岡外務大臣より
在バタビア齋藤總領事宛(電報)

小林特使の交渉権限について

本省 9月7日後7時10分發

第四〇九號(極秘、至急、館長符號扱)

今次會商ニ關シ小林使節ニハ特ニ訓令ヲ與ヘス交渉要綱(陸海外拓務各當局ニ於テ協議ノ上作成シ閣議承認ヲ經タルモノ)ヲ參考トシテ手交シ之カ取扱方ニ關シテハ閣議決定ノ趣旨ニ基キ自由裁量ニ依リ充分利用セラレタキ旨ノ廣汎ナル交渉權限ヲ與ヘ置ケリ右要綱寫ハ太田隨員モ携行セルニ付右御了承ノ上貴官ハ總領事トシテノ立場及次席代表ノ一人トシテノ立場ニ於テ太田ト協議ノ上充分使節ヲ補佐セラレ度

458

昭和15年9月7日
松岡外務大臣より
在バタビア齋藤總領事宛(電報)

蘭印政府が日蘭會商首席代表に經濟長官を任命したことに強く抗議について

第四一〇號(至急)

往電第四〇三號ニ關シ

本省 9月7日後8時0分發

「六日「パ」公使次官ヲ來訪シ蘭側ハ(イ)代表トシテ經濟長官ヲ任命スヘキ旨(ロ)交渉ノ圓滑進捗ヲ期スル爲正式交渉者ノ數ヲ制限シ度キ旨ノ覺書ヲ手交セリ

459

昭和15年9月13日

小林(二三)日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

三、右ニ對シ七日次官ヨリ「パ」ヲ招致シ右ノ回答トシテ公文ヲ以テ我方ガ國務大臣ヲ派遣セルハ直接總督ト交渉セシメ度意向ニ出ツルモノナル處蘭側ニ於テ總督カ專任交渉代表タルコト不可能ノ事情アルハ之ヲ諒トスルモ總督ハ小林使節ノ希望アラハ原則的問題ニ付會談スヘキ諒解ノ下ニ專任交渉代表ハ少クトモ總督ノ次二位スル高官タルコトヲ要求セル次第ナリ然ルニ副總督ヨリ遙カニ二位ニ在ル者ヲ代表ニ任命スルガ如キハ蘭印側ニ於テ吾使節ヲ輕視スルモノトシテ我國輿論ヲ激發セシメ交渉ヲ不成功ニ終ラシムル虞アルニ付此ノ際代表ハ尠クトモ副總督ヲ任命スルコトニ改メラレタキコトヲ要求シ更ニ口頭ヲ以テ右我方見解ハ決定的ノモノナル旨ヲ強く述べ置ケリ三、尙正式交渉者ノ點ニ關シテハ冒頭往電ノ通り我方ハ小林使節ノ外貴官及太田隨員モ次席代表トシテ交渉ニ當ルヘキニ付蘭側モ右ニ相當スル代表ヲ任命サレ度旨申入レ置タル趣ナリ

小林代表と蘭印總督との會談内容報告

バタビア 9月13日前發

本省 9月13日後着

會商第一號

十二日午後六時總督ニ會見本使到着以來ノ蘭印側配慮ニ對シ謝意ヲ表シ月竝ノ挨拶ヲ交シタル後本使ノ使命ハ閣下竝ニ當局ト直接會商シ日蘭印間ノ經濟關係ヲ共榮ノ精神ヨリ更ニ緊密化シ歷史的友好關係ヲ一層強化セシメントスルモノニシテ總督ニ於テモ其意ノ存スル所ニ贊シ交渉ノ圓滿妥結方ニ對シ努力アリタキ旨切望シタルニ對シ總督ハ同意ヲ表シ交渉妥結ニ全幅ノ努力ヲ拂フヘキ旨述べタリ依テ本使ハ日蘭印兩國ハ經濟的ニ又地理的ニ密接ナル關係ヲ有シ之ヲ強化スルノ必要ハ敍說ヲ待タサルモ此ノ際政治的觀點ヨリ兩者間ノ關係ヲ檢討スルノ必要アリト迄述べタルニ總督ハ政治的觀點トハ如何ナルモノナルヤト質シ本交渉ハ經濟的ニ限ラルヘキモノト思考スト繰返シ述べ我方ニ於テ此ノ際政治的問題ヲ持出スニ非サヤト危惧ノ面持ナリシカ本使ハ語ヲ繼キ和蘭本國ハ善隣關係ニ依リ繁榮シ來リタルモノナルヘク其ノ原則ハ今尙變ル所ナキモノト思考ス依テ英米

ト握手セラルルハ結構ナルモ他方日本トノ握手モ緊要性ヲ増大シツツアルヘシト述ヘタルニ總督ハ和蘭政府方針ハ友好國間ニ何等區別的待遇ヲ爲シタルコトナク又將來モ爲スコトナカルヘク此ノ點ニ付テハ日本側ニ於テ御承知アリタキ旨諄々ト述ヘ居タリ茲ニ於テ本使ハ日蘭印關係ノ密接ナルニ於テ初メテ蘭印ノ安全性ヲ保障セラルルモノト信スト述ヘ(總督ハ深ク頷キ居タリ)日本ノ蘭印ニ希望スル所ハ本使ノ使命タル經濟問題ニ關スルモノモアルト共ニ同時ニ蘭印カ他ノ一國又ハ數國ニ寄與セサルコトノ強キ希望ヲ有シ蘭印トシテモ其ノ立場上ヨリ言フモ帝國ト強キ握手ヲ爲シテコソ共存共榮ヲ齎スヘキ所以ナルコトヲ御考慮アラシトヲ切望スト述ヘタルニ總督ハ日英米間ニ何等差別ヲ設クルモノニアラスト述ヘタル後自分トシテハ日蘭印經濟關係ニ付何等變更ヲ要スヘキモノアリトハ思考セサルモ更ニ之ヲ仔細ニ考究シ調整ヲ計ル要アルヘキハ又克ク諒解シ得ル所ニシテ蘭印代表ヲシテ交渉セシムヘク其ノ圓滿ナル妥結ヲ切望スト答ヘタリ

次⁽²⁾テ本使ハ向井カ石油問題ニ關シ近ク交渉ヲ開始スヘキモ右使命中ニハ石油ノ解決竝ニ石油企業等ノ問題アリ御承知

ノ如ク目下東京ニ於テ三百餘萬噸ノ商談進行シツツアリ右カ成立スルトシテモ本使トシテハ從來ノ經驗ニ鑑ミ英米石油業者トノ取引ノミニテハ安心出來ス依テ蘭印政府ハ必ス之ヲ實行セシムル様責任ヲ執ラレタキ旨竝ニ向井氏ヨリ本件交渉ニ關シ閣下ニ御助力仰キ出ツルコトアルヘシ依テ本石油問題ニ關シテハ閣下竝ニ當局ノ御援助アリタキ旨述ヘタルニ對シ總督ハ三百萬噸云々ハ承知セス且御話ニ對シ御答ヘ致兼ヌルモ本件ハ蘭印側代表ト御交渉アリタク又向井氏ノ問題ニ關シテモ同様蘭印側代表ト折衝セラルル様希望スト我不關焉式態度ヲ執リタルニ付本使ハ石油問題ハ我方ニ取り死活ノ問題ニテ之カ解決ハ最モ重視スルモノナルニ付閣下ノ援助ヲ期待スルモノナリト重ネテ強ク述ヘタルニ先方ハ默シタリ依テ最後ニ勿論本使ノ使命ハ石油問題ノミニハアラサルモ各種ノ問題ヲ一度ニ討議スルモ能率のナラスト思考スルニ付先ツ石油問題ヲ片附ケタキ希望ナリト述ヘタルニ先方ハ首肯キタルカステ一時間餘ノ會見ヲ終レリ(本件ニ關スル所感後電ス)

460

昭和15年9月13日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭会商での蘭側首席代表問題につき妥協方

請訓

バタビア 9月13日前発

本省 9月13日後着

會商第六號

貴電第四二七號及往電第八四二號ニ關シ(和蘭側代表任命ノ件)

本十二日齋藤ヲシテ「ホ」通商局長(近ク總務長官ニ就任ノ豫定)ヲ往訪セシメ貴大臣ヨリ何分ノ御通報アル迄和蘭側ノ首席代表「ファンモーク」ニ對シテハ政府代表トシテノ出迎ニ對スル答禮ハ爲スモ今次會商ノ首席代表トシテノ正式訪問交換ハ爲ササル方針ナル旨傳ヘシメタル處先方ハ本件首席代表問題ニ付テハ相當苦慮シ居ルモノノ如ク本問題ハ何トカ打開致度ク右方策トシテ自發的二總督ヨリ本使ニ對シ重要案件ニ付テハ必要ニ應シ交渉ニ應スヘキ旨述ヘシメ右意見ヲ盛ル「コミニケ」ヲモ更ニ發表スヘキニ付右程度ニテ本問題ノ解決ヲ得間敷ヤト述ヘタル趣ナリシニ

付右ニ對スル回答トシテ蘭印側希望ハ帝國政府ニ取次クヘキ旨答ヘシメ置キタルカ他方往電第一號總督トノ會見ノ際先方ヨリ日本側ハ和蘭側ノ意嚮ヲ確メサルニ本使ヲ任命セラレタルコトニモアリ蘭印側トシテモ自動的二其ノ最適ト信スル者ヲ選定シタル次第ナリ旁法律的二總督ハ交渉シ得サル立場ニアルニ付政府代表ト交渉セラレタク但シ總督トシテハ本使提出ノ案件ニ付テハ必要ニ應シ商議ニ應スヘク又勿論本使ノ身分ニ應セル名譽ト待遇ハ最上ニ重シ居レリト述ヘ居タル次第ニモアリ右蘭側ノ讓歩的出方ニモ徴シ且ハ本問題ニ付之以上固執シ會商進展ヲ遷延スルコトハ得策ナラスト思考セラルルニ付本件ハ右ノ程度ニテ手ヲ打ち然ルヘキニアラスヤト存セラル尤モ「ファンモーク」トノ交渉ニハ主トシテ齋藤及太田ヲシテ之ニ當ラシムルコトトスヘシ

461

昭和15年9月13日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭会商に対する蘭印總督の熱意なき態度に

ついて

バタビア 9月13日後発
本 省 9月14日前着

會商第九號(極秘)

往電會商第五號總督トノ會見ノ際得タル印象ニ依レハ彼ハ外交的辭令ニ終始シ本使ノ日本ニ對スル差別的待遇ノ存在ヲ暗示シタルニ對シテモ曾テ其ノ事實ノナキヲ強辯シ將來モ亦從前ノ如ク何レノ國ニ對シテモ公平ニ差別待遇スル意思ハナイト言フカ如キ舊式ノ外交的辭令ニ終始スル態度ヲ以テシテハ蘭印ノ生存ニモ懸リ最早ヤ相容レラレサル事態ナルコトヲモ認識セス極力政治問題ニ觸ルルヲ惧ルル態度ヲ露骨ニ示シ日本政府ノ蘭印ニ對スル眞意ヲ打診セントスル熱意ノ片鱗タモ之ヲ認ムルヲ得サリキ彼カ兩國親善ノ眞意ヲ了解スルニ非サル限リ斯ノ如キ總督ヲ相手ニ交渉ヲ進ムルモ無駄ニシテ本使カ遙々來レル甲斐ナキヲ感セシメラレタリ

(以下電信事項)

當地發會商第一號ヨリ第三號迄ハ會商第五號、第六號、第七號ト改番セラレタシ

462

昭和15年9月16日

小林日蘭會商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

対日石油供給量に関する交渉内容報告

バタビア 9月16日後発
本 省 9月17日前着

會商第一六號

十四日午後四時半「フアンモーク」其ノ他蘭側代表小林使節ヲ訪問ノ際ノ會談内容左ノ如シ

會談冒頭ニ於テ本會商ニ於テ石油問題ニ關スル總督ニ對スル本使ノ申入ニ言及シ來レルヲ以テ右ヲ更ニ説明シ我方ハ石油資源確保ノ建前ヨリ向フ五箇年間三百萬噸餘ノ輸入ヲ確保シタク右ニ對シ蘭側政府ノ保障ヲ得タキ旨我方交渉案ニ基キ縷々力説シ本件問題ノ重要性ニモ鑑ミ早急解決方ヲ希望セル處蘭側ヨリ從來日本ヘノ輸出ハ年額六十萬噸乃至九十萬噸ナル處右ヲ突然三百萬噸餘ニ増加スルハ蘭印ノ石油保有量ハ他ノ產國ニ比シ極メテ少量ニシテ加フルニ隣接諸國ヘノ輸出モ考慮スルノ要アリ是ヲ犠牲トシテ日本ヘノミ多量ヲ輸出スルハ均等待遇ノ原則ニモ反スルノミナラス技術的ニモ關係石油會社ト協議ノ上ナラテハ豫想困難ナリ

加フルニ從來右諸會社カ石油供給契約ニ於テ義務不履行ノ事實アリタルヲ知ラサルニ付日本ニ對スル輸出ニ蘭印政府カ保障ヲ與フルニハ大ナル困難アリ從テ日本ニ對スル供給ハ各個別會社ノ責任ト爲シ故障起リタル際始メテ政府力カ斡旋ニ出ツルコトト致度シ尙東京ニ於ケル石油契約ハ日本側ハ各種ノ機關是カ交渉ニ當リ居ル處右ハ双方誤解ヲ起ス惧アルニ付是ヲ統合セラレタシト希望の意見ヲ開陳セリ依テ我方ハ多量ノ石油輸出ニ關スル技術問題ハ専門家ノ討議ニ移シ他ノ諸案件ニ先立ち先ツ石油問題ヲ解決シタシト申入レテ會談ヲ終リタリ

右會談中先方ハ三百萬噸對日輸出ノ困難ヲ仄スニ努メ蘭印政府輸出保障問題ヲ極力避ケンツスルカ如キ態度ニ出テタルカ其ノ會談中我方ヨリ三百餘萬噸對日輸出確保ノ爲ニハ他國ニ振り向ケタルモノヲ日本ニ振り向ケル問題アルト共ニ我方ノ石油企業參加問題モ考慮スヘキモノナリト述ヘタルニ對シ先方ハ何レ向井氏ヨリ具體の説明竝ニ申出アリタル際研究スヘシト答ヘタリ

463

昭和15年9月18日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

蘭印石油買付け交渉はバタビアで向井をして

担当方請訓

バタビア 9月18日後発

本 省 9月19日前着

會商第二一號

日本⁽¹⁾ニ於テ此ノ際是非蘭印石油三百十五萬噸ノ買付ヲ必要トシ而モ東京ニ於ケル交渉ニシテ行惱ノ状態ニアルニ於テハ右交渉ヲ當地ニ於テ向井ヲシテ行ハシムルコトト致度キニ付何分ノ儀折返シ御回電ヲ請フ

或ハ當地ニ於ケル交渉ハ石油企業問題ニ影響スヘキヲ恐レルルヤモ知レサルカ右危體ハ買油交渉カ東京又ハ貴地^(當カ)何レニ於ケルヲ問ハス全然同一ナルノミナラス當方トシテハ寧口斯ル危體ヲ抱キ居ラサル次第ナリ

尙假ニ三百萬噸餘ノ買付交渉不成立ノ場合東京ニ於ケル失敗ハ單ナル商談不成立ニ止マルヘク何等政治的反響ヲ伴ハサル次第ニテ此ノ際急ニ東京ニ於テ石油問題ヲ提議シタルハ右ノ點ヲ考慮シ先方ニ於テ先手ヲ打チタルモノトモ思

考セラル

然ルニ當地ニ於ケル場合ハ交渉不成立ニ依ル結果ニ付テハ日本ノ石油問題ニ關スル現狀ニ鑑ミ世界輿論ハ交渉不成立ノ蘭印側ノ道德的責任ヲ問フコトモナルヘク蘭印側ニ於テモ右ヲ考慮シ成立方ニ付努力スルニ至ルモノト觀測セラル

又石油企業問題交渉ニ當リ右買油不成功ノ場合ハ是ヲ利用シ企業問題ニ付蘭印側ヲ壓迫スルコトモ可能ナルヘク更ニ蘭印政府ニシテ買油問題ニ直接關係スルコトハ買油ヲ理由ニ蘭印石油會社ノ株ヲ我方ニ賣渡サシムル工作ニモ利用シ得ヘシ

現在ノ我方事情ヨリ判斷スルニ買油確保ハ多少ノ價值ノ問題ヲ云々スヘキ時期ニアラサルヘキニ付向井ヲシテ當地ニ於テ日本石油關係業者ノ利權ヲ一元的二代表シ交渉セシムルコト却テ有利ナルヘシ

但シ東京交渉ヲ當地ニ移ス場合多少時間的損失アルヘキコト豫想セラルルモ東京ニ於ケル交渉カ當地政府ノ指圖ニ依リ遷延策ニ出テ居ルヘキニ想到スル時右時間的損失モ實ニ損失ニアラサルヘシト思考セラル

以上ノ理由ニ依リ東京交渉ニシテ現在行惱ミノ狀態ニアルニ於テハ當地ニ移シタキ希望ナリ

本件ハ當地出張中ノ陸海軍向井其ノ他關係者モ積極的贊意ヲ表シ居レリ

464 昭和15年9月19日 松岡外務大臣より
小林日蘭會商代表宛(電報)

蘭印石油買付け交渉の向井担当を承諾方回訓

本省 9月19日後8時5分発

第六號(至急)

貴電第二一號ニ關シ

燃料局、陸、海軍ト協議ノ結果向井ヲシテ買油交渉ニ當ラシムルコトニ決定シタルニ付左記事項向井ニ御申聞ケ相成度尙貴使ニ於テモ本件解決方ニ關シ御盡力相成度

一、東京ニ於テ買油交渉開始セル主旨ハ爲替、買油條件、配船及「ブローカー」ノ統制等ノ必要上我方ノ希望ニ基キタルモノニシテ先方ヨリノ發言ニ非ス

二、交渉ノ結果約定濟ノ分ハ往電第三號ノ通りナル處約定未濟ノ分ニ付テハ貴地ニ於テ向井ヲシテ本邦石油業者代表

トシテ一元の二交渉セシム

三、往電第三號ニ記載セル我方ノ申入レニ對シ未回答ノ分中
何等回答アル場合ハ其ノ都度電報ス

四、我要求充足ノ爲ニハ石油増産計畫ヲ樹テシメ且他國ヘノ
振當量ヲモ獲得スル様盡力セラレ度シ

五、往電第三號ニ於ケル「ライ」及「ス」社ヘノ申入高ハ一
應ノ計畫ニ基キタルモノナルニ付兩社生産及在庫高ノ都
合ニ依リ兩社間ニ彼是振替フルコト差支ナキモ總量ハ勿
論品種別ノ數量ヲ減少セシメサル様致度

六、價格ニ付テハ往電第三號六ノ通り主張スルコト
尙本日「ライ」社ハ「ボーナス」ヲ十仙ニ値下ケ方承諾
セリ

七、支拂條件ニ付先方ハ七五%ヲ米弗ニテ支拂フコトヲ要求
シ居ルモ我方ハ「ミリー」分ハ磅其ノ他ハ全部盾トスル
コトト致度ニ付御承知相成度
ハ、三百十五萬噸ノ申入レハ一應ノ目標ナルヲ以テ之カ解決
後事情ニヨリ更ニ増額スルコトアルヘキニ付御含置相成
度シ

往電第四四二號ヲ會商第五號ト訂正アリタシ

465

昭和15年9月20日 小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭会商進捗のため齋藤總領事をしてホーフ
ストラーテン蘭印經濟省通商局長と内密意見
交換について

バタビア 9月20日後発
本省 9月21日前着

會商第二四號(館長符號扱)

今後交渉ノ順序及方針ニ付テハ慎重審議中ナルモ十八日
「ホーフストラーテン」代表ト齋藤ト會談シタル内容左ノ
通り

尙本會談ハ兩者限りノ個人的意見交換ナルカ右ハ他ニハ絶
對發表セサルコトヲ確約シタル趣ニ付右様嚴ニ御取計ヒ置
キヲ請フ

「先ツ「ホ」ハ石油問題ニ關シ蘭側ノ困難ナル立場ヲ披瀝
シタルニ付齋藤ハ右ハ諒解シ得ルモ同時ニ日本側トシテ
ハ日本對英米ノ關係ニ鑑ミ三百萬噸ハ愚カ全需要量ヲ蘭
印ニ期待シ居リ從テ本問題ハ何トシテモ解決スルノ決意
ヲ有スルコトハ良ク御諒知アリタシト答ヘタルニ「ホ」

ハ充分之ヲ諒解セリト述フルモ尙諄々ト政府トシテB、P、M及「コロニアル」兩社ニ是ヲ強ヒルノ力無キ旨等ヲ述ヘタルニ依リ齋藤ハ此ノ點ニ關スル懸念ハ客年九月以降數度言及シタルニ對シ貴官ハ其ノ都度兩石油會社トモ和蘭會社ナル故必ス賣ラシムヘシト確言セラレタルニアラスヤ且又米國ニ於テハ本問題ニ關聯シ無理ヲ言ヘサル立場ニアリ又貴方ニ對シ強力手段ニ出ツルカ如キコトモ想像シ得サルト共ニ又英國側ニ於テ異存アル場合ハ我方ニ於テ英國ト話合ヲ爲スモ可ナルヘク貴方トシテハ何トシテモ日本側ノ要求ヲ満足セシメサルヘカラサル立場ニアルコトヲ說キ兩石油會社ニ配給方法ヲ命スレハ事足ルヘク我方ノ強硬ナル立場ヲ口實ニ利用シテ切拔ケ得ラルヘシト述ヘタルニ「ホ」ハ頷キ居タリ

三、尙「ホ」ハ會議ノ急速妥結ヲ計ル爲何等カ一案アリヤト質シタルニ付齋藤ハ我方トシテハ必要トスル重要資源ノ自由ナル獲得ヲ期待スルモノニシテハハ絕對的ニシテ重要資源ハ全面的ニ蘭印ニ賴ルモノナリ通商問題ニ付テハ貴方ヨリモ註文アルヘク我方ニ於テモ充分是ヲ傾聽スヘキハ勿論ナルモ石油問題、企業、入國等ニ於テ我方ノ希

望スル所ハ其ノ必要トスル物資ハ日本人ヲシテ之ヲ開發セシメ之ヲ自由ニ日本ニ持込ムコトニアリテ現ニ石油ヲ英米會社ヨリ購入セサルヘカラサル爲ニ御承知ノ如キ目下ノ問題カ發生シ居ル譯ナリ

勿論²⁾日本側トシテ原則的ニ蘭側ト提携シテ之カ開發ニ從事スルハ勿論ナルモ若シ蘭印側カ採算取レサル場合ハ合辦ヲ肯セサルヘキニ付其ノ際ハ日本人單獨ニテ經營スヘク之ニ許可ヲ與ヘラルヘキハ當然ナリト思考スト述ヘタルニ「ホ」ハ勿論東洋ニ於テ隣接スル強國日本トノ提携ノ要ハ痛感スル所ニシテ御承知ノ通り既ニ個別的ニハ「ニツケル」鑛山鐵鑛山開發ニ付テモ協力ヲ與ヘ居リ蘭印側ノ此ノ氣持ハ御推察ニ難カラサルヘシト思考スト答ヘタリ

三、次テ「ホ」ハ蘭印ト日英米トノ關係ニ言及シ來リタルニ付齋藤ハ貴方カ英米ト友好關係ニアラサルヘカラサルノ必要ナルハ了解シ得ルモ此ノ際思ヒ切ツテ政治的同盟ハ不可能ナリトスルモ日蘭印經濟同盟ニ迄兩國關係ヲ持來ラス決意ナキヤ右ハ蘭印百年ノ爲ノミナラス又日蘭印兩國共存共榮ノ爲ニモ絕對必要ナルヘシ米國ニ對シテハ

日蘭印經濟同盟成立スルトスルモ謬誤及錫ノ點ニ於テ保障シ遣レハ充分ニシテ右以外ニ米國ノ蘭印ニ對スル關心ハ殆ト零ナルヘク又英國トシテモ事經濟的問題ナル限り特別ノ干涉ヲ爲シ來ル餘地ハナカルヘシト述ヘタルニ「ホ」ハ右ハ極メテ興味アル問題ナリト乘氣ヲ示シタルニ付齋藤ヨリ前記我方ノ原則的要求ヲ容ルル一ノ取極ヲ作ルモ可ナルヘク例ヘハ前文ニ於テ日蘭印兩國ハ太平洋ニ於ケル兩國ノ傳統的親交關係ノ一層緊密化ヲ圖ルヘキヲ痛感シ且相互ニ兩國ノ困難ナル立場ヲ了解スルヲ以テ經濟的二相互援助ヲ爲スヘシトノ趣旨ヲ盛り更ニ我方ニ與フル各種「コンセツション」ノ概要ヲモ明示シタル一種ノ經濟同盟ノ如キ取極ヲ爲スコト得策ニシテ右了解ノ上ニ立チ交渉ヲ進ムルニ於テハ會議ノ前途ヲ明朗ナラシムルノミナラス之ニ依リ日蘭印ノ名實共ニ備ハル共存共榮ノ境地ヲ現出シ得ヘシト確信スト力説シタルニ「ホ」モ右ハ一案ナルニ付具體的案文內示アリタシ自分トシテモ充分研究ノ上更ニ打合スヘシト述ヘ更ニ語ヲ繼キ和蘭人ハ尊大ノ英國人ヲ何トナク好ミ居ラス又蘭印トシテ米國ニハ必スシモ依存セサルモ經濟的二ハ大顧客トシテ之

ヲ見ルノミナリ

又日蘭民共榮提携ハ非常ニ結構ナルモ和蘭ハ國柄トシテ何ヨリモ先ツ「プレステージ」ヲ重シシ壓力ノ前ニハ承服シ得サルモ其ノ體面ヲ重シシ同情アル態度ヲ以テ接シ來ル相手ニハ全幅ノ協調ヲ咨マス從テ日本側ニ於テモ蘭印ノ獨立性ヲ先ツ第一ニ尊重セラレタシ日蘭印提携ト言フモ一方カ隸屬の立場ニ立ツコトハ絕對ニ認容シ得ス滿洲國ノ如キ地位ニ立ツハ忍フヘカラスト述ヘタルニ付齋藤ハ日本ハ蘭印側カ既ニ累説シタル如キ我方原則ニ適應スルノ態度ヲ執ラルル限り何處迄モ貴方ノ體面及立場ハ充分尊重スヘシト答ヘタリ更ニ「ホ」ハ語ヲ繼キ日獨關係ハ現在如何ニナリ居レリヤト問ヘルニ付齋藤ハ一體蘭印ハ最後迄獨逸ニ抗戰シ英國沒落スルコトアルモ絕對ニ獨逸ト妥協セサル決意アリヤ例ヘハ獨逸カ「スマトラ」割讓ヲ要求スル場合ハ如何ト反問セルニ和蘭ノ獨立カ確保セラルル迄對獨逸協等ハ絕對アリ得ス從テ「スマトラ」ノ對獨割讓ノ如キコトモ絕對考ヘラレスト答ヘタルニ依リ齋藤ハ果シテ蘭側決心ニシテ右ノ如ク又若シ前記日本トノ相互援助ニ迄進ム迄ノ態度ヲ我方ニ披瀝セラル

ルニ於テハ日本ハ貴方トノ信義ヲ重シ飽迄獨逸ニ對シ
貴方ト共ニ蘭印共同防衛ニ當ルノ熱意ト覺悟ヲ藏スヘシ
ト強調シ置キタリ

四、尙其ノ際「ホ」ハ一邦人ノ東亞局長ニ語ル所ニ依レハ小
林全權ハ總督カ政治問題ニ付テ論及セサリシ爲「デイス
イルージヨン」ヲ感シ居タリトセラルル由ナルカ果シテ
然リヤト質シタルニ付齋藤ヨリ右事情ハ知ラサルモ蘭印
ニ於テ廣汎ナル全權ヲ有スル總督カ内閣ヲ「バック」ト
スル一國國務大臣トノ重要會談ノ際單ナル外交的辭令ヲ
振廻シテ成果ヲ見ルヘキモノナカリシハ自分トシテ物足
リヌ感シヲ受ケタリト答ヘタルニ「ホ」ハ何分初對面ノ
コトニモアリ漸次總督ニ於テモ眞情ヲ披瀝スル時期アリ
ト思考スト答ヘ齋藤ヨリ右機會ヲ造ラルル様希望スル旨
述ヘ置キタリ(同夜「レセプション」ノ際「ホ」ハ總督
ニ於テハ近ク小林大臣ヲ「バイテンゾルグ」總督官邸ニ
宿泊方御招待スヘク其ノ際相互懇談ノ機會アルヘシト述
ヘ居タリ)

466

昭和15年9月27日

小林日蘭會商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭會商の見通しにつき所感報告

バタビア 9月27日後発

本省 9月28日前着

會商第三三號(極秘、館長符號扱)

本使着「バ」以來ノ所感等左ノ通り

一、當領和蘭人ハ今次歐洲戰ニ關シ獨逸ノ上陸作戰ハ失敗シ
又早晚米國モ參戰スヘク英國ハ結局立直リ壓倒的逆襲ニ
依リ獨ラ屈服セシムヘシト信シ從テ現狀ニ於テハ英米ト
モ日本ニ對シ強硬態度ニ出ツルコトヲ得サルモ對獨勝利
ノ上ハ對日壓迫ニ轉シ來ルヘク蘭印領モ當分ノ内ノミハ
最少限度日本ノ要求ニ應スルノ外無カルヘシト爲シ居ル
モノノ如ク要スルニ蘭側ニハ日蘭印間建設的提携ニ積極
的二努メントスル眞意無キヤニ觀察セラル

二、但シ一般企業ニ對スル現實性アル仕事ニ關シテハ交渉モ
比較的圓滿ニ進捗スヘシト認メラル例ハ野村、古川、
大倉其ノ他純然タル商取引ヲ目的トシテ當領資源開發ニ
當ルモノニ對シテハ容易ニ歡迎スヘク此ノ種ノ我方申入

(欄外記入)

ハ相當見込アルヘシ乍併入國、企業ニ關スル原則問題ニ關シテハ果シテ順調ニ行クヤ否ヤ疑問アリ併シテ此ノ種問題ニ關シテハ二度三度抑シテ見テ旨ク行カサル時ハ輕ク打切ルコト然ルヘシヤト思考セラル何トナレハ今次歐洲戰ノ模様如何ニ依リ又之ニ伴フ蘭印側(首腦部ハ「ユダヤ」人多シ)態度如何ニ依リ我方ノ打ツヘキ手ヲ自由ナラシムル餘地ヲ殘スヘキヲ以テナリ

三、從テ我方トシテハ何ヨリモ先ツ石油交渉ニ重點ヲ置キ入國、企業等ノ問題ニ關シテハ蘭印ヲシテ國際情勢ニ對應シテ善處シ得ル様或程度ノ伸縮性ヲ持チ得ル如ク爲サシメ置ク方利益多カルヘキヤニ認メラル

四、佛印問題カ當領ニ至大ノ影響力アルハ申ス迄モ無キコト乍ラ「カムラン」灣ノ租借問題乃至新嘉坡ヘノ進出策等如何ニ蘭印問題ヲ解決スルニセヨ結局是等ノ問題ニ觸レサル限り蘭印ニ對シテハ一時簡單ナル經濟的進出ニ依リ量シ置ク方得策ナラスヤ但シ若シ支那事件力速ニ處理セラレ東亞共榮圈建設ノ大方針ヲシテ一舉ニ可能ナラシムル時期至ルトセハ又別問題ニシテ夫レカ爲ニハ好機會ヲ獲ヘ支那事件ノ一日モ早キ解決ノ必要ヲ痛感セラルル次

第ナリ

尙英米ニ對スル信賴極メテ強キ當地ノ空氣ニ鑑ミ石油問題ノ如キモ米國ノ態度依然トシテ頑強ナル間ハ解決極メテ困難ナルヘキ處支那事件ノ早急解決ノ姿勢ヲ取ルコト自身米國及蘭印當局ヲシテ反省セシムルニ充分ナルヘシ

(欄外記入)

Pending ニシ置キ引張ルコト可然

467

昭和15年9月28日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

石油問題急速解決に関するわが方覚書提出と
蘭側回答について

別電一 昭和十五年九月二十八日發小林日蘭会商代表

より松岡外務大臣宛会商第三五号

右わが方覚書

二 昭和十五年九月三十日發小林日蘭会商代表より

り松岡外務大臣宛会商第三六号

右蘭側回答

バタビア 9月28日後発

本省 9月29日前着

會商第三四號

(1) 二十三日齋藤ヲシテ別電第三五號「エイド、メモアール」ノ通り「ホーフストラーテン」(「ファンモーク」)病氣中ナリシ爲ニ申入レシムルト共ニ我方ニ於テ石油問題ノ急速解決ノ重要性ニ付説明セシメ置キタル處二十五日別電第三六號ノ通り回答越シタルヲ以テ同日齋藤及太田ハ「ホ」ニ會見シ先方回答ノ前段ハ恰モ石油問題ハ向井及英米兩者間ニ解決セラルヘキ筋合ニシテ政府ハ單ニ側面的援助ヲ爲サントスル趣旨ト認メラルル處我方トシテハ東京ニ於ケル交渉ニ鑑ミ右ハ交渉進捗上極メテ非實際的ナル上小林大臣總督會見ノ際總督ヨリ石油問題ハ向井「ファンモーク」間ニ於テ交渉方勸告アリタルニモ顧ミ旁々以テ寧口本件交渉ハ主トシテ向井「ファ」間ニ於テ爲サルヘキモノナルコトヲ指摘シ先方回答後段ニ關シテ石油問題ノ重要性ヲ更ニ説明シ本件解決ヲ見ルニアラサレハ他ノ諸問題ヲ取リ上クル用意ナキコト及我方トシテハ他ノ問題ヲ取リ上クル爲之ヲ石油問題ノ「バーゲン」ニ供セラルルカ如キハ絕對ニ避ケ度

キ意嚮ヲ明瞭ニシ置キタル趣ナリ

右ニ對シ前段ノ問題ニ關シテハ飽迄假案ニテモ我方提案ノ全貌ヲ提示方繰返シ希望シタル上日本側石油問題ノミヲ押付クルカ如キハ餘リニ一方の御都合主義ナリト零シ居タルニ付然ラハ貴方ニ於テモ希望スル問題ヲ我方ニ提示シテハ如何ト應酬シタルカ先方ハ飽迄提案全部ヲ提示方強調シ居タル趣ナリ

(2) 二十六日求メニ依リ齋藤、太田ハ「ホ」ト會見シタル際我方ヨリ石油問題ヲ解決セスシテ他ノ諸問題ヲ交渉スルカ如キハ我方ニ於テハ無意味ナル點ヲ強調シタルニ對シ先方ハ蘭印トシテハ石油以外砂糖「コーヒー」「コプラ」等ヲモ對日輸出シ度ク尙蘭印物資ノ日本經由對獨輸出禁止方ニ付協議致度キ旨述ヘタルヲ以テ兩人ヨリ右諸問題ハ我方ニ於テ交渉ニ應スル用意アル旨述ヘタル上先方ニ於テ斯ル問題ハ遠慮ナク提案アリタシ但シ右ヲ石油問題ト竝行シテ懸引ノ具トシテ之ヲ行ハントスルカ如キハ我方ノ承服シ能ハサル所ナル點ヲ説明シ兎ニ角何ナリト提案アリ度キ旨述ヘタルニ對シ先方ハ斯ル問題ハアルモ我方ヨリ提案全部ヲ提示アリタキ旨強調シ遂ニ何等意見ノ一致ヲ見サリシ趣ナリ右

兩回ニ亘ル會見ニ於テ先方ハ英米ニ對スル信賴極メテ強キモノアリ獨逸ノ敗北ヲ確信シ居ルカ如キ語調ヲ以テ終始一貫シ日本ノ脅威恐ルルニ足ラストスル強カリヲ示シ石油問題ニ關シテモ隣接友好國ニ對スル供給ヲ犠牲ニシテ日本ニ大量輸出スルコトハ蘭印從來ノ大方針タル友好國均等待遇ニ反ストシテ頑固ニ我方要求受諾困難ヲ仄カシ居タル趣ナリ

(別電一)

バタビア 9月28日後発
本省 9月28日夜着

會商第三五號

Aide-memoire

The Government of Japan intends to transfer to Batavia the negotiations concerning the purchase of petroleum produced in the Netherlands Indies, which have been carried in Tokio. Accordingly, Mr. Mukai, representing as the sole agents of all petroleum interests of Japan, shall negotiate hereafter at Batavia. It is requested

that the Governments of the Netherlands Indies would sympathetically pay a special attention to see the negotiations be speedily brought to a satisfactory end.

(別電二)

バタビア 9月30日後発
本省 10月1日前着

會商第三六號

¹⁾
Aide-memoire

The Japanese Delegation has been good enough to inform the Netherlands Delegation that it is the intention of the Government of Japan to transfer to Batavia, through the sole agency of Mr. Mukai, the negotiations concerning the purchase of petroleum produced in the Netherlands Indies, which have hitherto been carried on in Japan.

Though the oil companies concerned have selling organizations available in Japan for that purpose, there is much to be said in favour of Mr. Mukai continuing these negotiations, during the present conference, with the

representatives of the oil companies in the Netherlands Indies, who have been so advised by the Netherlands Delegation and with whom Mr. Mukai can get into touch at his earliest convenience.

As has been stated before, the Government of the Netherlands Indies is prepared to lend its assistance, if necessary, to facilitate and stimulate these negotiations.

⁽²⁾ The Netherlands Delegation takes this opportunity to remind the Japanese Delegation of the fact that, up to the present moment, the discussions have been limited to oil purchases and oil concessions and that other points to be considered at the economic conference have not yet been formulated. Without desiring to delay the proceedings with regard to the negotiations about oil, the Netherlands Delegation wishes to draw the attention to the unsatisfactory situation the economic conference being still without an agenda after nearly two weeks, as the Japanese desiderata, with the one exception considered of paramount importance by the Japanese Delegation, have

no yet made known, although the conference was initiated at the special request of the Government of Japan.

The Netherlands delegation must, therefore, reiterate its proposal, which was put forth orally at the meeting on September 16th that the two delegations shall now proceed severally to draw up a list of further points for discussion and shall thereafter endeavour to come to an agreement concerning the full agenda of the conference.

468 昭和15年9月30日

松岡外務大臣より
在バタビア斎藤総領事宛(電報)

日蘭会商の交渉内容が英米側に筒抜けとなつ
てゐる旨通報

本省 9月30日後6時10分発

第四五九號(極秘、館長符號扱)

石澤ヨリ

諸般ノ情報ニヨレハ貴地ニ於ケル蘭側トノ話合ハ一切其ノ
儘英、米側ニ筒抜けトナリ居ルコト確實ト認メラル御含ミ
迄

469

昭和15年9月30日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

三国同盟成立に当たり日蘭会商は石油問題解決を急ぎその他の問題は時機が至るまで交渉継続方意見具申

バタビア 9月30日後発

本 省 9月30日夜着

會商第三九號(極秘)

今次協定成立ニ依リ帝國ハ一日モ速ニ支那事變處理ヲ急キ餘力ヲ蓄ヘテ成ルヘク速ニ斷乎タル措置ヲ執リ悔ヲ後世ニ胎ササルノ決意ヲ爲スコト最モ肝要ナルヘク帝國政府ニ於テモ右方針ニ基キ準備セラレ居ルコトト存スル處然ラハ我方トシテハ蘭印ニ對シ石油問題ノ解決ハ急クモ其ノ他ニ付テハ右時機至ル迄適當交渉ヲ繼續シ其ノ間軍事的其ノ他ノ必要ナル調査研究ヲ行フ餘裕ヲ持つ方針ニ出テタク從テ代表部ハ構成人員ハ交代ストモ來年三、四月雨期明迄モ存續セシムルコトト致度キ處何分ノ儀御回電アリタシ

470

昭和15年10月1日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

非公式会談において蘭側が三国同盟条約第二条の東亞における日本の指導的地位に関し解釈照会について

バタビア 10月1日後発

本 省 10月2日前着

會商第四一號

⁽¹⁾三十日午後齋藤太田兩人ハ「ホ」ト三時間餘ニ亘リ非公式會談ヲ行ヒタルカ冒頭「ホ」ハ今次日獨伊樞軸強化ハ蘭側ニ取り甚タ遺憾ニシテ右協定ニ含マルル日本ノ東亞ニ於ケル「リーダーシップ」ハ蘭印ニモ押付クルモノナリヤト質問シ本件ハ今後日蘭印會商ヲ繼續スヘキヤ否ヤニモ關係アリト述ヘタルヲ以テ(三國協定發表後當地各新聞ハ蘭印ニ對シ如何ナル國ノ「リーダーシップ」ヲモ容認シ得スト大見榮ヲ切り居レリ)右ハ日本ト蘭印トノ關係ニハ影響ナク單ニ日獨伊三國ノ據ルヘキ所ヲ相互ニ認メ之ニ干渉セサルト共ニ太平洋ニ戰禍ノ波及ヲ防止セントスルニアリ蘭印ニ對シ「リーダーシップ」ヲ及スヤ否ヤハ蘭側ニ於テ之ヲ承

認セハ我方トシテハ満足ナルハ勿論ノ儀乍ラ之ヲ無理押付
ケントスル意味ニハアラス帝國政府ノ東亞諸國ニ對スル共
存共榮原則ニハ何等變更ナク蘭印ニ對シテモ右精神ヲ以テ
對スルモノナリト説明シ置キタリ次テ今次會商問題ニ移リ
タル處蘭側ハ依然トシテ我方提案全部ノ提示ヲ要求シ來レ
ルヲ以テ我方トシテハ石油問題ノ重要性ヲ強調シ之カ先決
問題タル所以ヲ往電第三四號ノ通り繰返シ説明シ置キタル
カ右ノ場合ト同様蘭側ヨリモ何等提案アラハ遠慮ナク提示
アリタキ旨ヲ申入タルカ之ニ對シ何等答フル所ナク日本側
ニ於テ石油問題ニノミ「スチツク」スルニ於テハ會商ノ前
途ハ暗澹タリト嘆息シ居リタル由ナリ

尙日本ノ要求量ヲ供給シ夫レニ依リ生スル不足量ハ「キユ
ラソウ」ヨリ蘭印へ輸入スル場合運賃ノ差額ハ日本側ニ於
テ負擔スルヤト尋ネタルヲ以テ斯カル技術問題ハ向井氏ト
ノ協議ニ讓リタク我方トシテハ蘭印ニ損失ヲ與フルハ本意
ニ非サルモ交渉進捗上蘭印側カ我方ノ要求量ニ對シ數字ヲ
示シテ受諾ノ能不能ヲ説明アリタク右ノ如キ問題モ其ノ後
ノ問題ト致度シト述ヘタルニ對シ之ヲ應諾シタルカ其ノ際
先方ハ石油問題ヲ「コムプロマイズ」スル材料トシテ石油

企業ノ問題ヲ取出シ既ニ他國ニ與ヘタルモノハ別トシ政府
留保地域ニ付テハ話合ノ餘地アル旨ヲ洩ラシ居リタル趣ナ
リ

要之今次非公式會談ニ於テモ前回同様双方ノ主張ヲ繰返シ
タルニ過キサリシカ蘭側トシテハ最近會商ノ進行ニ付當地
一般ノ空氣カ不安ニ滿タサレ居ル現狀ニ鑑ミ適當ノ機會ニ
「デョイント、コンムニケ」ヲ發表シタク尙先般送付越セ
ル「エード、メモアル」(往電第三四號別電)ニ對スル回答
ヲ督促シ居タルカ先方ノ態度ハ前回ニ比シ著シク軟化シ居
ルヤニ認メラレタル由ナリ



471 昭和15年10月10日 小林日蘭會商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

蘭印の石油事情に関する説明書を蘭側代表部
提出について

バタビア 10月10日後発
本省 10月10日夜着

會商第五七號

蘭印代表部ヨリ七日附ヲ以テ蘭印石油事情ニ關スル説明書

ヲ送付越セル處右ハ生産高竝ニ各地精製所ニ關スル説明ノ
後生産ノ狀況竝ニ石油政策ニ關シテ左ノ通り述ヘ居レリ
一、生産狀況

一九三九年度石油生産高ハ七百九十四萬担ニ達シ右標準
ヲ以テシテハ現在算定ノ埋藏量ニテハ六、八年間ノ生産
ニ堪ヘ得ルニ過キス又近年來石油會社ノ試探掘狀況ハ從
前ニ比シ成績不良トナリツツアリ結局石油ノ生産量ハ埋
藏量ニ比シ既ニ過大ノ狀況ニ在リ

二、石油政策

一九三四年ノ埋藏量調査ノ結果思ハシカラサリシ爲政府
ハ原則トシテ新規會社ノ介入ヲ許ササルコトトシ石油見
込地域ヲBPM及「コロニアル」兩社ノ利益範圍ニ分割
「パシフィック」社ニ對シテハ中部「スマトラ」ヲ利益範
圍ニ割當テタリ

尙「ニューギニア」ノ大部分ハ「ニューギニア」石油會
社ノ利益範圍ニ屬シ從テ未タ割當ヲ爲シ居ラサル地域ハ
少ク例ヘハ「サンクリラン」周圍ノ地域「ペレン」島對
岸ノ「セレバス」島内ノ小域「ニューギニア」ノ北東及
南東地區ニ於テハ日本石油業者進出ノ餘地アリ

乍併石油ノ試探掘ニハ第五a條ニ依ルコトヲ要シ尙同條
契約地ノ周圍ニハ石油ノ流出ヲ防ク爲ニ中立地帶ヲ設ク
ルコトハ政府ノ既定ノ方針ナリ委細郵報

~~~~~

472

昭和十五年十月十二日

小林日蘭会商代表より  
松岡外務大臣宛(電報)

三国同盟は日蘭印關係に影響を及ぼさない旨  
および日本は石油問題の優先解決を望む旨の  
わが方覚書を蘭側へ提出について

別電

昭和十五年十月十二日發小林日蘭会商代表よ

り松岡外務大臣宛会商第六二号

右わが方覚書

付記

昭和十五年十月十一日發小林日蘭会商代表よ

り松岡外務大臣宛電報会商第六三号

石油問題の先行解決には応じられないとの蘭  
側回答について

バタビア 10月12日後發

本省 10月12日夜着

會商第六一號

蘭側「エイドメモアール」ニ對シ齋藤ヨシテ別電ノ通り回答セシメ置キタリ

(別電)

バタビア 10月12日後発  
本省 10月12日夜着

會商第六十二號

The Japanese delegation informs the Netherlands delegation that the Japanese delegation is desirous to have the oil problem discussed between Mr. Mukai and the Netherlands authorities, but there is no objection to technical points being taken up between Mr. Mukai's staff and the representatives of the oil companies in the Netherlands Indies. The Japanese delegation wishes to express the opinion that in spite of the tripartite treaty recently concluded among Japan, Germany and Italy, the strong desire of Japan for the maintenance and promotion of the friendly relations between Japan and the Netherlands Indies is not affected in the least. All what is

wished for by Japan is co-existence and co-prosperity with neighboring countries in the economic relations between Japan and the Netherlands Indies. The petroleum question is the pivot and it occupies the position of paramount importance as would easily be understood. The Japanese delegation firmly believes it advisable to settle first of all the petroleum question.

(付記)

バタビア 10月11日後発  
本省 10月12日前着

會商第六十三號

往電第六十一號我方「エードメモア」ニ關シ「ホ」ハ齋藤ニ對シ日本側ハ石油問題ノ解決ヲ先決條件トセラルルモ蘭印側ニ於テハ石油問題ヲ他ノ問題ト一括且同時ニ解決セントスルモノナリト述ヘタルニ付齋藤ハ然ラハ石油問題解決スルモ他ノ全テノ案件解決ヲ見ル迄石油ハ日本ニ賣ラストノ意味ナリヤト反問シタルニ「ホ」ハ石油會社ハ隨時契約範圍内ニ於テ賣却スヘキモ石油ヲ含ム全問題カ解決セラレサ

ル場合之ニ對シ蘭印政府トシテ保障ヲ與ヘ得サルコトヲ意味スルモノナリト述ベタルニ付齋藤ハ更ニ石油問題ノ重要性ヲ説キ其ノ翻意方ヲ促シ置キタル趣ナリ

~~~~~

473

昭和十五年十月十四日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

蘭印に對するわが方基本外交方針樹立につき

小林代表より意見具申

別電

昭和十五年十月十二日發小林日蘭会商代表より

り松岡外務大臣宛会商第六八号

右小林代表の意見

付記

昭和十五年十月十二日發小林日蘭会商代表より

り松岡外務大臣宛電報会商第六九号

右意見の閣議上程を使節団要望について

バタビア

10月14日後發

本省

10月15日前着

會商第六七號(至急、館長符號扱)

蘭印ニ於ケル事情及地下資源ノ豊富ナルコト住民ノ從順ナルコトハ豫テヨリ承知シ居タル所ナルモ現地ニ於テ見聞シ

蘭印ノ認識ヲ深メルニ從ヒ實ニ世界ノ至寶ナリト痛感セサルヲ得ス殊ニ日本人ノ發展ノ地トシテハ世界無比ト言フヘク當國ニ於ケル資源開發ノ餘地ノ大ナルハ實ニ豫想以上ニテ現在ニ於テモ其ノ輸出高ハ客年日本ノ對第三國輸出貿易額ノ十八億三千萬圓ニ對シ蘭印ハ十五(億)?圓ニ達シ居ル次第ニテ今更我方ノ當國ニ對スル關心ノ遲キニ過キタルノ感ヲ深クスル次第ナリ

日滿支「ブロック」モ必要テアラウカ蘭印ヲ包含スルニアラサレハ自給自足ハ不可能ナリ帝國經濟ト世界政局ヲ顧ミ帝國百年ノ計ノ爲憂慮措ク能ハス敢テ別電ノ通り日蘭問題竝ニ帝國ノ基本外交問題ニ關シ本大臣ノ所信ヲ披瀝シ進言スル所以ナリ

(別電)

バタビア

10月12日後發

本省

10月12日夜着

會商第六八號(館長符號扱)

蘭印⁽¹⁾カ英米殊ニ米國依存ノ強キ希望アルハ説明ヲ要セサル所ナリ從テ對日態度ハ飽迄米ヲ利用シ(戰爭ニ迄引込ミ)日

本ヲ牽制セントスルニ在リ假ニ蘭印カ反省シ日本トノ提携ノ必要ヲ認ムル場合ハ英國カ全敗シ米國ノ援助絶望トノ認識ヲ得タル場合ニシテ今日言説ヲ盡シテ蘭印ノ反省ヲ求ムルモ其ノ效果タルヤ極メテ疑問ナリ

然ルニ米、加、濠共同防衛問題中ニハ極秘裡ニ蘭印モ或ル程度參加シ居ルヘキコトハ容易ニ想像シ得ル所ニシテ最近ノ蘭印新聞ノ露骨ナル態度竝ニ「タラカン」問題ノ如キモ右空氣ヲ反映シ居ルモノト見ルヘシ

他方米國ノ態度ヲ觀ルニ蘭印援助ノ姿勢ハ執リツツアルモ萬一日本カ此ノ際決然進攻シ來ル場合果シテ忠實ニ應援シ來ルヘキヤハ頗ル疑問ニテ(當地一般支那人ハ米國ノ應援アリ得スト爲スニ一致シ居レリ)日本ニシテ決然タル態度ヲ執ラス空シク日ヲ過ス場合或ハ米英共同蘭印ノ防禦ノ態勢ヲ整へ來ル可能性大ナリト認メラル

萬一英米ニシテ先手ヲ打チ蘭印ニ乗込ム場合帝國トシテモ默視シ得サルヘク而シテ右情勢ノ下ニ我方カ蘭印ニ手ヲ延ハサントスルモ既ニ著シク不利ナル立場ニ立ツヘク要ハ我方ニ於テ機ヲ失セス南方問題ニ積極の二乗出スニ在リ事態斯クノ如クナルヲ以テ假ニ今回ノ會商ニ依テ或程度ノ所要

資材ヲ確保シ得ルトシテモ恐ラク一時的ニ終ルヘキハ石油問題ニ對スル先方態度ニ觀ルモ明カナリ而シテ蘭印側ノ反省ヲ促ス材料ハ一ニ日本内地ノ對支對南態度ニ付一日モ早ク其ノ方針ヲ一定スルニ在リ

顧ルニ假ニ日滿支「ブロック」ヲ豫定通り強化シ得ルトスルモ蘭印ヲ把握セスシテ之ヲ永續セシメ得ルヤ確信ナカルヘク右「ブロック」ノミヲ以テ日本ノ國防經濟ノ安全感ヲ得ルコト困難ナリ況ヤ過去三年間支那事變解決ニ没頭シ而モ何等確タル見透付カス此ノ儘引摺ラレテ國力ヲ消耗シ他方世界ノ資力タル蘭印問題ヲ解決シ得サルカ如キコトアラハ悔ヲ千載ニ遺スニ至ルヘシ南方殊ニ蘭印ニ對スル方針ヲ一定シ之ヲ斷行シ得ル計畫ヲ建テサルヘカラス之即チ支那事變ノ解決ヲ全ウスル所以ニシテ國家百年ノ計ヲ建ツル根幹タルヘキハ信シテ疑ハサル所ナリ

顧ルニ支那事變勃發當時ト今日ノ國際情勢ハ全然變化シ居ルニ拘ラス帝國外交ノ基調ヲ舊ノ如ク依然支那事變ノ解決ト言フ局所の問題ニ置カントスル惰性的態度ハ極メテ危險ナリ

日獨伊三國同盟成立スルモ我方ニ於テ英米ノ經濟壓迫ノ強

化ヲ見越シ旁對南方積極政策ヲ執ルニアラサレハ其ノ效果薄弱ナルヘク從テ右成立ノ際日本ハ既ニ南方進攻ノ態度ヲ整ヘルコトヲ決意シ居タルモノトスラ想像シ居タル次第ナリ獨伊カ日本ノ東亞ニ於ケル指導權ヲ認メタリト雖右ハ現實ニ指導權ヲ把握スルコトヲ條件トスルモノト危惧セラル而シテ英米ヲ敵トスル覺悟ヲ以テ南方ニ進出スル爲ニハ當然支那ニ於ケル消耗戰線ノ整理縮小ヲ餘議ナクセラルル處右ハ現地ノ事情ハ素ヨリ國民的感情ニ於テモ種々重大ナル困難アルコトハ充分想像セラルルモ今ヤ斯ル感情論乃至ハ局部的觀點ヨリ脱却シ冷靜ニ世界情勢ノ大局ヨリ判斷シ帝國百年ノ計ヲ樹ツルコト最必要ナリ

帝國政府ニ於テハ此ノ際南方問題ニ對スル深キ認識ヲ以テ冷靜公正達觀的態度ヲ以テ速ニ南方問題ニ重點ヲ置ク政策ヲ決定シ直ニ之カ實行ニ着手シ時機ヲ失セサルヲ望ム

(付記)

會商第六九號(館長符號扱)

バタビア 10月12日後発
本省 10月12日夜着

往電會商第六七號ニ關シ

大橋次官ヘ太田ヨリ

本件ハ廟議ニ於テ審議方要望スル筈ナリシモ小林代表ハ遠慮シ右ヲ外務大臣ノ御裁量ニ任セントスル意圖ト察セラルル處本件ノ重大性ニ鑑ミ是非閣議ニ持出ス様御配慮アリタク當地陸海軍代表ヨリモ夫々本省ニ對シ注意ヲ喚起スル趣ナリ

米ノ態度ハ其ノ海軍ノ兩洋作戰ニ不充分ナル關係上或ハ對日妥協態度ニ出ツルコトモアルヘク其ノ他種々ノ變化ヲ見ルコトヲ豫想セラレサルニアラサルモ一時的方便ニ眩惑セラルルコトナク南方問題解決ノ邁進ニ諸準備ヲ急ク要切ナルモノアリト思考セラル

~~~~~

474 昭和15年10月17日 小林日蘭会商代表より  
松岡外務大臣宛(電報)

三国同盟成立による蘭印の反日風潮激化や対  
日石油供給量に関し蘭側と意見交換について

バタビア 10月17日後発  
本省 10月18日前着

## 會商第七八號

十四日<sup>(1)</sup>蘭側ノ招待ニ依リ本使外隨員若干名ハ避暑地「セラ  
ビンタナ」ニ赴キ十五日朝「フアン、モーク」(以下「モ」  
ト稱ス)以下蘭側隨員ト本使、齋藤、太田トノ間ニ會談ヲ  
行ヒタルカ劈頭齋藤ヨリ最近蘭印新聞紙ノ論調及記事取扱  
振頓ニ反日のトナリ居ルモ右ハ蘭印政府ノ善隣政策ニモ反  
スルヲ以テ今後取締ル意志無キヤ且ツ戒嚴令下ニ在リテハ  
政府ノ意嚮一ニテ取締リ得ルニアラスヤト質シタルニ  
「モ」ハ右ニ對シ之ヲ取締ルコト困難ナリ何トナレハ最近  
ノ國際情勢ハ變化シ日本カ蘭印ノ敵タル獨逸ト協定ヲ結ビ  
タル今日今大會商ヲ繼續スルコトノ可否ニ付各方面ヨリ質  
問サヘ受ケ居ル程ニテ日本カ歐洲ニ於ケル獨逸ノ「リーダ  
ーシツプ」ヲ認メ居ル處蘭印トシテハ自由ナル和蘭本國ノ  
再興ヲ望ミ居ルモノナルヲ以テ斯カル情勢裡ニ會商ヲ繼續  
スル理由ハ一般大衆ノ理解シ得サル所ナリ繼テ日本ノ輿論  
ヲ觀ルニ同盟電ニ依リテ知ル範圍ニ於テスラ蘭印輿論ヲ刺  
戟シ沸騰セシムル惧アルモノ多シ之ヲ蘭印政府ニ於テ取締  
ラス放任セハ一層輿論ヲ硬化セルナルヘシ蘭印トシテハ敵  
國獨逸ト同盟關係ニ入りタル國トノ貿易問題ハ輕々ニ看過

シ得ル問題ナラスト述ヘタルニ對シ太田ヨリ然ラハスカ  
ル蘭印輿論ヲ鎮靜セシムル爲當方「エードメモアール」ノ趣  
旨ヲ以テ三國協定ト對蘭印關係ニ付何等カノ形式ニ於テ公  
式聲明ヲ爲シ一般ノ誤解ヲ解クコトトシテハ如何ト提案セ  
ルニ對シ「モ」ハ三國協定ハ日本ト蘭印トノ關係ニ無關係  
ナリトノ日本側主張ニモ拘ラス右ハ明カニ兩國關係ニ大變  
化ヲ與ヘタリトノ印象ヲ深クスルモノナルモ貴案ハ或程度  
迄國民ノ疑惑ヲ解キ得ルモノト思考ス

現ニ「フォルクスラート」ニ於テ日本側「エードメモリア  
ル」中ノ一部ヲ自分ヨリ公表セル際議員ハ安心セル如ク見  
受ケラレタル程ニテ場合ニ依リテハ「ステートメント」發  
表ニ並行シテ新聞記者ト「エクスプラネートリー、トー  
ク」ヲ行フコトモ有益ナルヘシト答ヘタリ次テ本使ヨリ三  
國同盟成立ノ精神ハ日本カ今次歐洲大戰ニ捲込マレサルカ  
爲ニシテ即チ米國カ參戰セハ日本モ獨ニ味方シテ戰爭ニ引  
込マルル惧アリ之ヲ避ケントセハ日本ト蘭印ト固ク握手ス  
ルコトニ依リ米國ヲシテ參戰ヲ思ヒ留マラシムルヘク以テ  
英獨戰爭ヲ有利ニ解決シ得ヘキ旨ヲ説明セルニ對シ「モ」  
ハ獨ノ敗戰コソ太平洋ノ平和維持ニ必要ナルヲ以テ是ヲ希



望シ固ク信シ居ルモノニシテ本國ヲ蹂躪セラレタル蘭印ハ獨トノ交戰國ニテ敵ト同盟關係ニ入りタル國カ孰レノ側ニ立チ居ルヤハ明瞭ニシテ和蘭本國ノ將來ヨリ判斷シテ蘭印トシテハ孰レノ國カ獨逸側ナリヤヲ決定セサルヲ得ス此ノ點日本側トハ見解ヲ異ニシ蘭印ノ立場ハ明瞭ナリト謂ヒ得ヘシ尤モ蘭印カ戰爭ニ捲込マレサルコトハ何人モ希望シ居ルハ事實ナルカ本國カ捲込マレタル以上ハ是ヲ再興スル爲ニ今次戰爭ハ英國ヲシテ勝タシメサルヘカラスはコソハ蘭印ニ取り最モ重大ナル問題ニシテ蘭印トシテハ友好關係ヲ欲スル國トハ是ヲ維持シタキ希望ヲ有スルコトハ謂フ迄モ無キ所ナルカ自由ナル本國和蘭ヲ再興スルコトコソ蘭印ノ最モ重要ナル問題タルコトヲ強調致度シト述ヘタルヲ以テ更ニ本使ヨリ從來米國ハ日支事變ニ關シ日本ノ眞意ヲ誤解シ事毎ニ日本ノ行動ヲ非難シ反對シ來リタルカ前回「ビルマ、ルート」閉鎖問題カ日英間ニ討議サレタル際米國ハ日英米三國協定唱導シ右ニ依リ支那事變モ日本ニ有利ニ解決セシムヘシト提案シ來レルモ既ニ日本ノ輿論ハ極メテ反米的トナリ斯カル提案ヲ受諾スルヲ許サス爲ニ内閣ノ更迭サヘ見タル例モアリ(以上ハ極秘ノ含ヲ以テ語り置キタリ)

蘭印<sup>(3)</sup>側ニ於テモ政治家的立場ヨリ右ノ如キ點ニ充分留意スルノ要アリト述ヘタル處先方ハ興味ヲ以テ傾聽シ居タルカ次テ蘭印ノ背後ニハ米國ノ指圖アルヤニ印象セラレ居ルカ如何ト尋ネタルニ「モ」ハ急ニ緊張セル様子ニテ語調ヲ強メ日本側ニ於テ斯ル印象ヲ受ケ居ルハ意外ナリ右ハ何ヲ根據トスルモノナリヤト反問シ來リタルヲ以テ太田ヨリ石油問題ニ關スル蘭側「ゼネラルステートメント」及兩石油會社ノ態度ヲ見ルニ斯ル感ヲ深クセサルヲ得ス右ハ獨リ日本側代表部ノ印象ノミナラス石油問題ニ關スル交渉ノ經緯カ公表セラルル場合日本國民ノ等シク受クル印象ニテ貴方ニ於テ然ラスト言ハルルモ斯ル印象ヲ除クコト困難ナリト述ヘタル處「モ」ハ特ニ眞面目ニ説明致度シト前置シタル後蘭印ノ政策ニ付立場ヲ異ニスル兩國カ共通ノ理解ニ到達スルハ困難事ナルヘキモ蘭印ノ立場ヲ明確ニセハ獨自ノ政策ヲ踏襲シ居ルノ一語ニ盡キルモノニテ蘭印ノ利益自體コソ政策ノ基調ニシテ米國ノ指圖ヲ受ケ居ルトハモツテノ外ナリ勿論經濟上有力ナル米國カ蘭印ト有無相通ノ關係ニアリ此ノ點兩國間ニ何等ノ衝突モナキ次第ナルカ然レハトテ蘭印ノ政策カ米國ニ依リ「デクテート」セラレ居ルト見ルハ

謬ナリ自分ノ言ハ日本側ニ於テモ充分信用セラレ度ク若シ日本側ニ於テ飽迄斯ル氣持ヲ有シ自分ノ言ヲ信セサルニ於テハ最早交渉ノ餘地ナシト極度ニ興奮シテ述ヘタリ次テ齋藤ヨリ蘭印側「ゼネラルステートメント」ノ正シキコトヲ實證スル爲石油會社事業ノ調査ニ於テ蘭側カ日本ト協力スル用意アリヤ否ヤヲ質シタルニ全面的ニ之ニ應スルハ困難ナリ立場ヲ代ヘテ日本ニ付テ見ルモ斯ル事柄ニ應諾シ得サルヘシ

殊ニ相互ニ信賴ノ念ナキトキ斯カル問題ヲ承諾シ得スト答ヘタルヲ以テ太田ヨリ蘭印ノ説明ニ依レハ日本ニ對シ石油生産増加分ノミヲ振當テ他國ヘノ供給ハ從來通リトシテ日本ニ對シ之ヲ振向ケス而モ日本トノ契約ハ半年乃至一年トスルカ如キハ吾人ノ承認シ得サル所ナルヲ明カニシ且資源獲得ニ關スル日本ト他ノ諸國トノ立場ヲ比較シ日本トシテハ蘭印ヨリ是非共供給ヲ仰ク必要ヲ力説シ現在蘭印ヨリ隣接國ニ供給シ居ル一部ヲ日本ニ振向クヘキコトノ妥當性ヲ縷々説明セル處「モ」ハ現在他國ニ供給シ居ルモノヲ假令高値ヲ以テスルモ日本ニ振向クルコトハ不可能ナリ斯クテハ友好國ニ對スル平等待遇ノ原則ニモ反スヘク日本ノ利益

ノ爲ニ他國トノ契約破棄ハ爲シ得サル所ニシテ又日本ハ現在僅カニ全體ノ八%ヲ買ヒ居ルニ過キス他ノ九二%ヲ買ヒ居ル諸國ハ蘭印ニ執リ大ナル收入源ニシテ之ヲ無視シ得ス日本カ現在直面シ居ル困難ハ充分了解シ得ル所ナルモ蘭印トシテハ他國カ自己ノ政策ノ結果困難ヲ經驗シ居ルカラト云ツテ自己ノ首ヲ絞メ得ルモノニアラス今更斯カル問題ヲ持出サレテモ蘭印トシテハ迷惑ニシテ之ヲ假ニ今ヨリ二三年前ニ申出テタランニハ日本ハ現在二百五〇萬噸テモ夫以上テモ買ヒ得タルナルヘシ蘭印トシテハ「コンスタント、バイヤー」ニ對シ義理カアルト言ハサルヲ得ス殊ニ製産量ノ増加ノ爲ニハ各種ノ施設ヲ必要トシ急速ニ實行不可能ナルコトヲ考慮セラレタシ尤モ日本ニ對スル供給量ヲ或程度迄増加スルコトハ可能ナリト述ヘタルニ付本使ヨリ米國カ蘭印ノ背後ニ在リトノ印象ヲ受ケタリトノ點ニ關スル蘭側ノ説明ハ了知セルニ付將來日本側ノ石油問題ニ關スル要求ハ是非共公平ニ取扱ヲ希望ス良好ナル經濟關係コソ平和ノ基調ナリト述ヘタル處「モ」ハ稍釋然タル面持ニテ蘭印側ノ言葉ヲ信用セサル態度ハ是非共改メラレタキ旨繰返シ述ヘタルヲ以テ本使ヨリモ三國協定ノ目的ハ日本カ世界戰爭

ニ引込マレサランカ爲又世界平和ヲ一日モ速ク回復シタキ  
精神ニ出テタルコトヲ理解セラレタシト附言シタルニ  
「モ」ハ他國ノ政治關係ニ立入ラサルコトコト蘭印<sup>ツ</sup>ノ方針  
ナリト答ヘ會談ヲ終リタリ

~~~~~

475 昭和15年10月18日 小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

日本との經濟關係調整は漸進的に行い政治的
背景は反映させないとの蘭側回答について

別電 昭和十五年十月十八日發小林日蘭会商代表よ

り松岡外務大臣宛会商第八〇号

日蘭印經濟關係調整の意義に関する小林代表
の説明

付記一 昭和十五年十月十六日發小林日蘭会商代表よ

り松岡外務大臣宛電報会商第七五号

日蘭両代表部が共同コミュニケ發出について

二 昭和十五年十月十六日發小林日蘭会商代表よ

り松岡外務大臣宛電報会商第七六号

右コミュニケ

會商第七九號

⁽¹⁾十五日會談ニ引續キ十六日午前行ハレタル本使「モ」トノ
會談要旨左ノ通り

本使ヨリ昨日述ヘタル所ヲ補足シ別電第八〇號ノ通り述ヘ
タル處「モ」ハ既ニ數次非公式會談ニ於テ明瞭ニセル如ク
蘭印政府ノ政策カ自國ノ利益第一主義ニテ他國ノ紛爭政治
關係ニ立入ラサル方針ナリ現ニ中立ヲ維持セル本國カ獨ノ
侵略ニ遭ヒタル今日軍事的協力ナキ中立政策カ愚劣ナリト
ハ思考スルモ極東ハ勿論如何ナル國トモ政治的關係ニ入ル
ハ蘭印ノ好マサル所ニテ現在ノ政治關係ノ變更モ容認シ得
ス蘭印ノ希望ハ平等的立場ニ立ツ經濟提携ナリ今之ヲ觀察
スルニ蘭印產品ノ九割ハ極東以外ノ國ト行ハレ大イナル收
入源トシテ無視シ得ス斯ル諸國ニモ平等待遇ヲ與ヘテ今日
迄成功セリ自然的又理論的ニ蘭印カ東亞ノ諸國ト密接ナル
關係アルハ事實ナルカ右ノ如キ經濟的事實ヲモ無視シ得ス
自分トシテモ日本トノ經濟關係増進ニ努力スル所ナルカ其
ノ際次ノ三點ヲ忘ルル能ハス(一)蘭印住民ノ利益(二)他ノ友好

バタビア 10月18日後發
本省 10月18日夜着

國トノ關係(三)敵タル獨逸ヲ利セサルコト斯ル方針カ今次戰爭ヲ東亞ニ波及セシムル原因タリトハ考ヘラレサル所ニテ各國夫々獨自ノ立場ヲ有スルハ當然ニテ自分モ日本カ蘭印ト異リタル見解ヲ有スルト思ヒ居ルモ經濟的分野ニ於ケル相互理解コソ斯ル相違ヲ除去スル方法ナルカ之モ亦政治的壓力ヲ棄テ且將來ヲ見透シテ行ハルルヲ要スト述ヘタルヲ以テ本使ヨリ蘭印ト諸國トノ經濟關係ヲ急ニ日本ニ切り換ユルハ不可能ナルヘキモ日本向ケ石油輸出量ヲ増加スルカ如キ方法ヲ以テ漸次調整シ得ルニアラスヤト述ヘタルニ

「モ」ハ原則トシテ夫レニ相違無キモ必ス徐々ニ行ハルルヲ要シ是カ爲専門家ヲシテ詳細研究セシメ居ル次第ナルカ日本ト蘭印ト一層大ナル經濟關係ニ入ルハ可能ナリト信ス私見ヲ以テスレハ蘭印ト諸國トノ經濟關係ハ漸次東洋中心ニ移行シツツアル現狀ニテ斯ル一般の傾向ヲ無視スルニハアラス左レト蘭印トシテハ遠キ將來ヲ考慮ノ要アリ一例ヲ舉クレハ一九三七年蘭印ハ日本向砂糖ノ増加ニ努力セルモ今日殆ト輸出ヲ見サルハ遺憾ニシテ誤算セリトノ觀深ク將來此ノ轍ヲ踏マサル様注意シ居ルモノナリ石油問題モ前述ノ原則ニ反セサル範圍ニテ日本側要求ニ應スル様努力セル

積リナルカ右ハ政治的背景ヲ抜キト致度ク尙鐵鑛ニ付テモ日本ハ蘭印ノ好市場ト思考ス品質ハ優良ニアラサルモ研究ノ價值アルヘシト附言セルニ付右ハ蘭印側ト共同ニテ現地ニテ精鍊ノ上輸入スル方經濟的ナリト答ヘ置キタリ

ニ右會談後兩代表部ハ將來ノ議題及議事進行ニ付協議セルカ其ノ際「モ」ハ日本側提案全部ノ提示アリタク然ラスシテ問題ヲ一ツ宛取上クル如キ方法ニテハ非常ナル時日ヲ要スヘク最モ避ケタキ所ナリト述ヘタルニ對シ我方ヨリ石油問題モ近ク大體ノ見透シカ付クヘキニ付其ノ上提案全部ヲ示スコトト致度ク會商ヲ早く切上ケタキハ我方ニテモ最モ希望スル所ナリト答ヘタル處先方モ右ヲ諒承セリ

尙今會商ニ付別電第七六號ノ通り共同「コムミュニケ」ヲ發表セリ

右ニ引續キ向井代表以下専門委員ハ長時間ニ亘リ「ホレマシ」鑛山局長ヨリ蘭印石油事情ヲ聽取セリ

(別電)

バタビア 10月18日後発

本省 10月18日夜着

會商第八〇號

一昨⁽⁴⁾日色々話ヲシタカ本件ハ各種ノ問題ヲ各方面ヨリ觀察シテ説明セサレハ意ヲ盡シ能ハサル程ノ複雑性ヲ含ム問題ナリ

然ルニ昨日ノ説明ハ充分意ヲ盡ササリシト思フ要スルニ自分ノ言ハントスル點ハ日蘭印間ノ友好緊密ナル關係ノ維持増進ニ努ムルコトカ如何ニ世界大戰ノ回避及平和促進ニ重大ナル役割ヲ有スルカ注意ヲ喚起シ此際日蘭印世界市場カ最モ重大ナル危険ニ逢着シ居ルニ鑑ミ相互ニ大政治家の見地ニ立チ善處シタキ希望切ナルモノアリ自分ハ諸君ノ氣持ハ充分ニ理解シ居リ昨日ノ自分ノ説明ハ不充分ナリト雖モ貴方ノ氣持ヲ無視セントスルカ如キ意嚮ハ全然ナシ若シ國際情勢カ變化シテ世界戰爭トナツタト假定スル其時ハ貴國ト日本ト如何ナ約束カアツテモ夫ハ貴國ノ思フ通りニ措置出來ルノテアルカラ今日我々ハ我々ノ希望スル積極的ノ取引カ出來テキテモ貴國ニハ利益コソアレ何等ノ損モナイト思フ只日本ト貴國トノ關係ヲ密接ニシ經濟通商ヲ旺ニスル結果日本ノ立場カ良クナルコトハ英米ノ好ム所テナイカラ日本ヲ苦シメテ遣レト謂フ英米ノ希望モアルカモ知レナイ

カ夫ハ昨日御話シタ日英米話合ノ「エビソード」モアル様ナ譯テ此際一途ニ思詰メル必要ハ無イノテ寧ロ伸縮性ノアル利益コソアレ害ノ無イ態度ヲ採ルコトカ貴國ノ利益タト信シテ居ルカラ私ハ世界戰爭ニナラナイ様ニ日本ト貴國ト固イ握手ヲシテ御互ニ世界戰爭ヲ避ケタイト努力シナケレハナラナイト思フ

(付記一)

バタビア 10月16日後発

本 省 10月17日前着

會商第七五號

「スラビンタナ」ニ於テ蘭側代表部ト會談ノ結果別電第七六號ノ通り共同「コンミニユニケ」ヲ今十六日夕發表スルコトトセリ委細追電ス

(付記二)

バタビア 10月16日後発

本 省 10月17日前着

會商第七六號

Press communique

Japanese and Netherland's Delegations came together at Salabintanah near Soekaboemi from 14th till 16th October 1940 under chairmanship of Their Excellencies Kobayashi and Van Mook. During several meetings and personal talks general relations between Japan and Netherland's Indies were discussed. In these discussions due attention was given to the effect of recent pact between Japan, Germany and Italy on relations with Netherland's Indies. Japanese Delegation in this respect officially expressed their opinion as follows: "in spite of Tripartite Treaty recently concluded among Japan, Germany and Italy, strong desire of Japan for maintenance and promotion of friendly relations between Japan and Netherland's Indies is not affected in the least. All what is wished for by Japan is co-existence and co-prosperity with neighbouring countries." Netherland's Delegation could appreciate this point of view. Amongst other points which came into discussion most prominent item was oil problem.

Elaborate explanations of oil situation in Netherland's Indies were given by Netherland's Delegation and Chief of Netherland's Indian Mining Bureau who was also present. Delegations are to continue negotiations in Batavia in the understanding that complete scope of subjects will come in discussion in the near future. Delegations were pleased that negotiations were conducted in most friendly atmosphere.



476 昭和15年10月18日

小林日蘭会商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭会商両代表部が発出した共同コミュニケ の蘭印紙における反響について

バタビア 10月18日後発

本省 10月18日夜着

會商第八一號

往電第七二號^(七五)ニ關シ

共同「コミュニケ」ハ本十七日ノ蘭紙朝刊ニ重要「ニュース」トシテ一齊ニ報道セラレタル處右ニ關聯シ「ジャバ

ボーデ」ハ「日本ト我等」ナル社説ヲ掲ケ「共同「コムミ
 ユニケ」中ノ日本代表部ノ聲明ハ日本政府ノ諒解ノモノト
 見做サレタルモノナルヘキカ右カ蘭印ニ關スル限り日本カ
 三國同盟ヲ離レタルコトヲ意味ス日本トノ眞ノ友好關係ハ
 日本カ吾人ノ敵國ト有スル密接ナル關係ヲ放棄シタル後二
 アラサレハ回復シ得サルモノナルモ日本カ蘭印トノ友好關
 係竝ニ共同ノ利益ヲ増進スルヲ欲シ蘭印ニ關スル指導權又
 ハ新秩序ノ野心ヲ懷カサル限り兩國間ノ經濟關係ノ緊密化
 ヲ妨クル謂ハレナシ日本人間ニハ三國同盟カ百害アツテ一
 利ナキコトヲ認識スル者漸ク増加シツツアルモノノ如キ處
 日本カ之ニ依リ吾人ニ與フル衝擊ヲ癒シ得ルカ否カハ日蘭
 會商ニ於ケル日本側今後ノ出方ニ依ルヘキカ日本カ反「ヒ
 ットラ」戰線ニ參加スルニ至ル迄ハ和蘭臣民ハ日本國及
 其ノ國民ニ對シ事務的ナル禮儀正シキ態度以上ノモノヲ取
 ルヲ得ス祭日ニハ日章旗ニ伴ヒ獨逸國旗ノ翻ヘル日本ヘノ
 觀光旅行ノ如キハ愛國心ニ富ム和蘭人ノ到底爲シ得サル所
 ナルヘシ」ト論シ居レリ

477

昭和15年10月19日

小林日蘭会商代表より
 松岡外務大臣宛(電報)

蘭印石油買付け交渉の進捗状況について

バタビヤ 10月19日後発

本省 10月19日夜着

會商第八三號(館長符號扱)

石油ハ所要總額ノ内東京ニテ約束分ノ外當地交渉七十三萬
 噸内航空揮發油五萬噸自動車揮發油十萬噸ノ賣買略成立シ
 タルモ此ノ上ノ交渉ハ目下向井ニ於テ準備中ナリ尙石油
 「コンセツション」モ「ボルネオ」「セレベス」「ニューギ
 ニア」等各地ニ於テ六十萬「ヘクタール」ノ試掘權ヲ蘭印
 政府ヨリ進ンテ開放セラレ當方ハ更ニ其ノ他ノ區域ヲ追
 加開放セラレタキ旨申出ツ計畫ナリ
 右ノ事情ニ付貴電ニ從ヒ日蘭丸ニテ歸國スルコトニ決定セ
 リ

近衛總理閣下ノ御了承ヲ御願申上マス

478

昭和15年10月21日

小林代表帰朝に関する情報部長談話

小林特派使節帰朝に関する情報部長談

(昭和一五、一〇、二二 午後五時)

日蘭印交渉の爲特派された小林使節は今般紀元二千六百年式典に参列すると共に傍ら政府に報告協議の必要もあるのて一時帰朝することとなつた、バタヴィアに於ける交渉は順調に進行中であつて、小林使節不在中は齋藤總領事及太田首席隨員と蘭印側代表との間に引續き行はることは勿論である。

479

昭和15年10月21日

小林日蘭會商代表より
松岡外務大臣宛(電報)

小林代表帰朝に際しての蘭側との会談について

會商第八七號

本二十一日正午本使ハ總督ヲ往訪別レノ挨拶ヲ述ヘ商工省豫算ノ都合ニテ至急歸朝スルコトナレルモ聽テ一日モ早ク蘭印ニ歸來スルコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタル後本使ノ歸

バタビア 10月21日後発
本省 10月22日前着

480

昭和15年10月22日

在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

日本側代表部は石油問題の交渉状況に満足していない旨蘭側へ表明について

バタビア 10月22日前発
本省 10月22日後着

朝後モ會商ハ續行サルヘキニ付可然御配慮ヲ得度シト告ケタルニ總督ハ「今日迄モ會商ノ經緯ニ對シ注意ヲ拂ヒ居リ石油問題ニ付一歩進展ヲ見タルコトヲ喜ヒ居ル次第ナルカ今後トモ會商ノ推移ニハ深甚ナル注意ヲ拂フヘク成ルヘク速ニ合理的且満足ナル妥結ニ到達方促進ニ努力スヘシ」ト答ヘタリ次テ本使ハ蘭側代表ヲ訪問セルカ其ノ際今後ノ會商ニ對シ協力ヲ求メ向井代表ノ要求ニ對シテハ會社側力其ノ要求ヲ容ルル様好意的斡旋ヲ依頼セル處先方モ本使ノ歸朝トハ關係ナク會商力續行サレ得ヘキモノナリト思考スル旨ヲ述ヘ尙和蘭政府側ハ從來屢々表明セル如ク必要ニ應シ實行可能ノ限度内ニ於テ民間會社トノ間ヲ斡旋スル用意アルモノナリト答ヘ居タリ

會商第八八號

十九日夜齋藤ヲシテ「ホーストラーテイン」ヲ招致シ本使
 歸朝方電命ニ接シタルコトヲ述ヘ歸朝挨拶其ノ他ニ付打合
 ヲ爲サシメタルニ「ホ」ハ日本新聞記者側ハ石油問題圓滿
 解決セリトノ電報ヲ打チ居ルカ日本代表側ニ於テハ蘭印側
 提案ニ満足セラルルモノナリヤト述ヘタルニ付齋藤ハ會商
 往電第二四號會談ノ際貴下ハ小林使節カ石油問題解決次第
 歸朝スルニアラスヤトノ御疑ヒヲ述ヘラレタルモ今次小林
 使節ノ歸朝ハ實際偶然ノ一致ニシテ本官等モ何等承知スル
 所無ク從テ石油問題トハ何等關係無ク一二政府ノ都合ニ依
 ルモノナリ我方カ石油問題ニ付毫末モ満足シ居ラサルハ屢
 次述ヘ置キタルカ如ク又近ク提出スヘキ我方覺書ニ依リ御
 承知相成ルヘク蘭印側石油會社ノ「オツファー」ノ量及質
 ニ於テ極メテ不満足ナルハ勿論ニシテ石油探掘權ハ貴方ヨ
 リ自發的ニ提供アリタルハ是ヲ多トスル所ナルモ最モ優等
 ナル「スマトラ」及「ジャバ」ヲ除外シ製油所無キ地方ニ
 於テモ廣汎ナル「ヒンターランド」ヲ英米ノミニ與ヘラレ
 タルハ我方ノ承認シ得サル所ナリト述ヘタルニ對シ「ホ」
 ハ實ハ「カリオラン」油田附近ノ地方ヲ日本ニ提供シタル

ニ對シB、P、M技術者側ニ於テ蘭印政府ヲ非難シ居リ又
 一般輿論モ蘭印側ヨリノミ與ヘ日本側ヨリ何等取得スルモ
 ノ無キヲ指摘シ政府ヲ非難シ居ル爲最近「ファンモーク」
 ニ於テ各紙主筆ヲ招致懇談ヲ遂ケタル次第モアリ賣油増加
 方竝ニ次年度ヨリノ生産及賣油増加方ハ考慮スヘキモ要求
 ハ一度ニ多量爲ササル様希望スル旨述ヘ居タル趣ナリ

編注 小林日蘭會商代表は十月二十一日の夜行列車でスラバ

ヤに向かったところ、本電報は小林代表出發後に打電
 されたものと思われる。

~~~~~

481 昭和15年10月22日 在バタビア齋藤總領事より  
 松岡外務大臣宛(電報)

蘭側代表部提出の石油事情に関する説明書に  
 対しわが方の回答手交について

別電 昭和十五年十月二十二日發在バタビア齋藤總

領事より松岡外務大臣宛會商第九一号

右わが方回答

バタビア 10月22日後発  
本省 10月22日夜着

會商第九〇號

七日附蘭側「ノート」ニ對スル我方回答別電ノ通り二十一日手交セリ

(別電)

バタビア 10月22日後発  
本省 10月22日夜着

會商第九一號

Japanese delegation has honour to express their great appreciation for an elaborate explanation of petroleum situation contained in note of October 7th of Netherland's delegation.

Japanese delegation wishes to call attention of Netherland's delegation to fact that after negotiations between Mr. Mukai and two petroleum companies, proposals of these companies concerning oil supply to Japan have shown very wide difference in quantity as well

as in quality from those of Mr. Mukai and it is to be emphasized that proposed quantity of supply of aviation gasoline and aviation crude to Japan to which Japan attaches great importance is as good as nil.

Netherland's delegation, however, is well aware of the Japanese interest in petroleum problems and Japanese delegation would be much obliged if Netherland's delegation are good enough to do their utmost in the spirit of mutual welfare to comply with Japanese proposals by any means like shifting of trade route etc.

Japanese delegation have pleasure to add that Japan has also a very big interest in exploitation of oil wells and that Netherland's policies on allocation spheres of interests for existing companies are hardly satisfactory for Japan.

Japanese delegation are very much desirous to acquire rights of access to territories now in exploration or exploitation as well as to Government reserves.

Mr. Mukai, however, is ready to enter at once into negotiations with authorities concerned about Government

reserve areas in above mentioned note of Netherland's delegation.

482

昭和15年10月23日

在バタビア齋藤総領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

米貨經由を廃し円対ギルダの直接決済考究

方意見具申

バタビア 10月23日後発

本 省 10月24日前着

會商第九四號

米國政府ハ我方カ蘭印物產買付決済ノ爲紐育向米貨賣出ヲ爲サントスルニ對シ妨害ヲ加ヘ居ル趣ナル處當地正金ニ於テハ金詰リヲ來ササル様目下臨時手段トシテ圓擔保ニ依ル盾借入レ又ハ圓對盾乘換ニ依リ急場ヲ切拔ケント努力シ居ルモノナルカ若シ米國カ金融上ノ壓迫ヲ強化スル場合ハ蘭印物產ノ買付ハ事實上不可能トナルヘキニ付之カ打開策トシテハ從來ノ米貨經由ヲ廢止シ圓對盾ノ直接決済ノ方法ニ依ル外無シト思考セラルルニ付テハ委細ハ當地正金ヨリノ報告ニ基キ大藏省トモ御協議ノ上我方對策至急樹立方御配

慮ヲ請フ

483

昭和15年10月24日

在バタビア齋藤総領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

小林代表の後任者選定につき意見具申

バタビア 10月24日後発

本 省 10月24日前着

會商第九五號(極秘、館長符號扱)

大橋次官へ齋藤、太田ヨリ

日蘭會商ハ石油問題ニ付テスラ未タ見ルヘキ進捗ヲ爲シ居ラス目下會商ノ前途ニ對スル見込附ケ難キ狀態ナルハ屢次往電ニ依リ御承知ノ通りナリ然ルニ今回小林使節ノ歸朝ヲ見ルニ至レルカ對蘭印考慮ヨリ此ノ際至急後任ヲ選定シ小林使節歸朝ト同時ニ之ヲ派遣スルコト極メテ重要ナリ後任選定上特ニ注意ヲ要スヘキ點ハ政治的識見ヲ有スルコト英語ヲ話シ得ルコト多少西洋ノ儀禮ニ心得アルコトナリ小林大臣カ使節トシテ内外ニ對シ完全ニ落第セル主因ハ右諸點ナリト思考セラルルニ付後任トシテ是非芳澤謙吉氏ノ出馬ヲ得度キコトヲ希望シ居レリ右何等御參考迄

尙小林使節カ蘭印ヲ去ルニ當リ新聞記者ニ與ヘタル談話ハ  
恰モ今ヤ石油問題カ希望アル新段階ニ入レルカ如キ印象ヲ  
與ヘ我トシテハ甚タ迷惑至極ニテ今後ノ石油問題ニ關スル  
交渉ハ勿論一般問題ノ交渉ニモ支障鮮カラスト認メラルル  
ニ付同使節ノ歸朝談發表ハ特ニ蘭印ニ對スル反響ヲ考慮シ  
交渉内容ニ付自己宣傳的樂觀論ヲ爲サシメサル様御配慮ヲ  
請フ

追テ小林使節ノ苦キ例ニ鑑ミ後任使節カ個人的顧問等ヲ隨  
伴セサル様希望シ居レリ

484 昭和15年10月25日 閣議決定

「對蘭印經濟發展ノ爲ノ施策」

對蘭印經濟發展ノ爲ノ施策

一五、一〇、二五 閣議決定

世界新秩序ノ進展ニ伴フ經濟圈發生ノ必然性竝ニ日獨伊三  
國條約ニ基ク皇國ノ蘭印ニ於ケル優位ヲ確認シ共存共榮ノ  
大局的立場ニ基キ速ニ蘭印ト經濟的緊密化ヲ圖リ以テ其豐  
富ナル資源ヲ開發利用シ皇國ヲ中心トスル大東亞經濟圈ノ

一環タル實ヲ舉ケシメンコトヲ期シ、差當リ左記要領ニヨ  
リ施策スルモノトス

一、蘭印經濟ヲシテ歐米經濟「ブロック」ニ依存セル狀態ヲ  
清算セシメ大東亞經濟ノ一員タル立場ヲ取ラシムルコト  
二、現在邦人ノ經濟的活動ヲ阻害スル諸種ノ制限の措置ヲ撤  
廢又ハ緩和シ、邦人ノ經濟的活動ヲ他ニ優先シテ自由活  
達<sup>(海カ)</sup>ナラシムル如ク努ムルコト

三、皇國ノ必要トスル重要物資ヲ可及の二大東亞圈內ニテ確  
保シ以テ英米ヨリ資源の獨立ヲ圖ルタメ蘭印ニ對シ共同  
開發ヲ提議スルコト

要スレバ適當ナル島嶼地域ノ租借又ハ買收ヲナスコト  
四、皇國ノ必要トスル重要物資ノ供給確保ニ關シテハ先ニ蘭  
印側ノ保障ヲ取り付ケタルモ更ニ此等物資ノ種類及數量  
ノ増加ニツキ蘭印ノ同意ヲ求ムルコト

尙進ミテハ重要物資特ニ蘭印ノ世界的獨占商品タル錫、  
「ゴム」、規那等ヲ皇國ノ指導ニヨル貿易管理ノ實現ニ努  
ムルコト

五、共存共榮ノ實ヲ舉ケルタメ可及の土着民ノ收益トナル蘭  
印產農產物ノ買付ヲナシ土着民ノ購買力ヲ培養ス

コレガ爲蘭印側ニ於テハ可及的我方國ノ要請ニ應スル如ク農業ヲ誘導スルコト

六、皇國製品ノ對蘭印輸出増進ニツキ特ニ協力提携ヲ求ムルコト

七、將來他ノ大東亞諸地域ヲ併セ皇國ヲ中心トスル大金融圈ノ設定ヲ目標トシ、蘭印トノ新金融關係ノ設定ニ付テモ之カ一環タラシムル如ク努ムルモノトス、但シ蘭印自体ハ之ヲ圓地域トナスコトヲ目的トセサルコト

蘭印ニ於ケル爲替管理ヲ皇國ノ指導下ニ置ク如ク努ムルコト

差當リ蘭印ニ於ケル爲替管理ノ運用ヲ邦人ニ對シ寛大ナラシムルト共ニ蘭印ノ銀行等ヲシテ本邦ニ對シ「クレヂット」ノ設定其ノ他極力金融上ノ便宜ヲ供與セシムルコト

八、交通及通信ニ關シテハ大東亞全局ノ指導的地位ヲ確保スル一環トシテ左ノ特殊權益ノ設定ニ努ムルコト

(イ)沿岸貿易權、不開港入港權及港灣設備ノ經營及利用權  
(ロ)海底電線ノ陸揚及運用權、國內通信事業經營ニ對スル

參加權ソノ他ノ通信權

(ハ)定期航空路ノ新設及航空保安施設ノ設置權

九、水産業ニ關シテハ南方ニ確固タル地歩ヲ建設スルタメ漁船ノ増加、漁獲物輸入港制限ノ撤廢、漁業根據地ノ設置、其ノ他水産業ノ經營ニ伴フ權益ノ獲得ニ努ムルコト

一〇、蘭印ニ於ケル第三國權益ニ對シテハ新規ノ設定ヲ許ルス又既存ノモノニシテ皇國ノ發展ニ障害トナルカ如キモノハ之ヲ驅逐スルガ如ク努メシムルコト

二、蘭印ノ對内外經濟政策ノ樹立及實施ニ參與シ皇國トノ經濟的提携ヲ指導強化スル爲蘭印側ニ邦人ヲ加ヘタル經濟建設委員會、其他適當ナル機關ヲ設ケシムルコト

貿易、金融、稅制、關稅、第三國トノ經濟協定、企業、交通、通信等ニ關シテハ右機關ヘノ諮問ヲ要スルモノトス

差當リ、在蘭印邦人輸入商ヲ經濟省ノ諮問委員會ニ參加セシムルコト

三、蘭印ニ關スル新聞其他刊行物ノ對日惡論調ニ對シ徹底のナル取締ヲ要求スルト共ニ邦人ノ新聞發行ニ對スル自由ヲ確保セシムルコト

三、在住華僑ノ援蔣抗日態度ニ對シテハ蘭印當局ノ嚴重ナ

ル取締ヲ要求スルト共ニ一方ソノ經濟的地位ニ鑑ミ大局の立場ヨリ華僑ノ組織及資力ノ利用ヲ策スルコト

四、皇國ノ經濟的發展ヲ期スル爲、土着有力者ヲ皇國ニ招致シ又ハ皇國ノ眞姿ヲ宣傳正解セシムル等諸般ノ處置ヲ講スルコト

五、經濟施策ハ大東亞共榮圈確立ノ大局の立場ニ立脚スルコトトシ皇國ノ利益伸長ト土民ト調和スル如ク努ムルコト

485

昭和15年10月25日

在バタビア齋藤總領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

石油問題の交渉状況に関する英米報道振りに  
つきホーフストラーテンと意見交換について

バタビア 10月25日午後

本省 10月25日夜着

會商第一〇一號

一、<sup>(1)</sup>昨二十四日夜「ホ」本官ヲ來訪最近石油問題ニ關シ日本側新聞ハ満足ナル解決ニ到達シタリトノ樂觀論ヲ唱ヘ又東京外務省ヨリノ情報ト覺シキモノニ基キ紐育ニ於テハ

日本ハ蘭印ニ於テ石油所要量ノ四十%ヲ獲得セリ等ト報道スルノミナラス某米紙ノ如キハ蘭印ヲ目シテ traitorナリト稱シ又英國議會ニ於テモ問題ヲ釀シ居リ蘭印側トシテハ貴方側「ニユース」ノ爲困難ナル立場ニ立至リ甚タ迷惑シ居レリト述ヘタルニ付本官ハ貴下モ御承知ノ通り本月七日附ノ貴方説明並ニ八日ノ石油會社側提案力極メテ不満足ナルコトハ貴方ニ明瞭ニ申入レ置キタル通りニシテ事態ハ其ノ後毫モ變化シ居ラス又「スラビンタナ」會談ニ於テモ將又其ノ後ニ於テモ屢次我方ヨリ此ノ點強調シ置キタル筈ナリ抑石油問題ニ關スル發表ハ當方ニ於テ拒否シ續ケタル所ニシテ過日ノ「ジヨイントコンミニュニケ」ノ如キモ貴方ニ於テ内政事情ニ依リ希望セラレ然モ資料迄モ發表シタシト主張セラルルヲ我方ニ於テ讓歩ノ結果アノ程度ニ止メタルニアラスヤ況ンヤ我方新聞ニ對シ我代表部ヨリ石油問題ニ満足乃至ハ樂觀ノ意ヲ述ヘタルコト絕對ニナク寧ろ甚タ不満足ナルカ交渉ハ更ニ繼續セラレツツアル旨述ヘ置キタル程ニシテ日本新聞側ヨリ貴下ノ稱セラルル如キ記事ノ出ツル筈ナキハ無論ナルト共ニ本邦ニ於テモ會議ノ内容及進捗狀況等ニ關ス

ル記事ハ差止メトナリ居リ又外務省「スポークスマン」ノ談話モ「アネタ」通信ニアル如ク會議ハ友好裡ニ繼續セラレツツアルヲ述ヘタルノミニシテ何等樂觀論ヲ開陳セルコトヲ記憶セスト述ヘタルニ「ホ」ハ小林使節カ述ヘラレタルモノニアラスヤト尋ネタルニ付斯ク思考セサル旨答ヘ置キタリ（小林使節カ發表ハ總テ本官及太田ヲ通シテ爲ストノ趣旨ヲ納得シ居ラルルニ拘ラス出發前我方新聞ニ樂觀論ヲ述ヘラレタル趣記者側ヨリ知り得タリ）

更ニ本官ハ英米ニ於テ問題トナリ居ルトセハ右ハ英米カ石油會社其ノ他ヲ通シ交渉内容ヲ探知シタルモノナルヘク此ノ事ハ今次石油交渉ニ對スル英米側ノ考ヘ方及右「ニュース」ニ關スル出所竝ニ魂膽カ奈邊ニアルヤ想像スルニ難カラス又嘗テ貴下モ米國新聞カ貴下ノ名ヲ盗用シ無根ノ事實ヲ報道シ迷惑ヲ掛ケ居レリト述ヘラレタルコトアリシニアラスヤ尙又米國自身航空用「ベンダー」以外ノ石油ハ日本ニ賣リツツアルニ拘ラス蘭印ヲ「traitor」云々トハ笑止ノ至リナリト應酬セル處「ホ」ハ當初ノ意氣込ハ何處ヘヤラ悄然トシテ納得シ居タリ

三、其ノ後ノ倫敦路透通信ニ依レハ英國議會ニ於テ「バトラ」次官ハ日蘭印交渉ノ經過ニ關シテハ英米兩國政府ハ常ニ報告ヲ受ケ居ル旨述ヘ居ル處「ホ」ハ先廻リシテ右問題ヲ有耶無耶ニ葬ランカ爲逆襲セント試ミテ來訪セルモノト思考セラルル處當方ニ於テハ右「バトラ」ノ演說ヲ引用シテ蘭印政府ヲ追及セント心組ミ居レリ



486

昭和15年10月26日

在バタビア齋藤總領事より  
松岡外務大臣宛（電報）

航空用ガソリンの対日供給契約締結の余地はないなど蘭側の誠意なき回答振りについて

バタビア 10月26日夜発

本 省 10月26日夜着

會商第一〇二號（極秘）

一、齋藤及太田本二十五日「ホ」及「モ」ヲ往訪シ先ツ小林使節出發ニ際シ「モ」ニ對スル傳言トシテ蘭印政府ノ厚遇ヲ謝シ且石油問題ニ航空用「ガソリン」及原油ニ付小林使節本邦到着迄ニ圓滿解決方希望シ居レル旨ヲ述ヘタリ

右ハ會商往電第九五號小林使節ノ不用意ナル新聞記者會見談ノ反響ヲ俱レ當方ニ於テ適宜申入タル次第ナリ

次テ向井ノ要求ニ對シ成ルヘク速ニ好意的回答ヲ寄セラレタシト述ヘタル處「モ」ハ本日兩會社ヨリ回答アル筈ナルカ航空用「ガソリン」ノ配給先ハ既ニ決定シ居リ變更ヲ爲シ得ス精製設備擴張ノ資材入手困難ナル現狀ナルモ擴張ストスルモ高價ナル設備ヲ要スル關係上擴張ニ先ンシテ販賣先ヲ決定セサルヘカラス擴張計畫ハ事實樹テラレ居ルモ右實施ノ際ニ於ケル販賣先モ既ニ決定シ居レリ從テ航空用「ガソリン」ヲ日本ニ供給方契約締結ノ餘地ナク政府ニ於テ兩會社ヲ此ノ上說得スルモ無駄ナリ啻剩餘アル場合ニ限り「スポツト、セイル」ハ將來或ハ可能ナルヤモ知レスト語リ居リ誠意ノ片鱗タニ認ムルヲ得ス此ノ上交渉ノ餘地ナシト強硬ナル態度ヲ示シタリ

二、次テ會商往電第一〇一號末段「バトラー」次官ノ議會演說ニ關スル「アネタニユース」ヲ突付ケタルニ「モ」ハ前記往電「ホ」ノ述ヘタルカ如キ論ヲ繰返シ蘭印政府トシテハ右ニ付意見ヲ發表スルコトヲ拒絕スト述ヘ更ニ日本側ニ於テモ獨逸政府ニ對シ日蘭印會商ニ付云々ト脫線

シ來レルニ付

我方ヨリ交々之ニ反駁ヲ加ヘタル上本問題ハ貴方ニ於テハ日蘭印會商其ノ物トハ何等關係無シト稱セラルルモ我方ハ最モ大ナル關係アリト思考スルモノナリ從テ我方ニ對スル好意ヨリシテ蘭印政府ヨリ何等「ステートメント」ヲ發表セラルル用意アリヤト尋ネタルニ對シ「モ」ハ之ヲ峻拒シ和蘭ハ他ノ何レノ國ヨリモ指圖ヲ受クルモノニアラス獨自ノ立場ヨリ會商ヲ行フモノナリトテ顧ミテ他ヲ言フカ如キ態度ヲ執リ反面明カニ英米ニ通牒シ居レリトノ「アンミスチカブル」ナル印象ヲ得タリ

三、今次會商ニ際シ和蘭政府獨自ノ立場ヨリスル交渉ヲ期待スルノ困難ナルヘキハ夙ニ豫測セラレ居タル所ナルモ以上ノ如キ先方ノ態度ニ顧ミ今ヤ右豫測ハ現實ニ證明セラレタル次第ナルカ他方往電第九八四號ノ事實及當領防備狀況竝ニ會テ「ホ」カ一般問題カ解決ヲ見サル限り石油問題ニ對シ「ギヤランテー」ヲ與ヘ得サル旨述ヘタルコト等諸般ノ狀況ヲ綜合シ蘭印政府ハ完全ニ英米陣營ニ投入シ居リ會商ニ對シ何等眞劍味ヲ有セス誤魔化シ的引延シヲ爲シ時ノ至ルヲ待ツノ態度ヲ採リツツアルハ最早ヤ



今日ニ於テ明瞭トナレリ

四、尙會商ニ對スル我方今後ノ方針ニ付テハ當方ニ於テモ研究中ナリ

~~~~~

487

昭和15年10月28日

在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

蘭側代表部の対日態度が漸次悪化傾向にある

原因について

別電

昭和十五年十月二十九日發在バタビア齋藤總

領事より松岡外務大臣宛会商第一〇九号

右悪化の一因と目される小林代表の發言

バタビア 10月28日後發

本省 10月29日前着

會商第一〇八號

日獨伊三國協定成立後蘭印側態度漸次悪化ノ傾向アリタル
カ最近數日間ニ更ニ悪化セリト認メラル右ニ付テハ左記諸
原因アリト思考ス

一、小林使節ノ「スラビンタナ」會談

本件ハ一應往電第七八號ヲ以テ報告シタルモ其ノ實相別

電第一〇九號ノ通りナリ本會談ハ苟モ國務大臣ニ依リ爲

サレタルモノニシテ蘭印側ニ大ナル衝動ヲ與ヘ之ニ説明

ヲ與ヘントスルモ先方ハ耳ヲ藉ササル態度ニ出テ居レリ

二、小林使節及其ノ身邊ノ者力出發ノ際及其ノ以前二邦人新

聞記者等ニ與ヘタル石油交渉滿足論カ蘭印側ニ與ヘタル

日本與シ易シトノ印象モ相當ニ看取セラル

三、錫買付交渉(往電第九八五號)同盟「ニユース」受信禁止

問題(往電第九八九號)及蘭印側ノ急變セル冷淡ナル態度

(往電第一〇二號)等ニ付蘭印側ノ執レル對日態度ハ日本

ヲ敵性ト看做スモノニシテ其ノ背後ニ英米ノ指圖アルコ

ト最早明瞭ト言フヘク將來モ斯ル態度ハ益々強化シ來ル

モノト豫想セラル

(別電)

バタビア 10月29日後發

本省 10月30日前着

會商第一〇九號(館長符號扱)

往電第一〇八號ニ關シ

往電第七八號「スラビンタナ」ニ於ケル小林使節會談真相

左ノ通り

會談二、三日前天田ヨリ使節ニ對シ石油問題ニ關シ蘭印側ニ於テモ相當困難ナル模様ナルモ蘭印側ニ於テ積極的二日本ト提携スル態度ヲ示シ日本ノ要求ヲ大體満足セシメ日本ノ友好的感情ヲ保チ置クコトハ蘭印側ニ於テモ將來親日又ハ反日何レノ決定的態度ヲ採ル場合ニ於テモ利益コソアレ損失ナキ次第ニテモアリ此ノ際小事ニ拘泥セス會商ヲ順調ニ進捗セシメ以テ蘭印ノ利益ヲ擁護スルニ若クハ無シトノ趣旨ヲ會談ニ述ヘルコトニ豫メ打合ヲ了シ居タリ然ルニ會談中蘭側カ其ノ最高目標カ獨逸ヲ屈服セシメ自由ナル和蘭ヲ再建スルコトニアル旨強調シ居タル際使節ハ何等前置キ無ク開口「日本ハ三國協定ノ有無ニ拘ラス萬一獨逸側ニ敗色濃厚ナルトキハ之カ援助ニ赴カサルヘカラス」ト述ヘ蘭印側代表ニ大ナル衝動ヲ與ヘ往電第七八號ノ趣旨ニテ語ヲ繼キタルモ蘭側ハ一切之ニ耳ヲ藉ササル態度ヲ執リ使節モ事ノ以外ニ驚キ且自己ノ失敗ヲ認ムルニ至レリ

(意)

使節ノ右言說ヲ爲サントスルヤ傍ニ居タル齋藤ヨリ中止方勸告シタルモ時既ニ遅ク同席シ居リタル日本語ヲ解スル日本課長ハ直ニ筆記シ出シタル次第ニモアリ已ムナク使節ヲ

シテ語ヲ繼カシメタル次第ナリ

488

昭和15年10月29日

在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭印間支払協定の締結交渉開始方請訓

別電

昭和十五年十月二十九日發在バタビア齋藤總領事より松岡外務大臣宛會商第一一一号

右協定の要綱

バタビア 10月29日前發

本省 10月29日夜着

會商第一一〇號(極秘、至急)

一、本二十八日今川正金支店長ヨリ管理局長トノ會見談トシテ左ノ通り内報越シタリ

本日午前十時管理局長ヲ訪問セル處内地ニ於テ本行カ米貨買取ヲ回避セル事情ニ付説明ヲ求メタルヲ以テ小生ハ事情精シク承知致シ居ラサルモ世界情勢ノ不安ナル現状ニ鑑ミ當分ノ間米貨買取拒否ノ態度ニ出テタルモノト想像スルモ米貨以外例ヘハ盾ニ對シテハ圓賣應スヘク猶相場ニ關シ不滿アラハ當地ニ於テ個分ノ交渉ニ應スヘキ旨

ヲ回答セリ

然ル處蘭印ノ爲替根本方針トシテ爲替取引ハ總テ米貨又ハ磅ニテ決済スルコトヲ要シ圓對盾ノ銀行間取引ハ禁止事項ニ付内地ニ於ケル盾對圓銀行間取引ハ面白カラサル旨ヲ申出テタリ

依テ小生ハ然ラハ當地ニ於テ管理局經由ニテ圓對盾ノ取引ヲ許容スルコトニシテハ如何ト提案シ實ハ本邦政府代表部ハ日蘭間ノ貿易増進並ニ金融圓滑ヲ計ル目的ヲ以テ兩國間ノ直接決済方法ニ關シ目下立案中ニテ小生ニ内話アリタル旨ヲ告ケタル處密カニ豫期シ居タルモノノ如キ態度ニテ然ラハ右案ハ本邦代表部ヨリ當領政府ニ對シ正式提案アリタク且討議スルコトナラハ双方ヨリ専門家二名宛ヲ選出シ委員會ニ於テ審議致度ク日本案審議中米貨經由ニ依ル從來ノ決済方法ヲ繼續シタキ意嚮ヲ開陳セリ

二、蘭印側力圓對盾直接決済ニ關スル我方要求ヲ容ルルヤ否ヤハ蘭印カ日蘭印間平和關係ノ繼續ヲ希望スルヤ否ヤヲ示ス試金石トナルモノナルニ付急速本問題ヲ蘭印政府ニ提議シ蘭印側ニ於テ之ヲ容ルル場合別電日蘭間支拂要領

ニ基キ大藏省小島及正金今川ヲ専門委員トシテ蘭側専門委員ト審議セシメタキ處貴見折返シ御回電請フ

(別電)

バタビア 10月29日前発
本 省 10月29日夜着

會商第一一號(至急)

日蘭印間支拂協定要綱

一、(イ)日本銀行ハ爪哇銀行ニ盾勘定ヲ設定ス

(ロ)爪哇銀行(Exchange fund)ハ日本銀行ニ圓勘定ヲ設定ス

(ハ)蘭印ニ於ケル爲替銀行カ圓ヲ賣買セル場合ハ其ノ殘高ニ對シ管理局ヨリ「カバー」ヲ求ムルコトヲ要ス

(ニ)日本ニ於ケル爲替銀行カ盾ヲ賣買セル場合ハ其ノ殘高ニ對シ日本銀行ヨリ「カバー」ヲ求ムルコトヲ要ス

(ホ)管理局カ爲替銀行ニ對シ圓ヲ賣却セル場合ハ日本銀行ヨリ盾ヲ對貨トシテ圓ヲ調達スルモノトス

(ヘ)管理局カ爲替銀行ヨリ圓ヲ買取りタル場合ハ圓ヲ對貨トシテ盾ヲ調達スルモノトス

(ト) 日本銀行ト管理局トノ圓對盾ノ交換相場ハ双方合議ノ上決定且變更スルコトヲ得

(チ) 管理局カ賣買セル圓ハ總テ日本銀行ニ於ケル圓勘定ヨリ受拂スルモノトス

(リ) 日本銀行カ賣買セル盾ハ總テ爪哇銀行ニ於ケル盾勘定ヨリ受拂スルモノトス

(ヌ) 日本銀行竝ニ管理局ハ何時ニテモ双方合議ノ上一定相場(ト御參照)ニテ圓對盾ノ相互交換ヲ爲スコトヲ得ルモ毎六箇月ニ其ノ殘高ニ對シ金又ハ相互ニ合意シタル貨幣ヲ以テ決済スルモノトス

(ル) 横濱正金銀行「バタヴィア」支店ハ日本銀行ノ代理店トシテ其ノ事務ヲ代行ス

(オ) 爲替取引ノ取扱手續ニ關シテハ管理局ト横濱正金銀行「バタヴィア」支店協議ノ上決定ス

ニ、本協定ノ有効期限ハ實施ノ日ヨリ一箇年トス
右一箇年後ハ双方共三箇月ノ豫告ヲ以テ廢棄スルコトヲ得

489

昭和15年10月29日
在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭会商に関する蘭印参議会から政府への質問事項について

付記

昭和十五年十一月五日發在バタビア齋藤總領

事より松岡外務大臣宛電報会商第一三一号

右に関する蘭印政府の説明

バタビア 10月29日後發

本省 10月29日夜着

會商第一一二號

一九四一年度蘭印中央政府關係豫算ニ關スル參議會分科會ノ報告ニ依レハ日蘭會商ニ關シ委員側ヨリ政府ニ對シ(一)刻下ノ戰爭狀態及太平洋形勢ノ緊張ニ鑑ミ且又會商カ現ニ進行中ナル關係上會商ニ關スル情報發表ノ少キハ當然ナルヘキモ出來得レハ會商迄ノ歴史其ノ目的基準今日迄ノ經緯及兩國間ノ貿易關係ニ付承知致度シ(二)今次會商ニ關スル本國政府ノ權限カ從前ト異ル所ナク且和蘭及同盟國ノ敵ヲシテ會商ニ依リ直接間接ニ利スルコトヲ得シメサルノ方針ヲ執ルコトノ確認ヲ得タク(三)日獨伊三國同盟ハ日本ノ東亞ニ於

ケル指導權ヲ認メ居ルカ如キ處右ハ會商ノ趣旨ニ反セサル
カ其ノ會商ニ對スル影響竝ニ和蘭及蘭印政府ノ同盟ニ對ス
ル見解ヲ承知致度シ等ノ質問ヲ發シ居レリ

(付記)

バタビア 11月5日後發

本省 11月6日前着

會商第一三二號

往電第一一二號ニ關シ

政府ノ回答要領左ノ通り

一九三七年ノ石澤「ハルト」協定ハ成立當時ノ關係ヲ「コ
ンソリデート」スルト共ニ兩國ハ相互貿易關係ノ良好ナル
發展ヲ計リ殊ニ日本側ハ蘭印ノ所謂弱性物產ノ買付増進ニ
努ムヘキコトヲ約セルカ右協定ノ運行ハ日支紛爭勃發ノ關
係モアリ不満足ナル狀態ヲ辿リ前記弱性物產ノ輸出ハ却テ
硬化セリ

而シテ兩國通商關係ニ關シ不滿ヲ抱ケルハ單ニ蘭印ノミナ
ラス日本側ニ於テモ一定ノ變更ヲ希望シ特ニ蘭印ノ或種物
產買付ニ多大ノ關心ヲ有シ且又兩國代表ノ經濟交渉ニ於テ

諸種ノ問題ヲ議セントノ希望ヲ表明シタルニ對シ和蘭及蘭
印側ニハ左シタル異議ハ無ク九月十二日日本代表部ノ到着
ト共ニ今次會商ハ開始セラレタルモノナルカ右ハ兩當事者
ノ明確ナル意思表示ニ依リ經濟問題ニ限ラレ政治關係ニハ
觸レサルモノナリ

種々ノ情勢ノ結果トシテ會商第一期ハ未タ具體的結果ヲ齎
スニ至ラス從テ現在發表シ得ルモノ少キモ特定ノ問題ニ付
最終的段階ニ至ラハ改メテ發表スヘシ

蘭側ハ代表首席カ國王ニ依リ任命セラレタルノ事實ニ依ル
モ今次會商カ平常通り本國政府ノ指揮下ニアルコト明カニ
シテ尙日本トノ通商關係ヨリ直間接ニ敵カ利益ヲ受ケルカ
如キコト無キ様不斷ノ注意ヲ拂ヒ居ルハ勿論ナリ

三國同盟ニ關シテハ政府ハ新聞「ニユース」ニ依リテ知ル
所ナルカ之ニ對シ充分ノ注意ヲ拂ヒタルハ勿論ニシテ和蘭
代表部ハ直ニ日本ノ大東亞指導權カ蘭印ニ及フモノト解ス
ルヤ否ヤヲ確メタル處日本側ハ右條約カ日蘭印關係ニ何等
ノ變更ヲ及ホスモノニ非スト聲明シ又口頭ニテ蘭印ニ於テ
指導權ヲ企圖シ居ラサル旨ヲ述ヘタリ

從テ此ノ意味ニ於テ會商ハ同盟條約ノ影響ヲ蒙ルノ必要

ナシト雖右條約ノ結果タル日獨關係ハ特ニ獨逸ニ對スル直接利益ノ防止ノ意味ニ於テ政府ノ常ニ注意スル所ナルカ今日迄ノ處日本側ニ於テハ獨逸ニ對スル利益ヲ企圖シ居ルノ模様ナク從テ政府ハ情勢今後ノ進展ヲ注視スル一方純經濟交渉ヲ續行シ得ヘシトノ意見ナリ

尙政府トシテ蘭印ニ於ケル特定國ノ發言權ヲ意味スル新秩序及蘭印ヲ亞細亞「ブロック」内ニ封鎖スルカ如キ世界經濟ヲ排撃スルハ言フ俟タス蘭印ニトリテハ内部的ニ完全ナル主權ヲ維持スルト共ニ戰爭ニ依リ交通斷絶セサル世界各部トノ良好ナル經濟關係ヲナルヘク廣ク且無差別ニ維持スルコト絶對必要ニシテ亞細亞隣國トノ交通關係ノ發展ハ蘭印經濟政策上ノ一重要目的ニハアルモ政府トシテハ他國トノ協力上相手國ニ對シ特惠的地位ヲ認ムルカ如キ協力ハ之ヲ排斥ス

490 昭和15年10月29日

在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

蘭印石油対日売買に関する石油会社の最終提
示条件について

會商第一一三號

燃料局⁽¹⁾長官へ向井ヨリ

買油條件左ノ通り確答アツタ

一、數量

往電第六四號御參照東京契約ノ分合計五十八萬噸往電第六五號御參照當地新規契約分合計七十二萬六千五百噸右數量以上各種トモ絶對増量承知セヌ當地石油會社ハ内地販賣割當數量ヲ昭和十年數量ニ復歸方切望シ居レリ

二、契約期間

本年十一月一日ヨリ起算シ六箇月以上承知セヌ但シBPM社航空原油十二萬噸普通原油三十六萬噸ハ一箇年トス
三、値段

積地FOB米貨建トシ此ノ算出方法ハ積出シ當時「カリフォルニア」積米國油日本CIF相場ヨリ運賃保險料ヲ差引キタルモノニ依ル尙日米間及日蘭印間船賃ノ相違ヲ前者ノ四十%トシ一英噸(二二四〇封度)ニ對シ最低二弗七十仙ヲ左記各品種ノFOB値段全部ニ加算ス各品種別

バタビア 10月29日後発
本省 10月29日夜着

條件左ノ通り

(イ) 原油

「ケットルマン」原油「ボーム」⁽²⁾產十九度乃至三十九度「カリフォルニア」FOB 値段ヲ基準トス右ハ加州「スタンダード」社公表山元値段ニ「バイブライン」諸掛ヲ加ヘタルモノニテ蘭印石油會社ハ一「バーレル」ニ付米貨十二仙トナルヘシト言フ尙「ボーム」一度毎ニ一「バーレル」ニ付米貨二仙ヲ加減ス
(ロ) 「スペシアルタラカン」

「タラカンヂーゼル」油ヨリ一英噸ニ付米貨一弗高

(ハ) 石油製品ハ凡ヘテ「プラッツオイルグラム」發表ノFOB「ガルフ」中値輸出値段ニ依ル

(ニ) 六九―七〇「オクタン」直流「ガソリン」

前記「ガルフ」相場ニ對シ品質「プレミアム」トシテ一米「ガロン」ニ付米貨一仙高

(イ)⁽²⁾_(四)^(カ) 荷受及積出契約品ノ積込ハ賣人側設備ニ依リ輸送ハ買人船舶ニ依ル船形ハ大體一萬二千噸級ト豫定シ居レリ然ルトセハ二港積(新嘉坡「ピリトン」ヨ含ム)ノ場合多カルヘク若シ一港積希望ノ場合ハ別ニ一英噸ニ付左ノ貯賃ヲ

要ス

原油米貨一弗七仙

「ライトプロダクト」米貨七二仙

「フューエル」油ハ積地狀況ニ依リ米貨一三仙半及三七

仙

以上當地貯油能力不足ニ付積出ヲ嚴重ニ履行スルコト

五、支拂

BPM 社ハ七五%米貨二五%盾拂ノコト NKPM 社ハ全部米貨右ハ積荷一週間前ニ最短一箇月有效ノ「イレボカブル」信用狀發行ノコト

六、(イ) 前記契約條項承諾ノ上ハ「バタヴィア」ニ於テ覺書ヲ交換シ一般の條件ヲ含メ日本ニ於テ正式調印シタシト

言フ

(ロ) 契約期間中 BOM 品ハ和蘭交戰國ニハ積出ササルコト
(ハ) 既契約原油及「ガソリン」中既ニ積出シ済ミ又ハ十一月一日前迄ニ積出セラルヘキモノニ對シテモ本契約條件ヲ適用ス

右條件ニ對シ至急回答アリタシ
尙日本ニ於テ契約セル分モ當地條件ト同一ナルコトヲ要求

シ居レリ

491 昭和15年10月29日

在バタビア齋藤総領事より
松岡外務大臣宛(電報)

蘭印石油対日売買に関する最終条件は受諾の
ほかなく至急契約締結方請訓

バタビア 10月29日後発

本省 10月29日夜着

會商第一一四號

往電會商第一一三號ニ關シ

燃料局長官へ向井ヨリ

現状ニ於テ賣入條件ヲ承認シ至急契約締結ノ外無シト思考
ス貴地契約ノ分モ當地覺書ニ調印スル必要アル故此ノ分モ
含メ當方へ指圖アリタシ

尙支拂ニ付テハ當方ヨリ全部盾拂主張セルモ承知セス

492 昭和15年11月4日

松岡外務大臣より
在バタビア齋藤総領事宛(電報)

日蘭印支払協定案につき訓令

會商第四八號

貴電第一一一號ニ關シ

關係省及正金當局ト協議左記一ノ通り「日本、蘭印間支拂
協定案」ヲ作成セルニ付左記二ノ參考事項御參照ノ上至急
貴地正金支配人ヲシテ爪哇銀行ニ提議セシメラレタシ
一、日本、蘭印間支拂協定案

(一) 本協定ハ橫濱正金銀行、爪哇銀行間ニ締結ス

(二) 橫濱正金銀行ハ爪哇銀行盾貨ヲ以テ爪哇銀行ハ橫濱正

金銀行ニ圓貨ヲ以テ當座勘定ヲ設定ス

右勘定ハ何レモ無利息トス

(三) 兩銀行間取引ハ總テ圓。又ハ盾ニ限ル

圓對盾ノ爲替相場ハ兩銀行協議ノ上決定ス但シ合議ノ
上變更スルコトヲ得

(四) 兩銀行力相互ニ相手國ニ於テ資金ヲ必要トスル時ハ相
手銀行ノ勘定ニ決定相場ニテ自國貨ヲ入レ右資金ヲ調
達スルモノトス

相手銀行ハ右ノ要求アリタル場合ハ何時ニテモ之ニ應
スルコトヲ約ス

本省 11月4日後7時50分発

圓、盾兩勘定ハ何時ニテモ兩銀行合議ノ上前項ト同相場ニテ一部又ハ全部相殺ヲ爲スコトヲ得

(五)兩銀行ハ本協定締結ノ日より毎三ヶ月ニ債務額殘高ニ對シ金又ハ相互ニ合意シタル通貨ヲ以テ決濟ヲ爲スモノトス

右決濟ノ實行ニ關シ兩銀行ハ兩國政府ヨリ得タル確認書ヲ豫メ相互ニ交換ス

(六)本協定ノ有効期間ハ實施ノ日より一ケ年トス

本協定ハ双方合議ノ上三ヶ月ノ豫告ヲ以テ廢棄スルコトヲ得

二、參考事項

(一)本協定ノ當事者ヲ正金及爪哇銀行トセル理由ハ兩國間ノ貿易カ急激ニ活潑トナレル實情ニ即應スル爲國內ノ面倒ナル諸手續ヲ省略シ迅速ニ協定ヲ成立セシメンカ爲ナリ(日本銀行、正金間並ニ蘭印爲替管理局、爪哇銀行間ノ必要ナル取極メハ各國内の事項トシテ決定セラルヘキコト)

(二)本協定ハ兩國間取引ヲ正金及爪哇銀行ノ「チャンネル」ヲ通シ一元的ニ清算スルコトトナルカ是レ兩銀行

ニ於テ當然考慮スヘキコトナルヲ以テ特ニ協定條項ニ挿入セス(即チ本協定成立スレハ日本内地ノ爲替銀行(外國銀行ヲ含ム)ノ對蘭印取引ニ依ル賣買直先「カバ」ヲ總テ正金ニ集中セシムル爲國內的措置ヲ取ル必要アルコト其一例ナリ)

(三)正金ハ兩國間貿易狀況ニ依リ蘭印ニ於テ盾資金ノ缺乏ヲ生スル時ハ蘭印ニテ圓賣盾買ヲ爲スコトアルヘク蘭印銀行モ亦盾賣圓買ニ依リ圓資金ヲ調達スルコトアルヘシ

(四)兩銀行間相互ニ債務限度ヲ設定スル要アルカト思考スルモ差當リ之ニ觸レ居ラサルニ付御含置カレ度



493

昭和15年11月6日 在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

対日為替措置や錫の対日売却制限問題に関する
ホーフストラテンとの会谈内容報告

バタビア 11月6日後発
本省 11月7日前着

會商第一三三號

往電第九八五號及第九八六號ニ關シ⁽¹⁾

五日齋藤「ホ」通商局長ト會見「スラビンタナ」會談以來
蘭側誠意ヲ疑ハシムルカ如キ不愉快ナル事項十指ニ剩リ貴
政府ノ措置極メテ遺憾ナルモノアリト述ヘFOB及錫賣却
制限問題ヲ切り出シタルニ

一、「ホ」ハ蘭側カ唐突ニFOB爲替ノ措置ニ出テタルハ
元々日本側ノ挑戰の態度ニ依ルト言フモ過言ニアラス例
ヘハ日本ニ於テ蘭商カ圓資金ヲ調達セントスルモ米貨買
取ヲ拒否シ居レルカ右ハ蘭印ノ爲替制度ヲ根本的ニ覆ス
舉ナリト言フヘシト反撥シ來レルニ付齋藤ハ日本側ノ右
ノ措置ハ米國カ我方ノ蘭印物資買付ヲ妨害セントスルニ
對抗シテ自己防衛ノ爲而モ百%善意ニ出テ他ニ何等他意
ナキ措置ニシテ其ノ間ノ事情ハ貴方ニ於テ萬々承知ノコ
トト思考ストテ米國側ノ蘭勘定ヘノ受入拒絶振ヲ縷々説
明シ強ク蘭側ノ驕意方要求シタルニ「ホ」ハ米國ノ右措
置ハ初耳ナルモ斯カル事情ハアリ得サルコトナリト頑
トシテ信セス齋藤ヨリ然ラハ自分ノ言ニシテ事實ナルコ
ト判明セハ貴方ニ於テ我方ノ善意ヲ認メ「スラビンタ
ナ」會談以來ノ反日的各措置ヲ取消サルル用意アリヤト

質シタルニ「ホ」ハFOB爲替制ハ多年ノ研究ニ屬シ蘭
船保護竝ニ蘭貨安定ノ見地ヨリ今回已ムヲ得ス實施ニ移
シタルモノニシテ今更取消等ハ不可能ナリ

加之⁽²⁾一九三七年日本側輸出組合ニ於テハFOBノ實績ヲ
有スルモノニ對シテハ割當ヲ與ヘCIFノ實績ハ之ヲ認
メサリシト共ニ又最近大阪商人ノ蘭商壓迫(往電第一〇
〇一號末段)ノ事實アルヲ想起サレタシトテ讓ラス次テ

二、錫鑛四百五十噸ノ輸出方(會商往電第一〇四號)ニ關シ獨
逸向ケ再輸出ノ絶對アリ得サルヲ強調シ速ニ許可方説得
シタルモ「ホ」ハ納得セサリシニ依リ齋藤ハ帝國總領事
ノ證明ヲ不可トセラルヤト質シタルニ「ホ」ハ回答ニ
窮シ小林大臣カ日本側トシテハ獨逸ノ敗北ヲ坐視シ得ス
ト兩度繰返ヘサレタル所ヨリスルモ若シ獨逸ノ敗北歴然
タル場合ハ日本ハ必ス錫、護謨等ヲ之ニ供給シテ援助ヲ
與ヘラルヘシ錫ノ對獨再輸出ハ絶對ニ爲ササルノ確約ヲ
兩國代表部間ノ話合ノ形ニ依リ保證セラレタシト逃ケタ
ルカ齋藤ヨリ猶モ縷々説得ニ努メタル結果「ホ」ハ錫問
題ニ付テハ「ファンモーク」トモ更ニ良ク相談シテ何分
ノ回答ヲ爲スヘシト折レタルモ兎ニ角速ニ一般問題交渉

ニ移リ度ク其ノ上ニテ此ノ種案件モ討議決定シ度ク希望
スル旨述ヘ居タリ

494

昭和15年11月6日

在バタビア齋藤総領事より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭印支払協定案のわが方提議に対しジャワ
銀行総裁は蘭印政府へ正式提案あるよう回答
について

バタビア 11月6日後発
本省 11月7日前着

會商第一三四號

貴電第四八號ニ關シ(日、蘭印間支拂協定締結方ニ關スル
件)

本日正金今川ヲシテ爪哇銀行總裁ヲ訪問支拂協定案ヲ提出
致度旨ヲ告ケシメタル處同總裁ハ豫期シ居リタルモノノ如
キ態度ニテ爪哇銀行カ本件ヲ取上ケ且討議スルコトハ同行
ノ職制ニハ之ナク當領ノ爲替政策ハ爲替管理條例ニ基キ政
府機關タル管理局最高諮問委員會(爪哇銀行總裁經濟省長
官財務省長官ヨリ成ル)ニ依テ決定セラルヘキモノナルヲ

以テ本件ハ帝國政府代表ヨリ正式ニ蘭印政府へ提案アリタ
シト答ヘタルニ依リ今川ハ貴下ハ諮問委員會ノ有力ナル一
人ナルニ付充分ノ御考慮ヲ願ヒタク且本件ニ對スル私見ヲ
伺ヒタシト述ヘタル處同總裁ハ私見トシテ日本側ノ立場ハ
充分了解スルニ付交渉ニハ異存之ナク現行以外ノ何等カノ
決裁方法ヲ考慮スル餘地アリ但シ「クレデツト」設定ハ考
慮ノ餘地ナキ旨答ヘタル趣ナリ
就テハ蘭印政府ニ正式申入レヲ爲ササルヲ得サル次第トナ
リタルニ付左様御了承置キ相成度シ

495

昭和15年11月9日

在バタビア齋藤総領事より
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭印支払協定交渉の開始や蘭印石油対日供
給量などに関する蘭側との会谈内容報告

バタビア 11月9日後発
本省 11月9日夜着

會商第一三九號

⁽¹⁾ 八日齋藤、太田「モ」及「ホ」ヲ往訪シ貴電第四八號訓
令ヲ執行セントシタル處劈頭「モ」ハ八日附同盟電

(日々新聞ノ日本ノ最終目標ハ白人ノ壓迫及強力ヨリ東亞ニ於ケル被壓迫民族ヲ解放スルニアリトノ社説)ヲ示スト共ニ蘭印ノ砂糖業ヲ獲得セヨト爲ス九月七日附「糖業」論文ヲ引用シ此ノ種論文カ公表サルル場合如何ニ蘭印民衆ノ激昂ヲ買フヤハ言フ迄モナク縱シ掲載禁止ト爲スモ他國新聞ヨリ一般民衆ハ之ヲ承知スヘク其ノ際ニ於テ政府ハ全ク困難ナル立場ニ陥ルヘシト苦情ヲ述ヘタルニ付此ノ種論說ノ現レタルモ蘭印政府カ我方數次ノ注意ニモ拘ラス當地ニ來レル新聞記者ノ取扱ヲ謬リタルカ爲ノ反動ニ因ルコト多カルヘク而シテ發表セラルルヤ否ヤハ貴方ノ御隨意ニ願ヒタシト應酬シ置キタリ

三、次イテ圓對盾ノ直接決濟問題ニ入りタルニ「モ」ハ本邦ニ於テ圓ノ代リ金トシテノ弗買上ヲ突如停止セラレタルハ極メテ不満足トスル所ニシテ本件ニ關シテハ事前蘭印側ニ全然御話ナク且日本側ノ意圖何レニアリヤヲ承知セサル爲決濟方法再檢討ノ意嚮ハアリシモ其ノ方法ニ迷ヒ居ル次第ナリトテ不服氣ニ述ヘタルニ付我方ヨリ弗買問題ハ「プライマリリー」ニ日米間ノ問題ニシテ從テ兩國銀行間ノ解決ニ俟ツヘキモノナルヲ以テ第三國側ニ通達

スヘキニアラスヤトノ見解ヨリ出テタルモノト思考スト答フルト共ニ往電第一三三號「ホ」ニ對スル説明ト同様趣旨ヲ繰返シタルニ「モ」モ漸ク了解シタルニ付然ラハ直接決濟ニ關スル日本側提案ハ考慮セラルル用意アリヤト質シタルニ然ルヘキ旨答ヘタルヲ以テ冒頭貴電ノ案ヲ手交セル處「モ」ハ一讀ノ上爲替局長トモ協議スヘシト答ヘタリ仍テ我方ヨリ専門の事項ニ付テハ正金今川及大藏省小島ト貴方専門家トヲ協議セシメタシト述ヘ置キタリ

三、⁽²⁾其ノ際「モ」ハ小林使節到着後二月ニナラントシテ未タ双方一般案件ヲ突合ス迄ニ至ラサルコトニ關シ種々苦情及苦衷ヲ述ヘ總督ヨリモ此ノ點ニ對スル確然タル日本側意嚮ヲ確ムヘキ旨命令アリト言ヘルニ付我方ヨリ一般問題ニ付テハ目下急速ニ準備ヲ進メ居ルモ右案件ニ付テハ帝國政府ニ請訓セサルヘカラス大體ノ見込トシテ二週間モ經レハ提案ノ運ニ至ルヘシ我方代表部トシテハ小林使節ノ歸還又ハ同使節歸還セストセハ別ノ特派使節任命ヲ待チ居ル次第ナルカ貴方ニ於テハ現在ノ我代表部態勢ノ儘ノ會商續行ヲ可トセラルルヤ或ハ又特派使節ノ歸還又

ハ任命ヲ希望セラルヤト尋ネタル處「モ」ハ直接答ヘサリシモ「ホ」ハ横ヨリ從來ノ交渉ノ如ク帝國總領事ニ於テ交渉ヲ繼續シ行ケハ如何ト述ヘタルニ付本件會商ハ總領事ノ扱フニハ餘リニ重大ニシテ國務大臣ヲ特派シタル理由モ此處ニアリト答ヘ之ヲ一蹴シタルニ「モ」ハ一日モ早く一般交渉ニ移リタシトクドクト述ヘ次第二依レハ一旦會商ヲ打切ルコトモ蘭印側ニ於テ考慮シ居レリト洩シタリ

四、更ニ石油問題ニ入り我方ヨリ數量増加ハ此ノ上考慮スマシキヤト述ヘタルニ「モ」ハ過日ノ回答ハ決定的最終言ナリト答ヘ市場振替モ考慮ノ餘地ナキ旨述ヘタリ

496

昭和15年11月13日 在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

蘭印石油の売買契約成立について

付記 右契約内容

會商第一五二號(至急)

バタビア 11月13日後発
本省 11月13日夜着

燃料局長官へ向井ヨリ

十二日買油覺書數量品種値段條件前電通りニテ「イニシア
ル」濟代表部ヨリ直接間接多大ノ援助ヲ受ケタルニ拘ラス
數量品種其ノ他極メテ不満足恐縮ノ至リナルカ最善ノ努力
ハ盡シタル積リニ罷在リ御了承願度シ

(付記)

石油買付覺書内容

(一九四〇年(昭和十五年)十一月十二日向井
代表「ローヤル、ダッチ」及「スタンダー
ド」代表者トノ間ニ調印)

一、新規買付

七二六、五〇〇噸

二、曩ニ東京ニテ買付セルモノ

五八〇、〇〇〇噸

計 一、三〇六、五〇〇噸

備考、右以外ニ當時東京ニテ現物買付ヲ爲シタル數量四萬
九千噸アリ、又「ローヤルダッチ」ノ販買機關タル「ラ
イザングサン」及「スタンダード」社ノ日本支店ガ日本
内地ニ於テ販賣シ得ル割當量六十五萬噸ニ就テハ燃料局
ト右「ラ」及「ス」社トノ間ニ別ニ契約スルコトナリ

タルヲ以テ我方ノ獲得シ得ベキ石油總量ハ合計二、〇〇五、五〇〇噸ニ達シタリ

497

昭和15年11月16日

松岡外務大臣より
在バタビア齋藤總領事宛(電報)

日蘭会商における石油問題以外の一般提案を
至急提出方パプストより口上書手交について

本省 11月16日後8時30分發

會商第六〇號

十五日「パ」公使阪本局長ヲ來訪本國政府ノ訓令ナリトテ
日本代表部ノ蘭印滞在既ニ二ヶ月トナルニ拘ハラス未タ石油以外ノ一般的提案ヲ示ササル處蘭側トシテハ日本側要求ハ慎重檢討ノ要アルニ付至急提出ヲ希望ス若シ右不可能ナラハ蘭側トシテハ代表部間交渉ヨリハ寧口總領事トノ交渉ヲ希望スル旨ノ口上書ヲ手交セリ本問題ニ關シテハ目下研究中ナルモ不取敢

498

昭和15年11月21日

松岡外務大臣より
在バタビア齋藤總領事宛(電報)

新代表を近日中に任命し同代表のバタビア到着後に一般提案を提出する旨パプストへ口上書手交について

會商第六六號

往電第六〇號ニ關シ

二十日附口上書ヲ以テ帝國政府ハ小林使節ノ後任ヲ近日中ニ任命スヘキ旨及我方ノ提案ハ新使節到着ノ上提出スヘキ旨回答シ置ケリ

499

昭和15年11月21日

在バタビア齋藤總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

錫やゴムなど蘭印産品の対独再輸出がなきよ
うわが方保障を蘭側要求について

バタビア 11月21日後發

本省 11月21日夜着

會商第一七八號

二十一日齋藤「ホ」ヲ往訪シ錫鑛石四百五十噸買付ノ件ニ付話合ヒタル處本件ハ會商一般「アゼンダ」提出後更メテ

協議致度シト述へ居リタルカ其ノ際「ホ」ハ產出國ノ何レヲ問ハス錫、護謨、「コプラ」ノ對獨輸出ニ言及シクドクト日本側ヨリノ保障ヲ得度キ旨述へ居タリ
右再輸出保障問題ハ會商「アゼンダ」提出後一般問題ノ討議ノ際モ必ス問題トナルヘク我方ニ於テ是非共必要物資ノ買付ヲ確保致度キ希望ナレハ右保障モ之ヲ與ヘサルヲ得サルモノト思考セラル

~~~~~

500

昭和15年11月22日

在バタビア齋藤總領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

# 日蘭会商における石油問題以外の一般提案の

## 提出時期につき意見具申

別電

昭和十五年十一月二十二日発在バタビア齋藤

總領事より松岡外務大臣宛会商第一八〇号

右一般提案の前文案

バタビア

11月22日後発

本省

11月22日夜着

會商第一七九號

一般「アゼンダ」ニ付テハ大體整理ヲ完了セル處右ハ外務

省作成ノ所謂參考案ト大差ナク前文ハ別電第一八〇號ノ通り作成セリ各項目ニ付テハ茲ニ電報スルニ及ハスト思考ス本件「アゼンダ」提出ハ往電第一二九號ノ通り本會商ニ對シ帝國力眞面目ニ且權威ヲ以テ臨ム證左トシテ有力ナル使節ノ任命ヲ待テ行フヘキ筋合ナルカ使節任命ニ付テハ何等政府ノ意嚮當方ニ判明セス當惑シ居ル處果シテ任命之ナキニ於テハ往電第一三九號及貴電第六〇號ノ次第モアリ石澤到着後速ナル機會ニ於テ先方ニ提示致度所存ナリ

提案全文ハ二十三日當地發淡路山丸ニテ歸朝ノ鈴木總領事ニ托送スルモ蘭印側ハ之ニ對シ自己ノ提案ヲ爲シ結局双方案ヲ突合セシタル上本式ノ交渉ニ入ルモノト認メラル本會商ヲ飽迄平和的ニ進行セシムル趣旨ヨリ合意ノ上「アゼンダ」發表セサルコトト致度尙情勢如何ニ於テハ我方原案ヲ發表スル必要モアルヘキ點ヲモ充分考慮シ居レリ

(別電)

バタビア

11月22日後発

本省

11月22日夜着

會商第一八〇號

## 對蘭印要求案

蘭領印度ノ廣大ナル地域中ニハ資源豐富ニシテ而モ人煙稀ナル未開發地極メテ多ク今後ノ開發及發展ニ俟ツヘキ範圍甚大ナリ而シテ之ヲ開發ノ促進ハ獨リ日本ノ切實ナル關心事タルノミナラス實ニ世界ノ福祉増進上ノ關心事タリ

惟フニ日蘭印ハ之ヲ地理上ハ勿論歷史上ヨリ見ルモ其ノ關係頗ル深く且經濟的ニハ相互依存ノ立場ニ在リ兩者ノ密接關係強化ノ必要性ハ言ヲ俟タサル所ニシテ帝國政府ハ兩者ノ關係ヲ共存共榮ニ基ク理想的ノモノタラシメンコトヲ希望スルモノナリ然ルニ蘭印政府ハ開發能力大ナル日本人ノ蘭印内ニ於ケル經濟活動ニ對シ實際上少クトモ機會均等主義ニ反スト見ラルルカ如キ態度ヲ取り來リ帝國政府ノ屢指摘シ蘭印政府ノ反省ヲ促シ來レル所ナリ而シテ今日ニ至ル迄満足スヘキ結果ヲ得ルニ至ラス帝國政府ハ茲ニ蘭印政府ノ理解アル態度ヲ要望スルモノナリ

貿易ニ付テハ帝國政府ハ蘭印政府ニ對シ曩ニ在京「パプスト」公使ヲ通シ交渉セラレタル十三品目ノ對日輸出ノ勵行方ニ付茲ニ再ヒ注意ヲ喚起スルト共ニ兩者間貿易ヲ益々促進スルコトニ付蘭印側ノ一層ノ協力ニ俟タントス

幸ニシテ今次會商ニ於テ入國、企業、貿易其ノ他ノ諸問題ニ付事態ノ改善ヲ見ルニ至ラハ日、蘭印間友好關係ヲ更ニ緊密化スルコト及世界ノ福祉増進ニ寄與スル所極メテ大ナルヲ疑ハス

即チ帝國政府ハ右趣旨ニ基キ左ノ要求ヲ提出スルモノナリ

501 昭和15年11月22日

在バタビヤ齋藤總領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

## 横浜正金銀行・ジャワ銀行間で日蘭印支払協定の交渉開始について

バタビヤ 11月22日後発

本省 11月22日夜着

## 會商第一八二號

往電第一三九號第二項ニ關シ

本二十二日「ホ」太田ヲ來訪シ口上書ヲ提示シ「ジャヴァ」銀行及正金間ノ交渉問題ト致度キ旨申出テタルヲ以テ太田ヨリ之ニ同意ヲ與ヘタリ

仍テ兩者間ニ直ニ交渉ヲ開始スヘシ



502

昭和15年11月24日

在バタビア齋藤総領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

日蘭会商の一時中止を蘭側提議について

バタビア 11月24日後発

本省 11月25日前着

會商第一八三號

(1) 二十三日午前「ホ」ハ太田ニ對シ今日迄會商ラシキ會商ナ  
キニ拘ラス小林使節ノ解任ヲ見未タ後任モ決定シ居ラス然  
モ後任到着後ニ非レハ一般問題ヲ討議セストスルカ如キ狀  
態ハ蘭印政府ノ威信ヲ損スルコト甚シク且目下兩代表部間  
ニ交渉懸案ナキヲ以テ新使節到着迄會商ヲ中止スル旨公表  
致度キ處右ニ關シ我方ノ同意ヲ得タキ旨述ヘタリ  
之ニ關シ太田ヨリ本件ハ重要且極メテ機微ナル問題ナルヲ  
以テ齋藤トモ協議ノ上夕刻何分ノ沙汰ラスヘキ處今日迄買  
油及石油「コンセツション」問題竝ニ支拂協定問題ニ付討  
議シ來リ現ニ後者ニ問題ニ付交渉ヲ要スル次第ニテ貴方ノ  
云フ如キ會商ラシキ仕事モナシ來ラス且現ニ交渉案件ナシ  
トスルハ當ラサル旨ヲ以テ應酬シ置キタリ  
後刻「ホ」來訪シ小林使節解任新使節未タ任命セラレサル

狀態ニ鑑ミ且第二代ナル齋藤ノ出發ニモ照シ經濟交渉ヲ  
一時中止スルコトセリトノ趣旨ノ共同「コンミユニケ」  
發表方ニ付同意方申出テタルヲ以テ午前ノ申出ト相違アル  
ハ如何ト尋ネタルニ對シ後任ノ何人ナルヤ又到着時期全然  
豫見シ難キヲ以テ「一時中止ス」ヘキコトニ變更セリ

(2) 蘭印側トシテハ小林使節力其ノ使命ノ一部スラ遂行スルコ  
トナクシテ歸任セラレ殆ト開店休業ノ狀態ニ長ク置カルル  
カ如キハ對内對外關係ニ於テ威信ヲ損スルコト甚タシク此  
ノ上日本側ノ勝手ナル態度ニ服スルカ如キハ堪エ得ラレス  
トテ縷々不満ヲ述ヘタル後「コンミユニケ」ノ要旨ニ付テ  
ハ總督ノ内諾ヲ得居ル處之カ訂正方ニ付テハ御相談ニ應ス  
ヘシト語レリ

右ニ關シ本提案ハ殊ニ現在ニ於テハ極メテ重要問題ニテ寧  
ロ在京「パ」公使ト外務省トノ外交交渉問題トナスヲ適當  
トスルモノナルカ日本政府ノ訓令ニ俟ツニ非サレハ如何ト  
モ意見ヲ述ヘ難ク恐ラク政府ハ斷シテ同意セサルヘシト答  
ヘタリ

尙先方ハ日本側ノ同意ヲ得ラレサルニ於テハ蘭印政府獨自  
ノ見解ヲ公表セサルヘカラサルニ立到ルヲ恐ルルモ右ハ極

メテ非友好的ナルヲ以テ出來得レハ共同「コミュニケ」  
ノ形式ヲ採リ度シト附言セリ

503

昭和15年11月25日

在バタビア齋藤総領事より  
松岡外務大臣宛（電報）

向井石油業者代表の帰朝について

バタビア 11月25日後発

本省 11月25日夜着

會商第一八五號

陸軍次官ニ中山中佐ヨリ

向井代表ハ十一月二十三日「バタヴィア」發歸朝ス石油問  
題ニ付收穫アリトセハ一二同氏ノ能力ト迫力ニ歸ス深ク慰  
勞セラレタシ